魔法少女リリカルなのはStrikerS…蘇りし黒き堕天使

しんたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ…蘇りし黒き堕天使

【Ｎコード】
Ｎ０５５８Ｓ

【作者名】
しんたろう

【あらすじ】
この物語はとある傭兵に戦う術を仕込まれた一人の男の話です。ガンダムとの戦いに敗れ戦死した男は魔法の世界で復活しこの世界を破壊と殺戮そして恐怖のどん底に落としてしまいます。

プロローグ（前書き）

どうも、はじめましてしんたろうです。

一番始めなんで注意書きをしときます。この物語は原作の主人公たちをとことん傷めつけます。「俺の嫁に何をするんだ？ッ！」と言う人がいれば回れ右をしてもらって構いません。反対に「もっとやれやれ」的なドSの方は読んでください。

プロローグ

コロニー型外宇宙探索航行船『ソレスタルビーイング』…この全長数キロに及ぶ超弩級の宇宙船内には人類の未来を決める量子計算型のスーパーコンピュータ『ヴェーダ』が搭載されていた。

この物語の主人公である一人の男もイノベイター側に着き戦闘を繰り広げていた。むしろ戦いその物を楽しんでいた。

「ハハハ…ッ！！最高だ…ッ！！こうして人の命を奪えるのは…ッ！！」

両手に装備したビームライフルを乱射しながら漆黒のＭＳが次の獲物を探していた。

「レーダーに反応ッ！？あれはガンダムかッ！！」

漆黒のＭＳの計６個のガンカメラが赤く光り獲物である青いガンダムに狙いを定め猛スピードで迫る。

「こんな所でガンダムに巡り会えるとは…沈め？？ッ！！」

漆黒のＭＳが腰に装備したビームソードを引き抜きながら獲物に斬りかかる。

しかし、青いガンダムはそれをスルリと避けると右手に装備した大型の実体剣で漆黒のＭＳを胴から上下水平に切断した。

切断した面からは激しいスパークが起こっている。

「な、何…こ、この俺が…ま、負けただと…ば、バカな…お、俺のMS…も…ガンダム……ッ！！」

男は台詞を最後まで言うまでも無く機体の爆発に巻き込まれ宇宙の塵になってしまった。

次回に続く…

プロローグ（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

次回から魔法の世界に恐怖の男が舞い降ります。

狂気の科学者（前書き）

どうぞお楽しみになってください。

狂気の科学者

？？？？
「う…ここはどこだ…確か俺は宇宙に…いや…むしろあの時、死んだはず…」

男が目を覚ます。周りを見渡すと薄暗い部屋で数台のモニターが照らし出していた。

？？？？
「ようやく目を覚ましたようだね。」

？？？？
「だ、誰だ？貴様は…」

？？？？
「誰だとは失礼だね…私は君の命の恩人ですよ？」

？？？？
「ど、どういう事だ？」

？？？？
「私の研究所で君は傷つき瀕死の状態で倒れていた。それを私の部下がここまで運び私が治療したんだ」

？？？？
「そうか礼を言う…そういえば名前を言っていなかったな…俺はアスカ…スメラギ・アスカだ。」

？？？？

「私はジェイル・スカリエッティです…ところで君からは私と同じ匂いがしますね。」

アスカ

「そうか？」

スカリエッティ

「ええ、私の目に間違いはない。そこでだ…アスカ君…今から私の下で働かないか？」

アスカ

「まあ、俺は構わないぜ…それで俺は何をすれば良いんだ？」

スカリエッティ

「今、私はある研究をしているがそれを邪魔する輩がいてね…」

アスカ

「へえ～で、そいつ等を潰せば良いのか？」

スカリエッティ

「まあ、平たく言えばそうなるな…」

アスカは博士からある資料を渡される。

アスカ

「コイツらか？殺していいのは？」

スカリエッティ

「ええ…時空管理局所属、古代遺失物管理部…通称『機動六課』で

す。」

アスカ
「それにしてもパッと見た感じ女と子供ばっかりだがこんなので本当に楽しめるのか？」

スカリエッティ
「まあ、実力かなりの物だと聞いている。」

アスカ
「了解した…ならば武器…いや、ＭＳをくれ。」

スカリエッティ
「ＭＳとは一体何だね？私は始めて聞いたよ。」

アスカ
「ＭＳを知らないのかッ！？ならば一体ここはどこなんだ？」

スカリエッティ
「まあまあ、少し落ち着いて…説明しましょう…」

博士はこの世界の事を話し始めた。

アスカ
「魔法か…ククク…面白い…じゃあ俺にもそのデバイスとやらをくれ…」

スカリエッティ
「もちろんさ…良いですよ。入って来なさい…」

？？？？
「はい…分かりました」

部屋の扉が開くとそこには体長３０ｃｍ程の小さな女の子がいた。
彼女は色白の柔肌に黒い髪を腰辺りまで伸ばし服は黒基調の中世の貴族服みたいな物にしたミニスカートを穿いていた。

アスカ
「博士…コイツは何だ？俺を嘗めているのか？」

スカリエッティ
「何を言っているんだ…君のデバイスはとても貴重なユニゾンタイプだ…」

アスカ
「ユニゾンタイプと言うことは俺と融合できるのか？」

？？？？
「はい…マスターの仰る通りです。私の名前はルシファー。あなたが乗っていたＭＳその物です。」

その後、アスカはルシファーから詳しく説明を聞かされた。

アスカ
「そう言う事か…これは、ますます面白くなって来たな…」

スカリエッティ
「では契約成立と言うことでよろしいかな？」

アスカ
「もちろんだせ…博士…早いとこおっ始めよう…」

スカリエッティ
「ええ…君のおかげで計画を進めることできる…ククク…」

博士は笑いながら部屋を出て行った。

アスカ
「さあ、俺たちも行こうか?楽しい狩りへとな…」

ルシファー
「了解しました…」

アスカとルシファーも博士の後に続き部屋を出て行った。

次回に続く…

狂気の科学者（後書き）

次回から戦闘シーンを入れて行きます。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

黒き天使現る（前書き）

どうぞお待たせしました。お楽しみになってください。

黒き天使現る

?????

「終わったようだね。みんなお疲れ様ッ!!」

彼女の名前は高町なのは…階級は一等空尉で現在は機動六課のスターズ分隊隊長と新人隊員の育成を兼任している。

今、彼女は新人隊員で作られたフォワードチームを率いてガジェットの反応があった場所で目標のガジェットを掃討を完了し六課に帰投しようとしていた。

なのは
「さあ、みんな帰りましょう!!」

フォワード
「「「「はいッ!!」」」」

みんなが帰投のために準備をしているその時だった。フォワードのリーダーであるティアナ・ランスターが空を指差しながら隊長のなのはに問いかける。

ティアナ
「あの…なのはさん…あれって何でしょか?」

彼女が指を差した方角をみんなで見る。

なのは
「ん?あれは…飛行機…なのかな?」

スバル
「だけど、あんな飛行機は見た事ないですよ…」
首を傾げながら例の飛行機?を見る。その飛行機?は赤い光の軌跡を描きながらこちらの方に向かって来ていた。

エリオ
「あれもガジェットでしょうか…」

キャロ
「しかし、あの赤い光も気になりますね。」

みんながその飛行機?に見入っているとその飛行機?は両主翼に搭載されていた物を彼女たちに向けて発射した。

なのは
「ま、まさか…ッ!!」

彼女の顔が青ざめる。そして大声でフォワード陣に向かって叫んだ。

なのは
「みんなッ!!早く私の後ろに隠れてッ!!」

ティアナ
「どうしたんですかッ!!?なのはさんッ!!」

なのは
「いいからッ!!早くッ!!」

やがて、発射された物体は途中でカバーが外れると大量の小型ミサイルをばら蒔いた。

なのは
「やはり、質量兵器…ッ！！お願い！！レイジングハート…ッ！！」

レイジングハート
『了解…プロテクション』

ミサイルは着弾するが彼女が防御魔法を間一髪で展開したことでフォワード陣を守ることに成功した。

例の飛行機?は彼女たちの上空を高速で通過し途中で旋回して彼女たちの元へ再び舞い戻ってきた。

なのは
「みんな気をつけて…あの飛行機は質量兵器を搭載しているわ！！」

フォワード
「「は、はい…ッ！！」」

彼女たちは次の攻撃に備え構えを取る。しかし飛行機?は空中で変形すると右手に持ったライフルを地上で構える彼女たちに向けた。

ティアナ
「え、へ…変形したッ！？」

スバル
「何なんですか?あのガジェットは見たことないですよッ！！」

なのは
「私もあんなの初めて見たわよ…ッ！！」

変形したロボットの構えるライフルから収束された赤黒い光が放たれる。

エリオ
「な、なのはさん撃って来ました！！」

なのは
「みんな、避けて？ッ！！」

みんなは彼女の声に突き動かされる様に回避した。

キャロ
「キャ？ッ！！」

着弾地点を中心に地面が爆発する。そしてロボットが見下すように地上にいる彼女たちを見ながら言葉を発した。

アスカ
「へぇ～白い奴はなかなか良い動きをしているけど後は全然ダメだな…」

スバル
「しゃ、喋ったッ！？」

アスカ
「当たり前だ…俺も一応人間だからな…」

なのは
「あなたは一体何者なの?こんな事した目的は何なのッ?」

アスカ
「やれやれ矢継ぎ早だな…お前たちがそんな事を知ってどうするよ…」

なのは
「どうするって…あなたを殺人未遂と公務執行妨害の現行犯で逮捕します!!」

アスカ
「ククク…アッハハハッ!!俺を逮捕するか…ッ!!」

なのは
「何がおかしいのッ!!」

アスカ
「ハハハ…こんなに笑ったのは久しぶりだ…だが一言言わせて貰うぞ。お前たちには俺を逮捕できない…」

なのは
「どういう事ッ!?」

アスカ
「お前たちはここで死ぬんだからな…ッ!!」

アスカはGNバスターライフルを再び連射した。

アスカ

「ほらほらどうした!?きちんと避けないと死んじまうぞ?」

なのは
「みんなは下がっててここは私が…ってしまった…ッ!!」

彼女が仲間に気を取られてる間に一気に間合いを詰められた。

アスカ
「馬鹿めがッ!!部下を心配する前に自分の事を気に掛けたらどうだ?右が空いてるぜ?ッ!!」

アスカは彼女のデバイスを蹴り上げた。そして猛スピードでＧＮバスターライフルを構えながらフォワード陣に迫った。

アスカ
「ハハ…ッ!!まとめてお陀仏……ッ!!」

キャロ
「ヒ…ッ!!」

僅か１０歳のキャロは迫る死に対して思わず息を呑んだ。

なのは
「クッ…!!あの子たちをやらせたりはしないッ!!クロスファイア…シュートッ!!」

彼女は大切な仲間を守るために反撃した。それをアスカは飛行形態になることで回避に成功した。

アスカ
「おっと…やるね～白いお嬢ちゃん…」

アスカは人型に戻り彼女と砲火を再び交えているとルシファーが別の魔力反応を感知したのか報告をする。

ルシファー
『マスター…別の魔力反応を感知しました。数は3つです。おそらくは敵の増援かと…』

アスカ
「何？やっとこれから面白くなって来たのによ…」

ルシファー
『しかし、このままでは逆に我々が不利になりかねません…』

アスカ
「まあ…確かにお前の言う通りだな。命があってこその人生だからな…」

アスカは彼女に背を向けると変形した。

なのは
「あ、あなた…どこへ行くつもりッ！？」

アスカ
「どこへって…帰るんだよ…じゃあな…ッ！！」

そう言うとアスカかあっと言う間に空の彼方に消えて行った。彼女たちはそれを黙って見ていることしかできなかった。

次回に続く…

黒き天使現る（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

悪意の眼（前書き）

早くも投稿してみました。お楽しみください。

悪意の眼

ここは機動六課の隊舎内にある会議室…

これからこの会議室では部隊長である八神はやて二等陸佐の召集で緊急のミーティングを開始することになった。

はやて
「えーッと…今回みんなをここに集めた理由は今、巷では私たち管理局員を狙った魔導師狩りが横行しとる…全員知っとるよな?」

フェイト
「ええ…それに関してだけど…犯人は単独犯で、襲った基地や支部で働いた局員全員を殺害しています。」

なのは
「何て酷いことを…」

シグナム
「それについ先日、襲われた基地の防犯映像を入手した。覚悟して見てくれ…」

シグナムの指示で映像が流された。そこには人型のロボットが武装隊員は愚か逃げ惑う非武装の局員に殺戮と破壊の限りを尽くしていた。

キャロ
「う、うぇ…き、気持ち悪い……」

フェイト
「だ、大丈夫ッ!?キャロッ!?」

キャロ
「ご、ごめんなさい…フェイトさん…」

フェイト
「良いのよ…キャロが辛いのはみんな分かってくれているから…エリオ…キャロを医務室までお願いできる?」

エリオ
「はい、任せてください。さあ、行こう…」

キャロ
「ごめんね…エリオくんにまで迷惑かけて…」

エリオ
「別に良いんだよ…気にしないで…」

キャロはエリオに付き添われながら医務室に向かったのだった。

はやて
「まあ、キャロはエリオくんに任せて私たちはミーティングの続きをするで。まずはあのロボットについてやけど……」

なのは
「あ、そのロボットについてだけど…」

はやて
「何や?なのはちゃん…あのロボットに心当たりがあるんか?」

なのは
「あるも何もこの間、アレと交戦したもの…」

はやて
「それはホンマかッ!?」

ティアナ
「それに八神部隊長…あれはロボットではありません…」

はやて
「それはどういうこっちゃッ!?詳しく教えてくれんかッ?」

ティアナ
「あれの中身はおそらく人間です…可能性の話ですが…」

はやて
「じゃあ…あれが人間だと言う何か証拠でもあるんか?」

スバル
「はい…実際にあれは言葉を話します。なのはさんと交戦していた時も…」

なのは
「だから、私が推測するにあれは特殊なバリアジャケットだと思うんだ。」

フェイト
「もし、あれが人だとしてもこんな酷い事を平然とできるんだろうか…」

シグナム
「現にこの世界に奴は存在した…」

ヴィータ
「ああ…人の姿をした悪魔がな…」

なのは
「あの時、私がきちんと逮捕しておけば…こんな事には…」

ティアナ
「それは違いますッ！！なのはさんッ！！」

スバル
「そうですよッ！！なのはさんは何も悪くありませんッ！！」

はやて
「ああ…二人の言う通りや。現に一番悪いのはあの犯人やッ！！」

フェイト
「そうだね。これ以上被害が拡がらない内に逮捕しなくちゃね…ッ！！」

はやて
「それでや。今から私たちは古代遺失物の回収と並行して例の魔導師狩りの犯人の検挙していく。いいなぁ…奴はなのはちゃんにも勝るとも劣らない実力の持ち主やみんな気ぃ引き締めてやッ！！」

「「「了解ッ！！」」」

はやて
「あと、念のために単独での行動は極力控えること…では、これでミーティングは終いにするで。」

みんなは退席し部屋から出て行く。

はやて
「じゃあ、フェイトちゃん…これから本部に行くから車の運転をお願いできるかな?」

フェイト
「うん分かった。任せてはやて…♪」

はやてはフェイトの運転で時空管理局の地上本部へと向かった。そこで二人は別れてはやては本部に入って行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

はやては本部での用事を済ませ外に出てきた。

はやて
「あ、最悪…雨が降ってるやん…」

リイン
「本当ですね～はやてちゃん…どうしましょう?またフェイトちゃんにお願いしましょうか?」

はやて
「そやけどな…迷惑にならんやろうか…?」

二人が困っていると彼女の目の前に一台のスポーツカーが停車した。
そして助手席側の窓が開いた。

そこから顔を出したのは管理局員の制服を着て局員に成り済ました
アスカの姿だった。

アスカ
「おや？お嬢さん、お困りのようですね？」

はやて
「ええ…雨が降っているんで迎えを呼ぼうか悩んでて…」

アスカ
「だったら私が送って行きますよ。」

はやて
「しかし…初対面の方に送ってもらうなんて…」

アスカ
「お気に為さらずに私はこの後は休暇なんで…さあ、どうぞ。」

はやて
「じゃあ…お言葉に甘えさせて頂こうか…リイン♪」

リイン
「そうですね♪ここで断ると失礼ですからね♪」

はやてとリインは車の助手席に座る。

アスカ

「では、行きますね。」

はやて
「はい、お願いします」

アスカは車を発進させた。

アスカ
「で、どちらまで行けばよろしいんでしょうか?」

はやて
「あ、そうでしたね。機動六課の隊舎までお願いします。」

アスカ
「分かりました。そう言えばあなたのお名前を聞いていませんでしたね。」

はやて
「あ、私は八神はやてと言います。あと、この子は私のユニゾンデバイスで…」

リイン
「リインフォース2ですぅ～♪」

アスカ
「あなたは機動六課の部隊長さんでしたか…そんな方とご一緒できるなんて光栄です…」

はやて
「そんな…買いかぶり過ぎですよ…あなたこそ名前を教えてくださ

い。」

アスカ
「私はスメラギ・アスカと言います。あと、私のデバイスもユニゾンタイプなんですよ。」

はやて
「え、ホンマですか？」

アスカ
「ええ…私のデバイスでルシファーです。」

ルシファー
「ど、どうも…／／／／／」

ルシファーは顔を少し出して軽くはやて達に会釈をするとすぐに引っ込んでしまう。

アスカ
「すいません…／／／／／コイツは人見知りが激しいもんで…」

はやて
「いや～可愛いもんじゃないですか～。」

そうこうしている内に車は六課の隊舎に着いた。

アスカ
「おや…もう着いてしまいましたか…美人さんとの楽しいひとときは過ぎるのが早い…」

はやて
「フフフ…アスカさんはお口がお上手なんですね。」

アスカは隊舎の入り口に車を止める。

はやて
「今日は本当にありがとうございました♪」

アスカ
「いえいえ…あなたとお話しできたんで良かったですよ。では私はこれで…」

はやて
「アスカさん！！また会えますよね？」

アスカ
「ええ…運が良ければ…いや…悪ければね…」

はやて
「えっ？それはどういう意味です…ッ！？」

彼女と相棒のリインは訳も分からず首を傾げている。

アスカ
「じゃ、私はこれで失礼させてもらいますよ…」

アスカは彼女の問を無視するように窓を閉めて車を発進させ去って行った。それを見送るはやて…

一方、車内ではアスカが不思議そうな顔をしながら見送るはやてを

まるで獲物を狙うかの如く目付きで睨み付けていた。

アスカ

「いつかお前を斬り刻んでやる…お前は俺の物だ…八神はやて…」

次回に続く…

悪意の眼（後書き）

今回は話だけであまり面白くはなかったと思いますがいかがだったでしょうか？
良ければご意見、ご感想をお待ちしております。

狂気の使徒（前書き）

今回は少し眺めになりました。どうぞお楽しみになってください。

狂気の使徒

ここはジェイル・スカリエッティのアジト…

スカリエッティ
「やはり素晴らしいよ。アスカ君…君のおかげで私の計画と研究も滞りなく進んでいるよ…」

アスカ
「フ、別に気にする事はないぜ…今の俺は博士に仕える身だからな…」

スカリエッティ
「嬉しい事を言ってくれるじゃないか…ところでこの前、君のデバイスを調べていたら新しい武装が見つかったよ…これだ…」

モニターに例の新武装が表示される。

アスカ
「これは…GNバスターライフル、ランチャーモードとエグナーウィップか…懐かしい武装だな…」

スカリエッティ
「どうです？気に入ってくれたかな？」

アスカ
「もちろんだ…早速試して来るぜ…博士はガジェットで管理局の奴らを誘き出してくれ…頼んだぜ…」

スカリエッティ
「ああ…分かったよ…」

アスカ
「じゃあ、行って来る…」

アスカはスカリエッティの部屋から出て行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

フェイト
「ひ、非道い…」

シグナム
「ああ…これは事件っていうレベルの問題じゃないな…」

機動六課、ライトニング分隊のフェイトとシグナムの二人は眼下に広がるおびただしい局員の遺体に愕然としていた。

フェイト
「ねえ…シグナム…ここから二手に別れて生存者を探しましょう…」

シグナム
「な、何を言っているんだ!!主から言われただろ!!単独行動は控えるようにと!!」

フェイト
「そんな事は分かってる…だけど…このままじゃ助かる命も助けられない…だからお願いッ!!」

シグナム
「……分かった…だが、何かあったら直ぐに連絡してくれ…」

シグナムは少し考えフェイトの申し出を了承する。

フェイト
「ありがとう…シグナム…じゃあ、お願いね…」

二人は別々の方向に向かって飛んで行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

フェイトは地上に目を凝らしながら生存者を探していた。

フェイト
「もうここいらには生存者は居ないのかな…」

彼女が諦めかけていた時、彼女のデバイスであるバルディッシュが生体反応を捉えた。

バルディッシュ
『マスター。ここからすぐの場所に生体反応を感知しました。』

フェイト
「本当なの？バルディッシュ…ッ！！」

バルディッシュ
『はい、間違いありません…』

フェイトは生体反応のある現場に急行する。そこには重傷を負い今

にも死にそうな女性局員がいた。

フェイト
「だ、大丈夫ですかッ！？しっかりして下さいッ！！」

彼女の必死の呼びかけに反応し女性局員は目を少し開け最後の力を振り絞って喋り出した。

局員
「ぁ…悪魔が来る…天使の姿をした悪魔…が…」

女性局員はそう一言だけ言うとピクリとも動かなくなってしまった。

フェイト
「どうしたんですかッ！？しっかりして下さいッ！！」

フェイトは再び必死に呼びかけるが女性局員に反応はない。

バルディッシュ
『マスター…大変残念な事ですがこの方は亡くなられております…』

フェイト
「そ、そう……」

フェイトは落胆しながらも死んでいる局員の目に手を当て優しく閉じさせそっと地面に寝かせた。

フェイト
「それにしても…彼女の言っていた悪魔って一体何だろう…？」

バルディッシュ
『私にも皆目検討が付きません…』

フェイトが話しているとバルディッシュが別の魔力反応を捉えた。

バルディッシュ
『マスター…6時の方角にアンノウンです。』

フェイト
「え？アンノウン…？」

フェイトは言われた通り6時の方角に目をやると黒い飛行機が赤い光の粉を撒き散らしながらこっちにやって来ていた。

フェイト
「あれは…飛行機…？」

見たことのない飛行機に戸惑うフェイト。その戸惑いが彼女の反応を鈍らせた。射程圏内に入ったのか黒い飛行機は彼女に向けて赤黒いビームを放った。

フェイト
「こ、攻撃ッ！！？バルディッシュ…プロテクションッ！！」

バルディッシュ
『了解…プロテクション…』

フェイトは咄嗟に防御魔法を展開し身を守る。弾いたビームの一発が横たわっていた女性局員に直撃…遺体を只の肉片に変えてしまった。

フェイト
「何て非道い事を…反撃するよ…ッ！！バルディッシュ！！」

バルディッシュ
『了解、グレイブフォーム…』

バルディッシュは射撃モードに移行しフェイトは攻撃態勢を取る。

フェイト
「サンダー…ファランクスッ！！」

フェイトが魔法を唱えると周りに多数の魔方陣が展開され次の瞬間その展開された魔方陣から次々と電撃魔法が放たれた。

しかし、黒い飛行機は意図も簡単に嵐のような電撃魔法の弾幕を掻い潜り彼女の頭上を通過し即座に変形バするとバスターライフルを彼女に向けた。フェイトは急いで振り向きそして自分の目を疑がった。そこに居たのは以前の会議で見た防犯映像に映っていたロボットだった。

フェイト
「あ、あれは……」

彼女は恐怖を憶える。黒いロボットは背中の翼から赤い光を放出し虫の複眼のような目が赤くギラつく。

アスカ
「やっと会えたな…金髪の姉ちゃん…ッ！！」

アスカは躊躇なくライフルのトリガーを引く。銃口からビームを放たれるが彼女は攻撃を回避するとバルディッシュをアックスフォームに切り換えてアスカに斬りかかる。

一方、アスカも腰からビームソードを引き抜き彼女の攻撃を受け止める。お互いの刃がぶつかり合い激しい火花を発していた。

フェイト
「あなたが今回の事件の犯人なんですね…ッ!!?」

アスカ
「おうよッ!!何か文句でもあるのか?」

フェイト
「どうしてあなたはこんなにも非道いことが平然とできるのですか?」

アスカ
「俺は傭兵でプロのテロリストだ!!人を殺して何が悪いッ!!」

フェイト
「あなたは一体、命を何だと…それにあなたのやってきた事は到底許されるものでない…ッ!!」

アスカ
「じゃあ、どうするッ!!俺を捕まえてみるかぁ?」

フェイト
「当たり前ですッ!!あなたを逮捕してこの事件も終わりにしますッ!!」

アスカ
「ハハハ…ッ！！面白い…じゃあ、やってみろよッ！！女？？ッ！！！」

アスカは力いっぱいに彼女を押し戻し一気に間合いを取ると左手に装備している多機能シールドからワイヤー状の物を彼女に向けて発射する。

フェイト
「な、何ッ！！？身動きが…取れないッ！！…」

ワイヤーは彼女の体に巻き付き自由を奪いそして次の瞬間ワイヤーに高圧の電流が流された。

フェイト
「あぁぁ…ッ！！！！」

彼女は苦痛の叫びをあげるがアスカはそれを楽しそうに眺めていた。

アスカ
「どうだぁ？エグナーウィップのプラズマフィールドの味はぁッ！！！？」

フェイト
「うあぁぁッ！もう…止め…て…」

バルディッシュ
『ま、マスター…しっかりして下さい…』

アスカ
「いいね～苦痛に歪みながら命乞いをするお前の顔は最高に綺麗だ…あぁ、惚れ惚れするよ…」

バリアジャケットでアスカの顔は分からないが彼はフェイトを見ながら舌嘗めずりをしている。着々と彼女の命は死に近づく。しかし一発の魔力弾がアスカを背後から襲った。

アスカ
「チ、何だ?…せっかく良い所だったのによ…」

アスカはフェイトへの攻撃を一旦止めて後ろを振り向いた。

アスカ
「何だ?お前は?…この女の連れか?」

シグナム
「貴様ぁ…よくもテスタロッサをッ!…」

シグナムはレヴァンテインを抜き、アスカに鋭い切っ先を向ける。

フェイト
「シ、シグナム…ご、ゴメン…」

シグナム
「気にするなテスタロッサ…今、助けてやるッ!!」

アスカ
「助けるだと?コイツをか?じゃあ、やってみろよぉぉッ!!」

フェイト
「くぅッ！…」

次の瞬間、アスカは思い切りフェイトを投げ捨てる。

シグナム
「な、何だとッ！！？」

シグナムはアスカの行動に一瞬驚くがすぐに助けに行こうとフェイトの元へ向かう。

アスカ
「馬鹿がッ！！やってみろよとは言ったが簡単にはさせねぇぞ？ッ！！」

しかし、アスカはバスターライフルとシールドに搭載されている連装砲を撃ちながらシグナムを妨害してきた。

アスカ
「ほらほら、どうしたッ！早くしないと大切なお仲間が死んじまうぜぇッ？」

シグナム
「ク、クソ…ッ！！このままでは…ッ！！」

シグナムはアスカによる妨害で思ったようにフェイトへ近づけないでいた。フェイトが地面に激突するまで時間がない。

シグナム
「テスタロッサ！！」

シグナムはアスカの妨害をなんとか掻い潜り落下する彼女の手を掴み助けた。

シグナム
「大丈夫か、テスタロッサ！しっかりしろッ！」

フェイト
「う、うん…私は…だ、大丈夫…ゴホッゴホッ！…」

アスカ
「ほぉ…大したもんだ…だがな、やっぱりお前たちは詰めが甘いんだよッ！」

アスカは空かさずバスターライフルを二人に向けて放った。

シグナム
「しまった…ッ！！」

シグナムはフェイト抱き抱えているために動きが鈍くなっている。二人に迫る赤黒い一筋の光…

しかし、ビームが彼女らに当たることはなかった。なぜならアスカのビームは別の方角から翔んで来たピンク色の極光によって欠き消されたからだった。

アスカ
「やれやれ…また新手か…面倒だな…」

アスカは攻撃のあった方角を見るとそこにはレイジングハートを構

える高町なのはがいた。

なのは
「大丈夫？シグナムさんッ！！」

シグナム
「私は大丈夫だが、テスタロッサが負傷した…すぐにでも治療が必要だ…」

なのは
「フェイトちゃんがケガッ！？どうしてあなたはこんなに非道いことが平然と出来るのッ？」

アスカ
「俺は傭兵だ…傭兵が人を殺すのは当たり前だッ！！それにな人が死ぬ時に見せる顔が何とも言えない位好きなんだよ。」

アスカはビームソードを振りかぶりなのはに斬りかかる。

なのは
「あなたは命を何だと思っているのッ？」

なのははレイジングハートの柄でアスカのビームソードを受け止めた。

アスカ
「命は物と一緒さ…」

ぶつかり合う二人の武器は激しい火花を上げる。

なのは
「それ違うよッ！命は尊い物ッ！あなたが簡単に奪って良い物じゃないッ！ディバイィィン…バスタ？ッ！」

なのははアスカのビームソードを力いっぱい押し戻し間合いを取ったあと高威力の砲撃魔法を放った。

アスカ
「違うなッ！命って言うのは意味を還元して行くと最終的には物とそう変わりはしないッ！…」

アスカもバスターライフルで反撃をする。二人は光の軌跡を描きながら激しい攻防戦を繰り広げる。

シグナム
「聞いていれば嘗めたことを言いおってこの外道がぁぁ！」

そこへレヴァンテインを構えたシグナムが勢い良く突っ込んできた。

シグナム
「紫電一閃ッ！！！」

アスカ
「おっと、邪魔すんなよ…ピンク色の姉ちゃん…」

アスカはシグナムの斬撃を軽々と回避するとバスターライフルと連装砲で反撃する。

シグナム
「貴様だけは絶対に許さんッ！行くぞ、なのはッ！…フォーメーシ

ョンＢ３ッ！」

シグナムはアスカの攻撃を避けながらなのはに指示を出す。

なのは

「了解ッ！アクセルシューター…シュ？トッ！」

なのはがピンク色の魔力弾を放つ。アスカはそれを次々と回避し直撃コースの物はライフルで撃ち落としたりシールドや蹴りで弾き返していた。

シグナム

「もらったぁぁッ！！」

そして、アスカがなのはの攻撃に気を取られている隙にすかさずシグナムがレヴァンテインで斬りかかる。

アスカ

「ち、流石に２対１では分が悪いか…」

アスカは鍔ぜり合いから間合いを取るとバスターライフルで二人に牽制をかけると素早く変型し撤退して行った。

その後、フェイトが負傷した事により機動六課の戦力が減り、逆に魔導師狩りの被害が拡がったのは言うまでもなかった。

次回に続く。

狂気の使徒（後書き）

ご意見、ご感想、アドバイスなどありましたらお待ちしております。

生け贄（前書き）

お待たせしました。お頼みください。

生け贄

この間の戦闘から3日が経ち負傷したフェイトも現場に復帰していた。

そして今日も機動六課では事件の対策会議が執り行われていた。

はやて
「まずは、フェイトちゃんケガの具合はどうや？」

フェイト
「ちょっと痺れは残るけどもう大丈夫だよ…」

はやて
「そっか…せやけど…私は単独行動は控えるようにお願いしたよね…」

フェイト
「う、うん…」

はやて
「私たちがどれだけ心配したか…」

フェイト
「ご、ごめんなさい…もう絶対にしないから…」

はやて
「分かった…じゃあ、もう一度言っとくで…単独での行動は慎むように特にフォワードの四人は心がけてな…」

フォワード
「「「は、はいッ！！」」」

はやて
「ほな、本題に入ろうか…例の事件の事やけど…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして、ここはスカリエッティのアジト。

アスカ
「済まなかったな…博士…今回も雑魚は殺れても六課の連中は誰も殺せなかったよ…」

スカリエッティ
「フフ…別に気にする事はないよ…アスカ君。あと、君のデバイスのデータからまた新しい物を見つけたよ。」

アスカ
「何だ…」

スカリエッティ
「これだよ…」

モニターに映し出された物を見てにやけるアスカ。

アスカ
「へえ〜これはまた大したもんだ…ＧＮファングかこれさえあれば

百人力だなぁ～博士…」

スカリエッティ
「それだけじゃない…」

アスカ
「おッ！？…ククク…アハハハッ！！凄いじゃないか博士ッ！！コイツは軍にいた時に率いていた部隊専用機たち…百人力どころか鬼に金棒だぜ…ッ！！」

スカリエッティ
「しかし、アスカ君…お楽しみのところ悪いがファングの方はすぐに実装できるがこっちの方は動力がまだ分析が済んでいない…」

アスカ
「まあ…そっちは博士の好きしてもらって構わない…俺はファングだけで今のところは大丈夫だ。」

スカリエッティ
「全く君は頼もしい限りだね…あと、アスカ君に頼みたい事があるんだが。」

アスカ
「何だ？博士？新たな仕事か？」

スカリエッティ
「まあ…そうだね。アスカ君にこの四人を生け捕りにして来て欲しいんだが…」

アスカは博士から渡されたデータを見た。

アスカ
「ん？コイツらは例の連中と…あと一人は誰だ？」

スカリエッティ
「あと一人は部隊は部隊こそ違うが同じ管理局の武装隊員でそこに映っている青髪の少女…スバル・ナガシマの実の姉だ…」

アスカ
「それは分かったぜ…で、コイツらを生け捕りにしてどうするんだ？」

スカリエッティ
「彼女らは今、私が研究している物の試作品たちだ…」

アスカ
「ああ～あの戦闘機人どもか…強いのか？」

スカリエッティ
「君ほどではないが充分に強いと思うよ…」

アスカ
「まあ、俺の足を引っ張らないで貰いたいものだなッ！！じゃあ、俺は例の四人のを生け捕りにしますか～ッ！！」

スカリエッティ
「……ええ…頼みましたよ…アスカ君…」

アスカ
「ああ…行くぞ…ルシファー」

ルシファー
「了解しました。マスター…」

アスカは意気揚々とスカリエッティの部屋から出て行った。
それを見送る博士は握り拳から血が出るほど強く握りしめ、表情もどこか怒りに満ちていた。

ウーノ
「は、博士…大丈夫ですか？」

スカリエッティ
「ええ…私は何とないよ…」

ウーノ
「やはり、あの男は危険過ぎます…これ以上は…」

スカリエッティ
「ええ…そんな事は私も重々承知しています。それに私の最高傑作を馬鹿にされて少し腹が立っている位だ…」

ウーノ
「私もあの時はさすがに怒りを憶えました…大切な妹たちを馬鹿にされて…」

スカリエッティ
「しかし、彼の強さは折り紙付きです…ここは利用できるところまで使わせて貰いましょう。」

ウーノ

「分かりました…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

場所は変わりここでは管理局、１０８陸士部隊のギンガ・ナガシマがガジェットと戦闘を繰り広げていた。

ギンガはガジェットの激しい弾幕を自慢の機動力で回避し次々とリボルバーナックルの餌食にして行った。

そして、ギンガの周りにはガジェットの残骸が散らばっており、それは戦闘の終了を示していた。

ギンガ
「ふぅ〜任務完了〜それにしても今日はやけにガジェットの量が多かったわね…」

ギンガは任務完了の報告を通信を１０８陸士部隊の隊舎に連絡を入れる。

ギンガ
「こちらギンガ、無事にガジェットの掃討を完了しました…」

『…?…?…』

ギンガ
「あれ?通信が通じない…もしも〜し…聞こえますか〜…」

『…?…?…』

ギンガ
「おかしな～やっぱり通じない…」

ギンガが首を傾げていると赤く光る雪のような物が降っているのに気付く。

ギンガ
「これは…雪…？だけど、赤い雪なんて見たことがない…」

ギンガが空を見上げるとそこには赤い光の翼を広げ彼女を見下ろす黒いロボットがいた。腰には追加装備としてＧＮファングのコンテナが搭載されていた。

赤い粉はどうやらあのロボットから出ているようだ。どこか禍々しいオーラを放つロボットに思わず構えを取るギンガ。

アスカ
「へえ～分かるのか～？本能的に…」

ギンガ
「あなたは…例の魔導師狩りの犯人ですねッ！！？」

アスカ
「良く知っているじゃねぇか…」

ギンガ
「次の狙いは私ということですか…」

アスカ
「まあ、お前をブチ殺してやりてえのは山々だが、お前は生け捕り

にしろと依頼主（クライアント）からのお察しだッ！！」

ギンガ
「どういう事ッ！？」

アスカ
「俺だって知らねえよッ！！とにかくお前は生け贄なんだと同情するぜ？ッ！！」

アスカは左手の多目的シールドからビーム刃を発生させるとギンガに斬りかかる。それを彼女はリボルバーナックルで受け止めた。

次回に続く…

生け贄（後書き）

次からファングが本格的に始動します。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

放たれる『牙』（前書き）

随分と間が空いてしまいました。

放たれる『牙』

ギンガのリボルバーナックルとアスカのビーム刃が激突し合い激しい火花が上がる。

ギンガ
「どうして…どうして貴方はこんなにも非道いことが平然とできるんですかッ!!?」

アスカ
「好きなんだよッ!!人間が死ぬ刹那の顔がなッ!!」

ギンガ
「貴方って人は…ッ!!ウイング…ロードッ!!!!!」

ギンガは一気にアスカとの間合いを取りウイングロードを展開するとその上を滑るように高速移動した。

アスカ
「お、今度は鬼ごっこか?面白れぇッ!!」

アスカはバスターライフルを撃ちながら彼女の後を追う。

アスカ
「おいおい…逃げるだけか?そんなんじゃ面白みがねえな?ッ!!」

ギンガ
「さあ?それはどうかしら…?」

ギンガは急旋回するとアスカに猛スピードで向かって来る。左手のリボルバーナックルは攻撃に備え高速回転をしていた。

アスカは彼女の突進を止めようとバスターライフルを乱射する。

しかし、ギンガは攻撃を正確に見極めアスカとの間合いに再び入るとリボルバーナックルを力いっぱい振るう。

アスカ
「グウゥ…ッ！！！！」

アスカはシールドで辛うじてギンガの攻撃を受け止めていた。

ギンガ
「いっけぇ？？ッ！！！」

ギンガはリボルバーナックルを振り抜いた。

アスカ
「ぐあ…ッ！！」

アスカは耐えられずシールドごと吹き飛ばされ地上に叩きつけられた。衝撃と共に粉塵が巻き上がる。

ギンガ
「やった…のかしら…？」

ギンガは下を覗き込んだその時だった。

アスカ

「行けよッ！！！ファングゥゥゥ？ッ！！！！」

巻き上がる粉塵から白い牙がギンガに向けて放たれた数は６機だ。
ファングの一つ一つが赤い光の暴力を振るう。

ギンガ
「な、何…ッ！！？」

突然の奇襲攻撃を受ける。咄嗟にプロテクションを張る。

アスカの放ったファングが彼女のプロテクションに徐々に食い込み
そして彼女の身体に突き刺さる。

ギンガ
「アガッ……ッ！！」

彼女は腹部と腕、太ももから鮮血を流している。

アスカ
「どうだ？ファングの味は…？」

アスカはファングを彼女から抜き腰のコンテナにしまう。

アスカ
「お嬢ちゃん、どうする？大人しく俺に着いて来るならこれ以上傷
つけたりはしないんだがな～？」

ギンガ
「誰が貴方なんかに…」

アスカ
「フン、とんだ勝ち気なお嬢ちゃんだ…ならば仕方ない…」

そう言うと腰からビームソードを引き抜く。刀身は赤く輝いている。

アスカ
「生憎だが別に俺はお嬢ちゃんを五体満足で連れ帰れとは言われていないんでね…」

アスカは悪意に満ちた表情して手に持ったソードを振り落とした。

ソードはギンガの左手を意図も簡単に切り落とした。切られた彼女の腕からは夥しい量の血液が吹き出していた。

ギンガ
「ア…ッ!!グアァアァァ??ッ!!!!」

激痛で悶絶するギンガを見下すアスカ。

アスカ
「痛てえか?痛てえよな?何せ腕を一本切っちまったんだからな?ッ!!」

アスカは獣のような声で叫ぶギンガの髪を無造作に持ち彼女の顔を覗き込む。

ギンガ
「ウグ…ッ!!」

アスカ

「どうした？お嬢ちゃん？さっきまでの威勢がまるで無いぞ…？」

ギンガ
「ハァハァ…私…は…ぜっ、絶対…に…屈したりは…しない…ッ！！」

アスカ
「いいぞ～その調子だ…それに良いことを思い付いた…お嬢ちゃん今からちょっとゲームをしようや…俺がソードをお嬢ちゃんの身体に突き刺す。それでお嬢ちゃんが耐えることができたら勝ちだ…簡単だろ？」

ギンガ
「ハァハァ…」

ギンガは満身創痍で満足に話すことも出来ない彼女をオモチャにして勝手なルールでゲームを初める。

ギンガ
「い、いや…止めて…」

彼女の顔は激痛と恐怖のあまり歪んでいる。

アスカ
「じゃあ、始めるぜ…」

アスカは不気味に笑いＧＮビームソードを勢い良く振りかぶる。

ギンガ
「い、いやあぁ？ッ！！」

ギンガの断末魔が周囲に木霊した。そして実の妹であるスバルが姉のギンガが連れ拐われたのを聞いたのは翌日になってからだった。

次回に続く…

放たれる『牙』（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

スバル、心の葛藤…（前書き）

今回は主にスバルを中心に書いてみました。お楽しみください。

スバル、心の葛藤…

スバル
「……。」

姉のギンガが行方不明になった次の日の朝、スバルは一人で落ち込んでいた。

部隊長である八神はやての話しによると戦闘の痕跡とギンガ自身の血痕はみつかったが彼女の遺体までは発見できなかった。

そういった事を踏まえ地上本部はギンガをＭＩＡ（戦闘中行方不明）…未確認の戦死としてこの一件は処理されたと聞かされた。

しかし、地上本部の決定に納得いかないスバルは姉を探しに行くと言うことを聞かなかったので一旦彼女を落ち着かせるための配慮としてはやてから1日の臨時休暇を与えられていた。

ティアナ
「……スバル……」

ルームメートで親友のティアナは心配そうに彼女を見つめていた。

ティアナ
「だ、大丈夫よ!!ギンガさん必ず生きてる!!私もそう信じてる…」

スバル
「ありがとう…ティア…だけど今は一人にして…」

ティアナ
「……うん、分かった…だけど食事だけはちゃんと摂りなさいよ。アンタがそんなんだとギンガさんと逢ったとき悲しまれるから！！」

スバル
「……分かった……」

ティアナ
「……。」

ティアナはそれ以上語ろうとしないで静かに部屋を出て行った。

スバル
「逢いたいよ…ギン姉に逢いたいよ…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

場所は変わりここはスカリエッティのアジト…戦闘を終えたアスカが帰投していた。

アスカ
「ほらよ…博士、ご希望の品だ…」

アスカは全身キズだらけで片腕のないギンガを無造作に博士の前に投げ捨てる。

スカリエッティ
（……ピクッ……）

ウーノ
「ク…ッ！！」

トーレ
「こ、これは…」

クアットロ
「非道いことしてくれますね…」

アスカの取った何気ない行動に博士は一瞬だが反応する。
その場に居た三人の戦闘機人もアスカに聞こえない様にお互い話していた。

スカリエッティ
「ウーノ…すまないがこのプロトタイプを手当てしてくれ…早急にだ…」

ウーノ
「かしこまりました…行きましょう…トーレ、クアットロ…」

トーレ
「ああ…了解した。」

クアットロ
「急ぎましょう…」

ウーノが先頭に立ちその後に続くようにギンガを抱えたトーレ、そして切り取られた腕をクアットロが持って部屋から出て行った。

スカリエッティ
「それにしても凄いじゃないか…アスカ君…」

アスカ
「当たり前だ…俺は言われた事は必ず実行する…どんな手段を使ってもな…」

スカリエッティ
「フフ…全く持って素晴らしい…まあ、それはそうともうちょっとキレイな形で彼女を連れて来れなかったのかい？」

アスカ
「フン…そのお嬢ちゃんが少し強くてよ…こうしなきゃダメだったんだ。」

スカリエッティ
「そうか…それは仕方ないことか…まあ、またこの調子で頑張ってくれたまえ…」

アスカ
「ああ…任せてくれ…」

そう言うとアスカもデバイスのルシファーと共に博士の部屋をあとにした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして、六課の隊舎内では慌ただしくスターズ分隊のなのは達が廊下を歩いていた。

ヴィータ
「ティアナッ！！どうしてスバルから目を離したりしたんだッ？」

ティアナ
「すみません…」

ヴィータ
「目を離したりしたらこうなる事は分かっていただろうに…」

ティアナ
「は、はい…」

なのは
「ダメだよ。ヴィータちゃん…ティアナを責めたりしたら…」

ヴィータ
「ああ…そんな事は分かっている…」

なのは
「今は、スバルを一刻も早く探し出さなきゃ…」

ヴィータ
「そうだな…ティアナ！！お前はこの事をはやてとフェイト隊長に伝えろッ！！」

ティアナ
「い、嫌ですッ！！私も一緒に行きますッ！！いえ、行かせて下さいッ！！」

ヴィータ

「ダメだッ！！飛べないお前が着いて来ても足手まといになるだけだッ！！」

ティアナは必死の訴えはヴィータにあっさりと却下されてしまう。

なのは
「大丈夫。私たちに任せて。必ずスバルを連れて帰るから…」

ティアナ
「し、しかし…」

なのは
「お願い。ここは聞き分けて…ッ！！無理して着いて来たティアの身にまで何かあったら私はどうしたら良いの？だから…ね…」

ヴィータ
「そうだ…なのはの気持ちを分かってくれ…」

ティアナ
「分かりました…お願いしますッ！！スバルを…あの馬鹿を助けて下さい…」

ティアナは泣いていた。

なのは
「うん、任せて。約束はちゃんと守るから！！」

ヴィータ
「急ぐぞッ！！なのはッ！！」

なのは
「うん…ッ！！」

二人は外に出ると素早くバリアジャケットを纏うと空の彼方に飛んで行った。

ヴィータ
「しかし、ああ言ったのは良いが本当に間に合うのだろか…？」

なのは
「何を言っているの？ヴィータちゃん…間に合うかどうかじゃなくて間に合わせるんだよ。」

ヴィータ
「そうだったな…すまない…なのは…」

二人はスバルが居るであろうギンガが行方不明になった現場に急行した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一方、スバルは姉のギンガが失踪した現場にやって来ていた。

スバル
「ギン姉どこなの…どこに居るの…返事をしてよ…ギン姉？？ッ！！」

スバルの心の叫びが辺りに木霊した。ふと彼女は空を見上げるとそこには赤い光の粒子を撒き散らす黒いロボットが居た。

スバルはそのロボットに向かって何か叫んでいた。ロボットは彼女の声に反応し話し出した。

アスカ
「やっぱり、分かるのか…さすが姉妹愛って言うやつか…」

スバル
「あなたが…あなたがギン姉を…ッ！！？」

アスカ
「ああ、そうさ…最高だったぜ…あの時のお嬢ちゃんの目、思い出しただけで……」

スバル
「許さない……」

アスカ
「ああ…？」

スバル
「私はあなたを絶対に許さないッ！！！！」

スバルはウイングロードを展開しアスカに突っ込んで来る。右手のリボルバーナックルからカートリッジが射出され魔力が右手に圧縮される。

スバル
「ギン姉の仇？ッ！！！！！」

アスカに向けて渾身の一撃を打ち込む。

アスカ
「やれやれ、お前は攻撃が一方的だな…」

アスカは攻撃を避けると彼女を羽交い締めにして地面に叩き伏せる。

スバル
「グ……ッ！！」

そして、起き上がろうとするスバルの顔を地面に押し付ける。

アスカ
「そんなに姉のところに行きたいのか？じゃあ、会わせてやんよッ！！」

アスカは立ち上がりスバルの頭を踏みつけると腰からビームサーベルを抜き彼女の首筋に突きつける。

スバル
「ヒ…ッ！！」

スバルは迫る死の恐怖に表情が歪む。

アスカ
「逝っちまいな？ッ！！」

アスカがビームサーベルで彼女の首を切り落とそうとしたその時だった。ピンク色の一筋の光が背後から襲いかかり直撃した。

アスカ

「グァ…ッ！！」

アスカは衝撃で十数ｍ吹き飛ばされる。

スバル
「い、今の魔力は…まさか、なのはさん…っ！！？」

なのは
「スバルッ！！大丈夫ッ！？」

アスカ
「管理局の白いお嬢ちゃんか…」

ヴィータ
「あたしも居るぞッ！！」

アスカ
「な、何ッ！！」

ヴィータ
「ブチ抜けェェェッ！！」

アスカ
「アガ…ッ！！」

ヴィータの振るうデバイス『グラーフアイゼン』がアスカの脇腹に直撃する。そして再び数十ｍ吹き飛ぶのだった。

次回に続く…

スバル、心の葛藤…（後書き）

次回、再び犠牲者が増えてしまいます。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

誇りに賭けて…（前書き）

お待たせしました。お楽しみください。

誇りに賭けて…

ヴィータ
「よっしゃーッ!!ざまあ見ろッ!!なのは、ここはあたしが抑えるッ!!スバルを連れて早くこっから離脱しろッ!!」

スバル
「ダメですッ!!ヴィータさんッ!!ヴィータさんも一緒に…ッ!!」

ヴィータ
「あたしを信じろスバル…このヴィータ、ヴォルケンリッターの誇りに賭けてお前たちを守って見せる…ッ!!」

なのは
「分かった…スバルを安全な場所に避難させたら直ぐに戻るから…ッ!!」

ヴィータ
「ああ…頼んだぜ…それにスバルッ!!帰ったらたっぷりと説教してやるからな…ッ!!」

なのは
「行くよッ!!スバルッ!!」

スバル
「ヴィータさ??んッ!!」

なのははスバルを抱き抱える形で飛んで行った。

アスカ
「馬鹿がッ！！逃がすかよッ！！死ね？ッ！！！」

アスカはぶっ飛んだ先の瓦礫から飛び出した。右手には最大出力で展開したＧＮビームソードが握られていた。

ヴィータ
「なのはとスバルには指一本触れさせないッ！！お前の相手はこのあたし…だ？？ッ！！！」

ヴィータはアイゼンを振りかぶりながらアスカを猛追する。

ヴィータ
「ドリャァァ？？ッ！！」

そして、追い付いた彼女はアイゼンをアスカの背中に叩きつけた。

アスカ
「アガ…ッ！！」

叩きつけられたアスカはそのままに地面に激突する。衝撃で地面にはヒビが入り割れていた。

アスカ
「アガッ…ウグッ…！！」

アスカは今まで味わった事のない激痛から悶絶していた。デバイスのルシファーからの報告でアーマージャケットの損傷率は既に４７％を超えていた。

背中の左翼は根元から折られ胸のパーツは所々破損しアスカ自身が羽織っているバリアジャケットが見えていた。

アスカ
「ガハァ…ッ！！ば、馬鹿な…この俺がこうも簡単に……」

ルシファー
『マスター、これではこちらが圧倒的に不利です…ここは一旦下がりましょう…』

アスカ
「な、何を言っているッ！！この俺に下がれと言う前にこの状況を打破する方法を考えろッ！！」

ヴィータ
「何をごちゃごちゃ言ってるんだよ？ッ！！」

アスカに猛スピードで迫るヴィータ。グラーフアイゼンからは火が噴射している。

ヴィータ
「ブチ抜けェェェッ！！」

アスカ
「チ、この俺が…ッ！！」

アスカは咄嗟に盾で防ぐが彼女の一撃を緩和できずに瓦礫に叩き伏せられる。

ヴィータ
「もう、諦めろ…お前を殺人など２４の罪で逮捕する。」

ヴィータはアスカに手錠を掛けようと不用意に近寄った時だった。

アスカ
「もらったッ！！行けよファングゥゥゥッ！！！！」

アスカの叫びに反応し白き牙がヴィータに向けて襲いかかる。

ヴィータ
「な、何ッ！！？」

彼女はいきなりの奇襲に驚くが、驚異的な反応速度で襲いかかるファングを撃墜していく。

しかし、向かって来るファングの量に対応できずにとうとう攻撃を許してしまい、彼女の幼くか細い体に次々と白い牙が突き立てられる。

ヴィータ
「カハ…ッ！！」

彼女の体からは鮮血が滴り落ちている。アスカはヴィータの腹部に蹴りを入れて追撃をかける。

ヴィータ
「ウガッ！！」

蹴られた衝撃で瓦礫に叩きつけられた。

アスカ
「どうだ？痛いか？だけどなぁ～まだまだこんな物じゃ終わらねぇぞ～やられた分は兆倍にして返してやんからよ？ッ！！！」

アスカはヴィータに突き刺さったファングを抜いて腰のコンテナにしまう。

ヴィータ
「ク…ッ！！！」

彼女は激痛でバランスを崩し倒れるがアスカは彼女の前髪を無造作に掴みあげる。そして掴まれた拍子に帽子が落ちた。

アスカは彼女の帽子を何気に踏みつけるとヴィータが激しく反応する。

ヴィータ
「て、てめえ…ッ！！その汚ねぇ足を退けろッ！！」

アスカ
「ん？どうしたんだ？いきなりキレやがって…この帽子がどうかしたのか？」

アスカはわざとらしく帽子を踏みつける。

ヴィータ
「や、止めろ？ッ！！！」

ヴィータは掴まれている手を振りほどくとアスカの足をを払い除け

て帽子の上に覆い被さる。

アスカ
「おいおい…自分の命よりそんな小汚ない帽子の方が大事なのか？」

ヴィータ
「あ、当たり前だ…この帽子は大好きなはやてから貰った大事な物だ…お前なんかが気安く触んじゃね…ッ！！！」

アスカ
「つくづく見上げた馬鹿だな…もう、お前と遊ぶのも飽きたしひと思いにブチ殺してやるぜ…」

アスカは帽子に覆い被さる彼女を蹴り飛ばす。そしてファングを展開すると再び彼女の体に突き立てる。

ヴィータ
「グゥゥゥッ！！」

ヴィータは瓦礫の壁に貼り付けにされて身動きが取れないでいた。

アスカがＧＮビームソードを抜きソードの切っ先が彼女に向けられる。

アスカ
「じゃあ…逝っちまいな？ッ！！！」

ＧＮビームソードを彼女に突き刺そうとしたその時だった。

ルシファー

『お止めください。マスター。』

アスカのデバイスであるルシファーが不意に攻撃を止めさせる。

アスカ
「いきなり何だ？せっかくこのクソガキを切り刻めるのに俺の楽しみの邪魔をするなよ…」

ルシファー
『申し訳ございません…しかし、私も良いことを思い着きましたんで。』

アスカ
「何ッ？言ってみろ…」

ルシファー
『はい…彼女のような魔導師は必ずリンカーコアと言う物を持っています。』

アスカ
「リンカーコア？」

ルシファー
『はい…魔導師が魔法を使うためのエネルギーの源です。』

アスカ
「で、それを俺にどうしろと…？」

ルシファー
『簡単です。彼女の体内のリンカーコアを抜き取ってください。私

のGNドライヴと融合させます。』

アスカ
「そんなことして俺の体は大丈夫か？」

ルシファー
『ええ…むしろ破損部分は回復し尚且つ新しい力が手に入れるチャンスかと…』

アスカ
「へぇ～それでコイツはどうなるんだ？」

ルシファー
『運が悪ければ死にますし、生きていたとしても魔法は使用不可能…魔導師としての価値は０です…まあ、死んだも同然ですよ。』

アスカ
「ククク…お前も随分とえげつない性格になったもんだな…」

ルシファー
『褒め言葉として受け取って置きます。』

アスカ
「まあ、そういう事だ…覚悟しろよ…クソガキ…」

再びソードの切っ先が彼女の体に向けられる。

ヴィータ
（はやて、みんな…ゴメン…ッ！！！）

彼女の頬を一筋の涙が伝う。この涙が不甲斐ない自分を悔やんで流

した物か、それとも、もうみんなとは会えないのを悲しんで流した物かは分からない…

アスカ
「じゃあなッ！！管理局のクソガキ？ッ！！！」

アスカは躊躇いもなくビームソードを降り落とす。

ヴィータ
「う、うわぁあぁぁ？？ッ！！！！」

そして、彼女の悲痛な叫び声が辺りに響き渡った。

次回に続く…

誇りに賭けて…（後書き）

今回はアスカｖｓヴィータを書いてみました。

最初に言って置きます。『ヴィータ』ファンの方すいません。

彼女も最初は善戦していましたが途中の油断が仇となりアスカの力の前に負けてしまった挙げ句リンカーコアまで取られてしまいました。

次回はおそらく話しだけになるかと思います。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

決意（前書き）

お待たせしました。

決意

時間は少し遡り、なのははスバルを抱き抱え安全な場所に移動していた。

なのは
「スバル…どうしてこんな無茶なことをしたの？」

スバル
「ごめんなさい…私…ギン姉のことが今だに信じられなくて…」

なのは
「そんな事は私だって同じだよ。本部はああ言ってるけどギンガはどこかでちゃんと生きているから…」

スバル
「なのはさん、ありがとうございます。」

なのは
「ううん、私の事は気にしないでいいからそれに帰ったらティアにちゃんと謝るんだよ。スバルの事をお願いしますって泣いてたんだから。」

スバル
「はい、分かりました…」

二人がしばらく飛んでいると目の前に一機のヘリが飛んでいた。

六課専用機だ。ティアナの連絡を通して部隊長が手配した物だった。

なのはは飛行中のヘリの後部ハッチから中に入る

なのは
「ヴァイスさん、スバルをお願いしますッ！！私はヴィータちゃんの所に戻りますッ！！」

ヴァイス
「ああッ！！了解したッ！！気をつけてなッ！！」

スバル
「なのはさんッ！！」

なのは
「大丈夫だよ。任せて。スターズ1…高町なのは行きますッ！！！」

なのははヘリから飛び出すと戦っているであろうヴィータの元へ急いだ。

なのは
（何だろう…この胸騒ぎ…物凄く嫌な感じがする…）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

彼女はヴィータと別れた場所に戻って来て自分の目を疑った。

そこは既にアスカの姿は無く辺りには色々な機械的な部品が落ちており壮絶な戦闘を物語っていた。

なのはは数々の残骸から見知った物があった。バラバラに砕けた『グラーフアイゼン』だった。

なのは
「アイゼン…ッ！！！」

彼女はアイゼンの元へ慌てて向かう。アイゼンは弱々しく光っていた。

なのは
「アイゼン！！どうしたの！？しっかりしてッ！！」

アイゼン
『わ、私の事は…どうなってもか、構いません…お、お願い…です…ま、マス…ターをた、助け…てください…』

アイゼンに言われ彼女が周囲を見渡すと木の根元に全身がボロボロなったヴィータが横たわっていた。

なのは
「ヴィータちゃ？んッ！！」

彼女はヴィータの元へ駆け寄り抱き起こす。彼女の手にはべったりと血がついていた。

ヴィータの体のあちこちには大量の刺し傷があり、特に胸の傷はリンカーコアを抜かれているためそこの部分だけ抉り取られたようになっていた。

なのは
「ヴィータちゃんッ！！しっかりしてッ！！」

なのはの呼びかけにヴィータが静かに目を開ける。

ヴィータ
「お、おう…なのは…遅いじゃねぇか…」

なのは
「ご、ゴメンね…ヴィータちゃん…」

ヴィータ
「それに悪りぃ…負けちまった…」

なのは
「ううん…気にしないで…それにもう話しちゃダメ!!体に障るから…」

なのはは重傷のヴィータを抱えるとヘリと合流し隊舎に戻って行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

場所は変わりアスカはアジトへ向かっている。しかし、ヴィータから受けたダメージによって左翼を失っているため機体バランスが取れずにフラフラと飛んでいた。

アスカ
「チ、今日はやられたぜ…ここまでダメージを受けるとは…」

ルシファー
『全くですね…あの娘があそこまでやれるとは見誤っていました…』

アスカ
「で、あのクソガキから取ったリンカーコアはいつ融合するんだ？」

ルシファー
『戻ってから博士にお願いします…これでマスターは無敵になれます…』

アスカ
「ククク…そうか…ならば急がなくてはな…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして、なのは達を乗せたヘリが機動六課の隊舎に着陸する。地上では八神はやてとシグナム、医務官のシャマルが待っていた。

はやて
「ヴィータッ！！！しっかりしてやッ！！！」

シグナム
「早くストレッチャーを…ッ！！！」

シャマル
「こっちにお願い。」

なのははヴィータをストレッチャーに乗せると急いで医務室に向かった。

ヴィータを見たはやての顔は絶望と恐怖の入り交じった表情だった。

なのはとスバルははやて達と別れ会議室に向かった。そして、会議

室に着くとフェイトを始めフォワード陣が待っていた。なのはがヴィータの事を説明する。

なのは
「…と言うことです…」

フェイト
「じゃあ、ヴィータもう魔法を……」

なのは
「おそらく使えない…」

ティアナ
「そんな…」

スバル
「私のせいだ…私があんな所に行かなければ…ヴィータ副隊長は…ッ！！！」

ティアナ
「違うわよ。スバル…」

エリオ
「そうですよッ！！本当に悪いのはあの魔導師狩りの犯人ですッ！！」

キャロ
「だけど、非道すぎます…うう…」

フェイト

「キャロ……」

キャロはフェイトに抱きつき泣きじゃくっていた。そして、今まで俯き何も話そうとしなかったなのはが静かに口を開いた。

なのは
「私…今から…ヴィータちゃん…ううん…この事件の犠牲になった人達の分の仇を取って来るッ！！！」

フェイト
「ダ、ダメだよ。落ち着いてなのは…ッ！！」

フェイトは慌てて止めに入るがなのはは止まる気配がない。彼女は物凄い殺気を放っていた。

なのは
「お願い…フェイトちゃん…そこを退いて…ッ！！」

フェイト
「いや、絶対に退かない…ッ！！」

なのは
「フェイトちゃんは悔しくないのッ？アイツ一人にたくさんの仲間を殺されて…挙げ句の果てにギンガやヴィータちゃんを…」

その時だった。フェイトがおもむろになのはの頬を張る。

なのは
「え…？フェイト…ちゃん…？」

フェイト
「いい加減に目を覚ましなさいッ！！！私も悔しい気持ちは同じだよッ！！」

なのは
「じゃあ…どうして私を行かせてくれないのッ？」

フェイト
「この犯人は、今、出て行ってどうこうできる相手じゃないわッ！！その位分かるでしょッ！！」

なのは
「分かる…そんなこと分かるけど…こんなの非道すぎるよ…ううう…」

フェイト
「なのは……」

なのはとフェイトはお互いに抱き合い泣いていた。そして、みんなは散って逝った人達の為にも必ずアスカを逮捕すると心に誓うのだった。

次回に続く…

決意（後書き）

次回で最初の山場を迎えます。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

世界の悪意（前書き）

今回は前半の山場に向けての前フリです。お楽しみください。

世界の悪意

ここは、ジェイル・スカリエッティの秘密研究所。

スカリエッティ
「ようやく、ルシファーの修理と改修が終わったよ…」

アスカ
「すまない…礼を言うぜ…」

スカリエッティ
「それにしても、今回は派手にやられたものだね…まあ、それでもヴォルケンリッターの一人を殺すなんて大したものだ。」

アスカ
「フン…」

スカリエッティ
「それに君のルシファーと例のリンカーコアを融合した結果、君のアーマージャケットがこのように変化したよ。」

博士はそう言いながらモニターに表示する。そこに写されたアーマージャケットは両肩に連装砲とファングコンテナと主翼が一体化した特殊シールドを装備しており、背中も元の翼の他に飛行形態時に機首となるパーツが付属されていた。

アスカ
「ヒュ～…確かにルシファーの言う通りこれなら奴さんどもを痛め付けられるな…」

スカリエッティ
「それに以前話しましたが、ついに完成しましたよ…例のＭＳが…」
別のモニターに表示されたのは４機のＧＮ－Ｘと２機のアヘッドだった。

お互いのカラーリングは黒基調でＧＮ－Ｘは全機大型のランスを装備しており、アヘッドに関しては目立った装備しておらず基本的なビームライフルとサーベルを装備していた。

アスカ
「ほぅ…ようやく完成したんだな…」

スカリエッティ
「ええ、私の持っているガジェットのノウハウと君のデバイスであるルシファーと共に開発しました。」

アスカ
「へぇ～凄いじゃないか…大したものだ…」

スカリエッティ
「恐れ入ります…それに今回も頼みますよ。この６機の性能実験も…」

アスカ
「ああ、任せておけ…」

アスカはルシファーとユニゾンすると新型の６機ともに空に舞い上がる。血のような赤い粒子撒き散らしながら…

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

場所は変わり機動六課の高町なのは、フェイト、シグナムの三人はガジェットの反応があった地点へ向かっていた。

今回は部隊長の八神はやては六課の隊舎にて待機。ヴォルケンリッターのシャマルとザフィーラは戦闘タイプでは無いため同じく部隊長ともに待機。

そして、フォワード陣は「是非、私たちも…」と懇願したがなのは、フェイト両隊長は出撃を頑なに拒否した。空を飛べない彼女らが敵の良い的になるのは明白である。これも彼女たちなりの優しさであった。

なのは
「フェイトちゃん、シグナムさん…アンノウンの反応が…」

シグナム
「ああ、こちらでも確認した。数は全部で7機か」

フェイト
「あ、二人ともちょっと待って…反応が別れたよ」

フェイトの言う通りアンノウンの反応が3機一組が二つと単独機に別れた。

フェイト
「どうしたんだろう?」

なのは
「完全に誘われてるね…」

シグナム
「ああ…しかし、これが罠だろうが我らはそこに行かなければならない…」

なのは
「うん、それにこの単独機は本命…魔導師狩りの犯人だよね…」

フェイト
「ええ…おそらく…」

なのは
「じゃあ…単独機には私が行く…ッ！！」

シグナム
「無茶を言うなッ！！アイツの力はお前自身が分かっているだろうッ！！」

なのは
「分かってる…だからこそだよッ！！私が…私があの時、逮捕していたらギンガにヴィータちゃんは…」

フェイト
「なのは、ダメだよ！！そんなに自分を責めちゃ…」

なのは
「ありがとう。フェイトちゃん…だけど、お願い…ッ！！」

シグナム
「…分かった…だが、くれぐれも無茶だけはするなよ。私とテスタロッサもアンノウンの掃討が終わりしだいすぐに援護に行く。」

なのは
「うん、了解ッ！！」

フェイト
「なのは、気をつけてね…」

なのは
「うん、フェイトちゃんにシグナムさんもね…ッ！！」

三人はお互いの健闘を祈るとそれぞれの目標に向かって加速した。

次回に続く。

世界の悪意（後書き）

次回はいよいよ物語の大きな山場を迎えます。ご意見、ご感想をお待ちしております。

白い悪魔、黒き天使（前書き）

お待たせしました。今回で前半が終了です…お楽しみください。

白い悪魔、黒き天使

フェイト
「てやぁぁ？？ッ！！」

フェイトはバルディッシュを片手に1機のＧＮ－Ｘに突撃する。

彼女と相対するＧＮ－Ｘも大型ランスを構えて突撃する。お互いに交差した瞬間ＧＮ－Ｘがずり切れる。切れた断面からは激しいスパークが起きていた。

そして、ＧＮ－Ｘは鮮やかな赤い粒子を撒き散らしながら爆散した。

フェイト
「今日の私は本気で怒ってるよ…」

フェイトの只ならぬ殺気に残りの2機は少したじろぐ。彼女に対して格闘戦は無理だと感じ残りの2機は戦術を変えた。

ＧＮ－Ｘは大型ランスをアヘッドはビームライフルをフェイトに向けて射撃を開始する。

フェイト
「そんなもので…ッ！！」

彼女は浴びせられるビームの嵐を巧みに掻い潜り2機目のＧＮ－Ｘに目標をつけると一気に斬りかかる。

フェイト

「ジェット…ザンバー」

バルディッシュ
『了解。ジェット…ザンバー』

次の瞬間、フェイトはＧＮ－Ｘの前から消えた。そして、ＧＮ－Ｘは名前の通りＸに切られ爆発した。

フェイト
「ゴメンね…造られた君たちに恨みは無いけど…これ以上、親友（ともだち）を傷つけるような事はさせない…ッ！！」

フェイトは残ったアヘッドにバルディッシュの鋭い切っ先を向ける。

切っ先を向けられたアヘッドも彼女に対抗し機体のほとんどのＧＮ粒子をビームサーベルにまわす。

そして、アヘッドと彼女はお互いに最大速度で擦れ違った。

フェイト
「……ッ！！」

彼女の口からは一筋の血が流れる。彼女の腹部には肘から先だけのビームサーベルが突き刺さっていた。

彼女は気を失い、重力に引かれそのまま地面に向けて落下する。

その刹那、落下するフェイトを見下すアヘッドが爆発した。

フェイト

「やったよ…なのは……あとはお願い……」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一方、シグナムはすでに1機のＧＮ－Ｘを撃破していた。

シグナム

「やはり、お前達にも譲れない何かがあるのか…」

シグナムは最初の方は善戦していたが危機感を覚えたのか次第に敵の2機の動きが良くなっていた。

アヘッドはビームライフルで攻撃をし、その隙をついて彼女にランスを突き立てようとＧＮ－Ｘが襲いかかる。

シグナム

「しかし、こちらとて譲れない物はあるッ！！シュランゲンフォーム…ッ！！」

彼女が叫ぶとそれに呼応するようにレヴァンテインからカートリッジが射出され刀身が連結刃に変わる。

シグナムはＧＮ－Ｘの攻撃を回避するとレヴァンテインを振るう。連結刃はムチのようにしなりＧＮ－Ｘの体に巻き付く。

そして、シグナムは力任せにレヴァンテインの柄を引くとＧＮ－Ｘは腰の辺りから引き千切れた。彼女のトリッキーで柔軟な攻撃に思わず動揺するアヘッド。

シグナム

「あとは貴様だけだ…」

彼女はレヴァンテインを残ったアヘッドに向けて威嚇する。完全に追い込まれたアヘッドは意を決しビームサーベルを引き抜いた。

シグナム
「血迷ったか…」

シグナムはレヴァンテインを鞘にしまい目を閉じると精神を統一させ呼吸を整えると抜刀の構えを取る。

シグナム
「ふぅ……」

アヘッドはビームサーベルで彼女を切り裂こうと高速で接近した。

シグナム
「もらったッ!!!紫電一閃ッ!!!」

シグナムは閉じていた目をカッと見開くと目にも止まらぬ速さで斬撃を放つ。

シグナム
「ク……ッ!!」

彼女は苦痛で顔を一瞬歪めるが静かにレヴァンテインを鞘に戻した次の瞬間アヘッドは爆発した。

シグナム
「守るものが無い貴様たちの力はそんなものだ…見たか…これがヴ

ォルケンリッターの力だ…なぁ、そうだろヴィータ……」

シグナムはいきなり激しく吐血し地上に落下する。彼女の背中にはビームサーベルが深々と刺さり胸を突き抜けていた。アヘッドが爆発する瞬間に彼女に向けてビームサーベルを投げ放っていたのだ。

シグナム
「ふ、不覚だ…なのは…どうやら助けには行けないようだ…すまない…」

シグナムは目を閉じるとそのまま地上に向けて落下していった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

場所は変わりアスカとなのはは壮絶なドックファイトを繰り広げていた。

アスカ
「ああ…最高だぜッ!!ゾクゾクするぜッ!!」
なのは
「もお…止めてッ!!こんな酷いことは…ッ!!!」

アスカ
「馬鹿な事を言うじゃねぇッ!!傭兵が戦争をやって何が悪いッ!!それになこれはビジネスなんだよッ!!」

アスカは素早く変形させると両手持ちのGNビームライフルを彼女に向けて連射する。

なのは

「ク、この破壊と殺戮がビジネスですって…ッ!?あなたは心の底から歪んでいるわッ!!」

彼女は卓越した動きでアスカの攻撃を回避し砲撃魔法で反撃する。

アスカ
「ハハハッ!!それは誉め言葉として受け取っておこうかッ!!」

なのは
「あなたは絶対に私が倒してみせるッ!!この命に賭けてッ!!!」

アスカ
「面白いッ!!じゃあ、やってみろよッ!!女??ッ!!!」

アスカは総数16機の白い牙…ファングを一斉に放つ。

なのは
「（これがヴィータちゃんを…）アクセルシューター、シュート…ッ!!!」

なのははファング迎撃のためにピンク色の誘導魔力弾を撃つ。

アスカのファングとなのはの魔力弾がお互いに喰らい合う。

アスカ
「やるじゃねえかッ!!さすがは管理局の白い悪魔さんだッ!!!」

アスカはGNビームソードを引き抜くとなのはに猛スピードで斬りつける。

なのは
「別にいいよ…悪魔って言われても…あなたを逮捕するためなら…ッ！！」

なのははレイジングハートの柄でアスカの斬撃を受け止める。お互いの武器がぶつかり合いバチバチと激しい火花がほとばしる。

アスカ
「ああ…やっぱりムカつくぜ…自分たちが正義の味方だと信じてやまねえっていう面をしやがってッ！！」

なのは
「あなたこそ戦いと憎しみを生み出す権化よッ！！」

アスカ
「ケッ、勝手にほざいてろ女？？ッ！！」

アスカは肩に装備している連装砲をなのはに向けて容赦なく放つ。

なのは
「キャアア？？ッ！！！」

アスカ
「ほらッ！！どうしたッ！！お楽しみはこれからだぞッ！！行けよッ！！ファングゥゥ？ッ！！！」

爆発の衝撃で落下する彼女に追い討ちをかけるためにアスカは再びファングを解き放つ。

なのは

「ク、また…ッ！！プロテクション…ッ！！」

レイジングハート
『プロテクション…』

なのはは咄嗟に防御魔法を展開するがファングはそれを無視し彼女に牙を突き立てようと襲いかかる。

次々と彼女の防御魔法に白い牙が食い込む。

そして、とうとう防御魔法を突破した3機のファングはなのはの腕と脚にそれぞれ突き刺さり爆発した。

なのは
「アグ…ッ！！！」

なのはは爆発の衝撃で地上へと落下した。

アスカ
「チ、どこに行きやがったあのお嬢ちゃんは…」

アスカは彼女を見失い止めを刺せず内心イラついていた。

なのは
「ハァハァ…私、何やってるんだろう…」

彼女は戦いと地面に激突したダメージで満身創痍だった。

なのは
「こんな事してもアイツに殺された人やギンガ、ヴィータちゃんは

戻らないのに…」

上空ではアスカがなのはを殺すために血眼になって探していた。

アスカ

「クソッ！！本当にどこなんだ…ッ！！ああ…アイツの体を早く蹂躙してやりてえ……」

その時だった。ルシファーが微弱な生体反応を感知する。

ルシファー

『マスター見つけました…彼女です…』

アスカ

「そうか…良くやった…ククク…ようやく殺せるぜ？？ッ！！」

弱ったなのはを見つけたアスカは獲物を狙う猛獣のごとき眼差しでビームライフルを彼女に向けながら高速で接近する。

なのは

「だけど…なにがなんでもアイツを倒さないと誰とも向き合えないし前に進めない…ッ！！！」

彼女は決心し立ち上がるとレイジングハートをアスカに向けて構える。

なのは

「ゴメンね…レイジングハート…いつも無理ばかりさせて……」

レイジングハート

『気にしないで下さい。私はいつでもマスターの味方です…』

なのは
「ありがとう。レイジングハート…なら…今日こそアイツを倒してみせる…ッ！！！！」

なのはは非殺傷設定を解除し魔方陣を展開した。

なのは
「全力全開ッ！！スターライト…ブレイカ？？ッ！！」

彼女が叫んだ瞬間、何重にも重なった魔方陣から膨大なエネルギーの奔流が轟音と共にアスカに迫る。

アスカ
「な、何…ッ！！？」

アスカは慌て回避運動を取るが間に合わず左半身が極太の光に捲き込まれる。

しかし、アスカも光の彼方に消える刹那、なのはに向けて数発のビームを放ちそれは彼女に迫りやがて直撃、爆発した。

この戦いあと、時空管理局の地上本部は正式にアスカ（魔導師狩り）の死亡を発表し、みんなはこれでようやく平和になると思われた…

次回に続く。

白い悪魔、黒き天使（後書き）

ようやく、ミッドチルダにも平和が訪れましたね。しかし、それもつかの間の平和にしかなりませんでした。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

狂気再び…（前書き）

お待たせしました。お楽しみください。

狂気再び…

先の戦いからすでに四ヶ月が経っていた。ガジェットによる各地での小規模な戦闘はあるが世界は平和の香りに満ち満ちていた。

一方、スバルは姉のギンガの事が未だに信じられず、勤務中の合間をぬってはパソコンなど使い情報収集をやっていた。

ヴィータは驚異的な回復力でフォワード陣の訓練の監督に出れるまで回復していたが、リンカーコアを抜かれた後遺症から魔法は使用不能、そして満足に歩けず歩く際には専用の杖が必要だった。

しかし、彼女ははやてを初め大切な仲間が傍に居てくれるだけで十二分に幸せだったらしい。

そして、先の戦闘で負傷したなのは、フェイト、シグナムに関してだが…

まず、なのははアスカによる最後の一撃により左手を欠損する重傷を負った。今は欠損した左手を最新医学で開発した人工の手を移植し現場復帰している。

次にフェイトとシグナムはお互いに体をビームサーベルで貫かれており、発見収容された時は既に意識不明の重体で地面に激突した衝撃で数ヵ所の骨が折れていたが、また彼女らも驚異的な回復力で現場復帰を成し遂げていた。

また、なのは達に言えることは『疑似ＧＮドライヴ』から放出される赤い粒子は人体に取って細胞異常をもたらす毒であり、専用の薬

を服用しないと激しい発作と傷口の炎症など様々な症状が出ていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その日の夜、なのはとフェイトは別々の任務を終了した二人は一緒に六課に帰投していた。

フェイト
「なのは…体の調子はどう？大丈夫？」

なのは
「うん！私は大丈夫！フェイトちゃんこそ具合はどうなの？」

フェイト
「私も大丈夫だよ。」

二人が話しをしているといきなり緊急の救援通信が入る。

『誰か…お…応答……を…や、奴…だ……至急応援を…ッ！』

なのは
「どうしたんですかッ！しっかりして下さいッ！」

『た…助けて…ぎゃあぁぁぁ？？ッ！……』

何者か分からない救援通信は発信者の断末魔とともにぷっつりと途切れてしまった。

フェイト
「何だろう？今の通信は…それに奴って…」

なのは
「とにかく、行ってみないことには何も分からないし…」

フェイト
「そうだね。なのは、急ごう…」

なのは
「うん！」

なのはとフェイトは通信のあったポイントへ急いだ。そして到着した二人はお互いの目を疑った。

それは目の前に広がる闇夜を赤く照らし出す紅蓮の炎だった。

そして、管理局の基地と周辺の街を次々と飲み込んで行く炎から逃げ惑う人々をまるで狩りをするように狙い撃つ物があった。

なのは
「あれって…まさか…」

アスカ
「おうよッ！そのまさかだッ！」

アスカは振り向きざまに2丁のビームライフルを二人に向けて数発放った。

フェイト
「な、何で…ッ！！？お前はあの時なのはが…ッ！」

なのは

「そうよッ！あなたは私が確かに……」

アスカ
「確かにどうしたッ？殺したか…ッ！！？」

アスカはビームソードを引き抜く。そして猛スピードでなのはに迫る。

アスカ
「残念だったな？ッ！確かにあの一撃は効いたぜッ！おかげで体の半分が消し炭だッ！」

なのは
「クッ！プロテクション…ッ！」

なのははアスカの攻撃を紙一重で防御に成功する。そこへフェイトがバルディッシュで斬りかかる。

フェイト
「はあぁぁぁ？？ッ！」

アスカ
「甘めぇんだよッ！そらよッと…！」

アスカは足のつま先からビームサーベルを発生させるとフェイトの攻撃を受け止める。

フェイト
「な、隠し武器ッ！！？」

アスカ
「ハハハッ！武器ならまだ有んぞッ！」

アスカは肩の複合功盾に締まっていた巨大な蟹鋏のようなブレードを展開するとフェイトの体をガッチリと捕まえた。

フェイト
「うぐ…ッ！」

なのは
「フェイトちゃ?ん！」

アスカ
「へへへ…このままお嬢ちゃんの体を真っ二つにちょん切ってやんよ…」

アスカは彼女をゆっくりとなぶり殺しにするために少しずつブレードに力を加えていった。

そして、アスカはフェイトの苦痛に悶える瞳を見ながら楽しそうに舌舐めずりをする。

フェイト
「あが……っ！」

フェイトの体に少しずつＧＮ粒子で超高速振動する刃が食い込んでいく。彼女のバリアジャケットは破れ傷口からは次第に出血が多くなっていた。

なのは

「もう、止めて？ッ！」

レイジングハート
『プロテクション…バースト…』

なのははプロテクションを爆破、解除すると最大速度でフェイトに捕まっている左手側に回り込み射撃魔法で正確にブレードのみを破壊し彼女を助け出す。

なのは
「大丈夫ッ！！？フェイトちゃんッ！！？」

フェイト
「え、ええ…な…なんとか…ゴホッ！ゴホッ！」

彼女の口から一筋の血が流れ出る。

アスカ
「チ、まいどまいど、やってくれるな…お嬢ちゃん達はよ…」

なのは
「あなたは一体、どれだけ人を殺めれば気が済むの…ッ！」

アスカ
「さあな、それは俺の気分しだいだッ！行けよッ！ファングゥゥゥッ！」

アスカは二人に向けて８機のファングを放つ。

以前のとは違いスピードと機動性は申し分なく例え回避できても途

中で鋭角に曲がり再度ターゲットに向かい突撃する。

フェイト
「は、速いッ！！？」

なのは
「しかも…前よりも機動性が上がってるッ！」

バルディッシュ
『マスター…ッ！』

フェイト
「し、しまった…ッ！」

なのはとフェイトはファングのトリッキーな動きに翻弄される。

そして、彼女たちにファングが鋭い牙を突き立てようとした時だった。

アスカの放ったファング数機が謎の攻撃によって撃墜された。

アスカ
「な、何…ッ！！？」

アスカはファングを腰のコンテナに戻すと攻撃のあった方を見る。

シグナム
「紫電一閃ッ！」

そこには、レヴァンテインを抜きアスカに向かって猛進するシグナ

ムの姿があった。

アスカ
「ち、新手か……まあ、いいや…楽しみが増えて…」

アスカは右側の盾から再び蟹鋏のような隠し武器を展開しシグナムのをレヴァンテインを掴み取る。

シグナム
「なぜだッ！なぜ貴様がこんな所に居るんだッ！貴様はなのはが命を賭けて仕止めたはずだッ！」

アスカ
「フン…俺自身、驚いているさッ！これも古代ベルカの神の思し召しかッ！」

アスカはシグナムを嘲笑うかのように挑発する。

シグナム
「ふざけるなぁ？ッ！」

彼女はレヴァンテインを力一杯振りほどき間合いを取るとカートリッジを二発射出した。

シグナム
「貴様は絶対に許さんッ！これで終わりだ？ッ！」

シグナムはレヴァンテインを振りかぶる。

アスカ

「馬鹿が…ッ！」

アスカはシグナムの渾身の一撃を軽々と受け止めた。フェイトとなのはの二人はシグナムに呼応するかのように攻撃に参加した。

フェイト
「はあぁぁぁ…ッ！」

フェイトのバルディッシュは形状が変化し一本の大剣になっていた。アスカは二人の攻撃を隠し武器やビームソードなどで受け止めるがそこになのはが砲撃魔法を放つ。

なのは
「ディバイィ…ン…バスタァァーッ！」

ピンクの魔力光が迫るがアスカはフェイトとシグナムを一気に押し戻し飛行形態になることでなのはの攻撃を回避した。

アスカ
「このままでは粒子残量が……チ、ここまでのようだな…撤退するぞッ！」

ルシファー
『了解しました…』

アスカは体を翻すとアジトへと向かい飛び去って行こうとする。

フェイト
「逃がす訳ないでしょ…」

シグナム

「当たり前だ…今こそ奴を捕らえる絶好の好機だ」

なのは

「うんッ！急ぎましょうッ！アイツを逃がしてなるもんですか…ッ！」

三人は逃走するアスカになおも食い下がる。

アスカ

「ッたく、しつこいな…機動六課のお嬢ちゃん達は…あんなんじゃ、みんなから嫌われるぜ…」

ルシファー

『マスター、いかが致しましょうか？』

アスカ

「適当に閃光弾とファングでお嬢ちゃん達を足止めして時間を稼げ…」

ルシファー

『了解しました…では、射出します…』

アスカは閃光弾とファングを後ろから追撃してくる三人に向かって発射した。

フェイト

「あ、あれは…？」

シグナム

「分からん…しかし、気をつけろ…」

まずは閃光弾が彼女たちの十数m先で炸裂し三人の視界を奪った。

なのは
「キャ…ッ！！？」

フェイト
「め、目が…ッ！」

シグナム
「ク、閃光弾か……」

なのは
「二人とも…まだ…例の誘導兵器が来るよッ！」

閃光弾に続き、ファングが三人に襲いかかる。

フェイト
「目をやられたせいで兵器の弾道が読みづらい…」

シグナム
「しっかりしろッ！ギリギリまで見極めればこんな物…ッ！」

彼女たちはファングに弄ばれとうとうアスカを見失い取り逃がしてしまった。

次回に続く。

狂気再び…（後書き）

今回から物語は中盤戦に突入です。

ちなみにアスカはなのはの攻撃を受けたあとの事を話すと…その後、彼はナンバーズに発見、収容されスカリエッティに再生手術と同時に戦闘機人への改造手術を受けています。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

操られし者（前書き）

お待たせしました。今回はかなり短めですがお楽しみください。

操られし者

ここは機動六課、隊舎内の会議室…なのは達はそこに集まり事の次第をはやて達に話していた。

はやて
「何やてッ！あの魔導師狩りの犯人が生きているやてッ！！？」

なのは
「うん…確かに…間違いないよ…」

フェイト
「でも…どうしてだろう…あの時、なのはが倒したはずなのに…」

なのは
「確かにアイツは私が全力で放ったスターライトブレイカーをまともに食らったはず…」

シグナム
「だが、奴は現にあそこに存在したんだ…それが事実だ…」

はやて
「そやな…今は、これ以上被害を出さないようにせなあかんな…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

場所は変わり、ここはスカリエッティのアジト…

スカリエッティ

「どうだったかな？アスカ君…久しぶりの戦争は？」

アスカ
「馬鹿な事を言うな…あれは戦争じゃねぇ…ただの殺戮だ…大した抵抗もできない雑魚を殺しまくって何が面白い…」

スカリエッティ
「まあまあ…しかし、例の彼女たちの乱入で少しは良いウォーミングアップになったでしょう？」

アスカ
「まぁな…今度こそお嬢ちゃん達をバラバラに切り刻んで六課の部隊長の嬢ちゃんに送り付けてやる…考えただけでゾクゾクするな…」

アスカは機動六課のメンバーに想いを寄せ身震いをしていた。

アスカ
「ところで博士…あの姉ちゃんの調教は済んだのか？」

スカリエッティ
「ええ…データの吸出しや洗脳などすでに終わっていますよ…」

アスカ
「だったら、その姉ちゃんを預けてくれないか？」

スカリエッティ
「どうしてですか？何か面白い事でも思い付きましたか？」

アスカ
「まぁな…詳しくは企業秘密だ…」

そう言ってアスカはスカリエッティの部屋から出て行った。

次回に続く。

操られし者（後書き）

次回は久しぶりにギンガが登場です。

対峙する者たち…（前書き）

お待たせしました。今回は話しが長くなるので分けて投稿します。
お楽しみになってください。

対峙する者たち…

アスカ
「おい、姉ちゃん…もう一度聞くがお前が戦う相手は分かっているよなぁ？」

ギンガ
「もちろんです…私の戦う相手はスバル・ナガシマです…」

アスカ
「ＯＫだ…姉ちゃん…お前はその青髪のお嬢ちゃんと死ぬまで殺し合いをするんだ…良いな…？」

ギンガ
「…了解しました…」

アスカ
「まあ…博士には悪いが俺はどっちが死のうが関係ないんだがな…ククク…」

アスカは今、機動六課殲滅のために先行させたガジェットが居るポイントに向かっていた。

アスカの右翼側にはウイングロードを展開しながら追従するギンガ・ナガシマの姿があった。

彼女の瞳には生気が感じられずどこか虚ろでナンバーズと同じボディスーツを着用していた。

そして、その後方には先の戦闘で登場したアヘッドとＧＮ－Ｘの３機一組が二つと白い大型のＭＡ…『エンプラス』がいた。

アスカ
「作戦はさっき言った通り今回はお嬢ちゃん達も戦力を惜しみ無く投入するはずだ…なぁに、構うこたねぇ…逃げ出す奴にはケツの穴を余計に拵えてやれ…」

ギンガ
「了解……」

アスカ
「いよいよだ…久しぶりに血と鉄の嵐が吹き荒れるぞ…ッ！」

アスカ達は作戦通りに各々の場所へ向かってスピードを上げた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

場所は変わり、なのは達はガジェットの展開しているポイントに急いでいた。

アスカの予想通り今回は隊長たちに加え、フォワード陣もおり総力戦の構えを見せていた。

フェイト
「なのは…敵の反応を捕らえたよ…」

なのは
「うん、別れて来たみたいだね…」

シグナム
「で、なのは…私らはどうするんだ?」

なのは
「私たちも今回は別れて戦いましょう。フェイトちゃんとシグナムさんは敵を撃破しだいフォワードの援護をお願い…ッ!」

シグナム
「ああ、了解した…」

フェイト
「なのははどうするの?」

なのは
「私は奴を…犯人の相手をする…ッ!」

フェイト
「そう…分かった…なのは、気をつけてね…」

なのは
「うんッ!フォワードのみんなも聞こえた?戦いは激しくなるわ…気を引き締めていきましょうッ!」

フォワード
『『『『はいッ!』』』』

なのは達もアスカ達に向けてスピードを上げた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

フェイト
「証拠にもなく、また、あのロボットか…」

フェイトの前には以前戦ったＧＮ－Ｘとアヘッドがいた。

フェイト
「何度やっても無駄だよ…私は負けないから…」

フェイトは３機のＭＳにバルディッシュを向ける。アヘッドはビームライフルをＧＮ－Ｘは大型のランスを構えてオレンジ色の粒子弾を放った。

フェイト
「遅いッ！てやあぁぁッ！」

フェイトはビームの嵐を掻い潜り１機のＧＮ－Ｘに狙いを定めバルディッシュで斬りつけるがサラリと避けられた。

フェイト
「な、動きが前より良くなってる…ッ！」

以前の戦いから学習した３機は絶妙なタイミングで攻撃を仕掛けた。

その内の１機のＧＮ－Ｘがフェイトに向けて手榴弾を投げ彼女の目の前で炸裂した。爆発ともに緑色の微粒子が広がる。

フェイト
「目隠しのつもり？」

フェイトは敵の攻撃に備えて構えを取った瞬間、アヘッドがビーム

サーベルを振りかぶり煙幕を破って彼女に突撃する。

フェイト
「動きが単調ね…行くよ！バルディッシュ…ッ！」

フェイトは気合いを入れるが当のバルディッシュは魔力刃の出力が上がれないでいた。

フェイト
「ク…ッ！」

フェイトは急遽、体を捻るようにアヘッドの斬撃を避ける。

しかし、その際にバリアジャケットの一部が引き裂かれ出血していた。

フェイト
「どうしたの？バルディッシュ…ッ！」

バルディッシュ
『すみません…理由は分かりませんが、恐らくこの微粒子が原因かと…』

そう、先ほどＧＮ－Ｘが投げた手榴弾の中身はスカリエッティが開発した『魔力拡散幕』であるこれは彼がＧＮ粒子を研究しそのノウハウから製造した物だ。

よって、魔法を使う彼女らに取って極めて厄介な代物であると言える。

フェイトはこの煙のような物から脱出を試みようとするが3機のチームワークで苦戦を強いられていた。

フェイト
「クッ！この私が防戦一方になるなんて…ッ！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一方、別の場所ではフォワードの四人は同じくＭＳ3機と対峙していた。

エリオ
「こ、これがフェイトさん達が言っていた量産型のロボット…」

ティアナ
「みんな、気をつけて…奴ら、隊長たちに引けをとらないわよ…ッ！」

キャロ
「はい……ッ！」

スバル
「…ッ！来たッ！ティア、クロスシフトＡッ！行くよッ！」

ティアナ
「ＯＫッ！クロスファイア…シュートッ！」

ティアナは襲いかかる1機のＧＮ－Ｘに狙いを定めクロスミラージュの引き金を引いた。

オレンジ色の魔力弾が狙った1機に直撃するが左手に装備しているディフェンスロッドによって防がれてしまう。

ティアナ
「嘘ッ!!?効いてないのッ!!?」

スバル
「ティア、私に任せてッ!はあぁぁぁッ!」

スバルのリボルバーナックルが高速回転し始め強烈な一撃をＧＮ－Ｘの胸部に叩き込んだ。

ＧＮ－Ｘは少し痙攣したかと思った瞬間その場に倒れ爆発した。

ティアナ
「あ、ありがとう…スバル…それにしてもやるわねぇッ!」

スバル
「ま、まあね…」

エリオ
「ティアナさん、スバルさんッ!次が来ます!キャロ、僕らも行くよッ!」

キャロ
「り、了解ッ!ブースト…ッ!」

エリオもキャロの補助魔法を受け残りのＭＳに突撃する。

しかし、いくらスピードに自信があるエリオでもＭＳ2機を相手を

するのは骨が折れる。

しかも、アヘッドとＧＮ－Ｘの戦いには何だか違和感があった。２機は絶妙なコンビネーションでスバルと他のフォワードを引き離そうとしていた。

ティアナ
「おかしい…奴ら、わざとスバルと私らを引き離してる…」

その時だった。猛スピードでスバルに突撃するモノがあった。それを見たスバル達は驚愕した。そこには戦闘態勢を取った姉のギンガの姿があった。

スバル
「え…ギ、ギン姉…ど、どうして…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして、なのはは狙っていたアスカではなく彼女と同じ白色にカラーリングされた大型のＭＡ…『エンプラス』と戦闘を繰り広げていた。

なのは
「いったい、奴はどこにいるのッ！」

エンプラスはなのはの言葉を無視し容赦なく攻撃を行う。機首の部分が展開しそこから彼女にひけを取らないほどの出力でビームを放つ。

なのは

「ク……ディバイ?ン…バスタ?ッ!」

なのははエンプラスの攻撃を避けると反撃のために砲撃魔法を放つ。

しかし、エンプラスもその巨体からは想像できない動きで回避した。

なのは

「な、避けられたッ!それにしてもアイツの動き何だか時間稼ぎをしているみたい…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして、シグナムは一人ポイント上空を高速で飛行していた。

シグナム

「早く奴を見つけなければ…奴は危険すぎるッ!」

アスカ

「それはいったい誰なんだぁッ!ピンク色の姉ちゃんよぉ?ッ!」

その時、いきなり猛獣の咆哮に似た声と共に上空から両手にGNビームソードを持って猛スピードでシグナムに向かうアスカの姿があった。

シグナム

「…ッ!!?上からだと…ッ!!?」

シグナムは咄嗟にレヴァンテインを抜くとアスカの攻撃を受け止めた。ぶつかり合うお互いの得物からは激しい火花が散っていた。

次回に続く。

対峙する者たち…（後書き）

如何だったでしょうか？次回はギンガとスバルの戦いを書こうと思います。

あと、ご意見・ご感想をお待ちしております。

戦う理由…（前書き）

お待たせしました。どうぞお楽しみになって下さい。

戦う理由…

シグナムとアスカはお互いに激しくぶつかり合う。

それにしても、なぜアスカは当初の作戦とは違いなのはではなくシグナムを選んで戦っているのかと言うと単に気分が変わったからである。

理由をつけるとしたらなのはと直接戦うよりも彼女の仲間たちを傷つけた方がより面白い殺し合いができると思ったからだ。

そう、アスカにとって今のシグナムはメインディッシュ前の前菜であった。

アスカ
「お前には以前、金髪のお嬢ちゃんを殺す時に邪魔された借りがあるからなぁッ！延滞金も含めてガン首揃えてキッチリ返してやるよぉぉッ！」

シグナム
「ク、貴様は毎度、毎度どこまでも…ッ！」

二人はお互いの体を引き裂こうと激しく剣を交える。アスカは殺し合いを楽しみ、そしてシグナムは怒りに満ちながら…

アスカ
「オラ、オラァッ！どうしたぁ？そんなんじゃ俺は殺せねぇぞッ！ヴォルケンリッターの騎士さんよぉぉ？ッ！」

シグナム
「今日こそヴィータの仇を取らせて貰うぞッ！」

アスカ
「ククク…お前は馬鹿かッ！」

シグナム
「な、何…ッ！！？」

アスカ
「死んだ奴の仇を取ろうなんざお前みたいな馬鹿か相当のお人好しのやることだぞッ！」

シグナム
「貴様こそ馬鹿者だ…ヴィータはまだ生きているぞッ！」

アスカ
「何ッ！？やっぱりあの時、傷口を焼いたのが間違いだったか…それにしても、しぶてぇガキだ…」

アスカが一瞬、気を緩めた隙にシグナムは剣を弾き間合いを取る。

シグナム
「隙ありッ！紫電一閃ッ！」

アスカ
「ク……ッ！」

シグナムはアスカのビームソードを叩き落とす。アスカは瞬時にGNツインビームライフルに持ち変えるとシグナムを撃ち落とそうと

ビームを放つ。

シグナム
「甘いッ！シュランゲンフォーム！」

レヴァンテインからカートリッジが射出され刀身が連結刃のようになる。

シグナム
「飛竜一閃ッ！」

レヴァンテインが鞭のように撓りながらアスカ元へ向かって勢い良く伸びる。

アスカ
「嘗めるなよッ！このアマがッ！行けよ、ファングゥゥゥッ！」

アスカも負けじとファングを放ちシグナムに対抗してみせた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

場所は変わり、なのはは以前としてＭＡエンプラスと交戦している。

なのは
「つ、強い…この新型のガジェットは従来とは一線を化している…」

エンプラスはなのはと一定の距離を取っていた次の瞬間、エンプラスが彼女に向けて素早くワイヤー状の物を射出する。

なのは

「な、何ッ！？これは…身動きが…ッ！」

なのははワイヤーから逃れようと必死になるがなかなか抜け出せない。

そして、次の瞬間ワイヤーを通してなのはに高圧電流が流れた。

なのは
「あ、あぁぁぁぁッ！」

なのはの体に激痛が走る。彼女のバリアジャケットも無理やり捩じ込まれた強力な電気抵抗で少しずつ焼け焦げてきていた。

なのは
「も、もう…ダメ……」

なのはがあまりの激痛で諦めそうになった時であった。一筋の黄色い閃光がエンプラスとなのはを繋いでいたワイヤーを断ち切った。

フェイト
「大丈夫ッ！？なのはッ！しっかりしてッ！」

なのは
「フェ、フェイト…ちゃん……？」

なのはは電撃のダメージで意識が朦朧としていた。そんな中で彼女の目に映ったのは心配そうになのはの顔を覗き込むフェイトの姿だった。

フェイト

「良かった…無事みたいだね…」

なのは
「うん…何とか…ありがとう…フェイトちゃん…」

なのははフラフラだが何とか自力で宙に浮く。フェイトは苦戦したがアヘッド達を既に撃破していた。

フェイト
「なのは、それにしてもアレは…」

なのは
「分からないけど…かなり厄介だよ。アイツは…」

フェイト
「確かに…それに犯人はどこに……」

なのは
「私たちじゃないとしたらフォワードとシグナムさんが危ないッ！」

フェイト
「早くコイツを倒して応援に行かないと…ッ！」

なのは
「うんッ！私に任せてッ！エクセリオン…バスタ??ッ！」

なのはは今持てる力で砲撃魔法を放つがエンプラスは強力なＧＮフィールドで防ぐ。

フェイト

「一人がダメなら二人よ…トライデント…スマッシャ？ッ！」

フェイトもなのはに続き電撃魔法を放つ。エンプラスは二人の魔力に次第に押されとうとうGNフィールドを突破され攻撃が直撃、赤い粒子を撒き散らしながら爆散した。

なのは
「何とかこの場は終わったね…フェイトちゃん…」

フェイト
「うん…だけど、シグナム達が心配だ…」

なのは
「そうだね…私はフォワードのみんなの所に行くからフェイトちゃんはシグナムさんをお願い。」

フェイト
「うん、分かった。なのは、気をつけてね……」

なのは
「こちらこそ、気をつけてね。フェイトちゃん…」

二人はそれぞれの場所へ急いだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

スバル
「え？どうして…どうしてなのッ！！？」

スバルは今、姉のギンガと対峙していた。

ギンガ
「目標を捕捉…これより殲滅を開始します…」

ギンガの足元に魔方陣が展開し一気にスバルとの間合いを詰める。

スバル
「お願いだから、ギン姉って…きゃあッ！」

ギンガはスバルの腕を掴むとおもいっきり地面に叩き着けた。

スバル
「カハッ！ううぅ…」

痛みでうずくまるスバルを感情の無い瞳で見ながらギンガは彼女の額を掴み上げた。

そして、そのままギンガは渾身の一撃をスバルに叩き込んだ。

常人なら間違いなく即死するほどの一撃だろう。戦闘機人のスバルでさえ意識をもって逝かれそうになっていた。

スバル
「やっぱり…私…ダメだ…みんなを助けるどころかギン姉一人助ける事も出来なかった…」

宙を舞っているスバルは内心諦めながら止めを刺そうと迫るギンガを見つめていたが、ギンガの止めの一撃はスバルのデバイス…『マッハキャリバー』によって防がれていた。

スバル
「え?ど、どうして…私は……」

マッハキャリバー
『しっかりして下さい!相棒ッ!私はまだ戦えるのにあなたは諦めるのですか?』

スバル
「マッハキャリバー…」

マッハキャリバー
『あなたが話してくれた私の生まれた理由…それを嘘にしないで下さいッ!』

スバル
「……ゴメン…マッハキャリバー…私…どうかしてた…」

マッハキャリバー
『では……』

スバル
「うんッ!行くよッ!マッハキャリバーッ!」

マッハキャリバー
『了解ッ!相棒ッ!』

スバル
「ギン姉ッ!少し痛いけど我慢してねッ!必ず助けるからッ!」

スバルの瞳には再び闘志に燃える炎が宿り、リボルバーナックルか

らカートリッジが3発射出された。

スバル
「ギア…エクセリオン…ッ！」

次の瞬間、二人はウイングロードを発動しお互いに拳をぶつけ合う。

今の二人の力は拮抗しているためかまるで鏡のように同じ攻撃を繰り出す。

そして、再び二人は拳をぶつけ合った。お互いのプロテクションを破ろうと拳が唸りをあげる。

ギンガは拳を解くとドリル状に回転させるとスバルのプロテクションを突破した。

しかし、スバルは迫るギンガの攻撃を紙一重でかわすと彼女の腹部に左の拳を翳した。

スバル
「ディバイ?ン…バスタ??ッ！」

そして、ギンガはスバルの放った渾身の一撃の前に敗れ去り水色の光の中に消えて行った。

次回に続く。

戦う理由…（後書き）

次回はシグナムｖｓアスカの戦いのクライマックスを投稿します。

さあ、シグナムは驚異的な強さを誇るアスカを打ち破ることができるのか…

ご意見、ご感想をお待ちしております。

烈火の将、最後の日…（前書き）

お待たせしました。随分と間が開いてしまいスミマセンでした。

お楽しみください。

烈火の将、最後の日…

スバルとギンガの二人が戦いを終えた頃、シグナムとアスカは未だに壮絶な戦闘を繰り広げていた。

アスカ
「嘗めるなよッ！このアマがッ！行けよッ！ファングウゥゥ？ッ！」

アスカはシグナムに向けて１０機のファングを解き放つ。

シグナム
「そんな物…私には通用せんッ！飛竜一閃ッ！！！！」

シグナムは襲いかかるファングを次々と撃墜していく。端から見ると彼女は美しい剣舞を舞っているようだった。

アスカ
「俺はなぁ…自分が一番強いと思っている奴が大嫌いなんだよぉ？ッ！」

シグナム
「それはこちらとて同じだ？ッ！」

シグナムとアスカは再び剣を交える。

アスカ
「面白いッ！その余裕、ズタズタに引き裂いて悲鳴に変えてやんよ？ッ！」

アスカはシグナムから離れ背中の翼を広げると赤い粒子を広域に散布した。

シグナム
「こ、これは……」

シグナムは目の前で起きている光景に只々、驚愕している。アスカは高濃度に圧縮したＧＮ粒子を翼を通して広域に散布し通信などを妨害する『ＧＮステルスフィールド』を発動したのだった。

アスカ
「ククク…これで通信や助けは来ないぞ。さぁ、楽しい戦争（ショー）の始まりだぁ？ッ！」

アスカは彼女に向けてビームライフルと肩の連装砲を連射する。

シグナム
「この下衆めがッ！」

シグナムは嵐のような弾幕を避けながらアスカに迫った。

シグナム
「紫電一閃ッ！」

アスカ
「フン、そんなの俺に当たるわけねぇだろッ！」

アスカはシグナムの斬撃を宙返りをするように回避すると同時に彼女の背中に蹴りを入れた。

シグナム
「うぐ…ッ！」

そして、アスカはシグナムに追撃を掛けるためにファングを４機差し向けるのだった。

シグナム
「チ、こんな所で負けるわけにはいかんッ！」

シグナムは卓越した動きでファングを次々と撃ち落とした。

しかし、残った１機がシグナムの左わき腹に突き刺さり、肉を抉り、骨を砕き、勢いに任せ地面に叩き付けた。

シグナム
「うぐ…ッ！」

アスカ
「隙あり？ッ！」

アスカはＧＮビームソードを右手に持ちシグナムに斬り掛かる。

シグナム
「まだまだ？？ッ！」

シグナムは左手で負傷したわき腹を押さえながらアスカの攻撃を受け止め上空に逃げる。

アスカ
「ハハハッ！馬鹿がッ！逃がさねぇよ？ッ！」

アスカは上空に逃げたシグナムに尚も食い下がる。

シグナム
「（このままでは埒が開かない…）ここは一気に片を着けさせて貰う…飛竜一閃ッ！」

次の瞬間、レヴァンテインがムチのように撓りアスカに迫る。

シグナム
（もらったッ！これは避けられまい…ッ！）

シグナムは勝利を確信したがそれは直ぐに覆されてしまった。

アスカ
「ククク…考えが甘かったなピンクの姉ちゃんッ！」

シグナム
「な、何…ッ！！？」

アスカは変形することでシグナムの攻撃を回避すると再び彼女の前で変形し足先に展開したビームサーベルでシグナムの体を切り裂いた。

シグナム
「ガハ…ッ！」

シグナムは激しく吐血し地上に落下する。

アスカ

「逝っちまいなッ！ファングゥゥゥ？ッ！」

アスカは彼女に追い討ちを掛けるために温存していたファングをシグナムに向けて放った。

放たれたファングは餌を見つけた魚のようにシグナムの体に群がり幾度となく鋭い牙を突き立てる。その行為は彼女が地面に激突するまで続けられた。

シグナム
「……」

アスカ
「ハハハッ！さっきまでの威勢はどうしたんだぁ？ピンクの姉ちゃんよぉ？」

シグナムはアスカの挑発的な言葉にも答えるどころかピクリとも動かそうとはしなかった。

アスカ
「何だぁ？もう逝っちまったのかぁ？詰まんねなぁ～」

アスカは動かなくなったシグナムに近づき不用意に前髪を掴み上げる。

アスカ
「まぁ、安心しな…お前があの世に逝っても寂しく無いようにテメェの仲間も全員ブチ殺してやるから…よ…」

ついさっきまで余裕の表情をしていたアスカの顔が苦痛に歪む。

アスカの腹部にはシグナムが最後の力を振り絞って振るったレヴァンテインが深々と突き刺さっていた。

シグナム
「き…貴様なんぞに慈悲は受けん…」

アスカ
「テ、テメぇ…」

シグナム
「ヴィ…ヴィータ…一矢は酬いたぞ……」

アスカ
「嘗めるなよッ！このアマがッ！」

アスカは逆上しシールドに格納してある大型の蟹鋏を展開するとシグナムの右腕を掴むと力任せに引き千切った。

シグナム
「…ッ！！？あああぁぁぁああッ！！！！」

シグナムは獣のように絶叫し悶絶する。

アスカ
「ハハハッ！痛いだろう？楽になりたいか？」

シグナム
「うぐぐぅぅぅ…」

アスカ
「ククク…激痛で喋る気もないか…だけどなあ、只では済まないぜ…それにそんなにあのガキの事が心配ならテメぇのリンカーコアを抉り取って俺の疑似太陽炉と融合してやんよ…」

アスカは自分の腹部に刺さったままのレヴァンテインを引き抜きやがて動かなくなったシグナムの胸に突き立てたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

フェイト
「早くしないと…シグナム……」

フェイトはシグナムを援護するために一人目的地へと急いでいた。

すると彼女が向かっていた方角から赤い粒子を撒き散らしながら高速でアスカが迫って来ていた。

フェイト
「あ、あなたは…ッ！」

アスカ
「ああ…金髪のお嬢ちゃんか…一足遅かったな…」

フェイト
「ど、どういう事…？」

フェイトはバルディッシュを構え戦闘態勢を取る。

アスカ

「これが何だか分かるか？お嬢ちゃん…」

アスカは右手に持った淡い紫色に光る結晶体をフェイトに見せる。

フェイト
「そ、それってまさか……ッ！」

アスカ
「そうさ…お嬢ちゃんの察している通り、あのピンクの姉ちゃんのリンカーコアだ…」

フェイト
「き、貴様あああぁぁ？？ッ！」

フェイトは激昂しアスカにバルディッシュを振り上げて斬りかかる。

しかし、アスカはフェイトの攻撃をヒラリと避けると彼女を挑発する。

アスカ
「いいね～いいね～その殺意に満ちたお嬢ちゃんの眼は…最高に綺麗だ…ククク…俺をその斧でバラバラに切り刻んで殺したいか？」

フェイトはアスカに挑発され一層バルディッシュを握る手に力を込める。

フェイト
「あ、あなたって人はどこまで人を馬鹿にして…」

アスカ

「フン…まぁ、俺を殺すのは勝手だがその間にピンクの姉ちゃんはあの世に旅立っちまうぞ？」

フェイト
「ク……ッ！」

アスカ
「さぁ、どうする？仲間の姉ちゃんを見捨て俺を殺すか、任務を捨てて助かるか分からない姉ちゃんを助けに行くか…二つに一つだ…」

フェイト
「も、もし…シグナムに何かあったら私はあなたを許さないから…」

そう言うとフェイトは体を翻しシグナムの居るであろう場所に向かって飛び去って行った。

アスカ
「ハハハッ！馬鹿な女だッ！こんなチャンスを捨てて助かるか分かんね仲間の所に行くとはトコトン呆れた奴だッ！」

アスカは高笑いしながらアジトに帰って行った。

次回に続く。

烈火の将、最後の日…（後書き）

これでまた機動六課の主力の一角が落ちてしまいました。

残り少ない主力メンバーで、どう『魔導師狩り（アスカ）』に立ち向かって行くのか…こうご期待ッ！

ご意見、ご感想をお待ちしております。

戦いの代償（前書き）

お待たせしました。今回は会話中心で話しを進めます。

戦いの代償

フェイト
「ひ、非道い……」

フェイトは現場に到着して自身の目を疑った。眼下に広がるのはさっきまで壮絶な死闘を繰り広げていたであろう場所であった。

フェイト
「シグナム、シグナムはどこに居るの……」

フェイトは着地して辺りを歩いて周りシグナムを探した。

そして、数分後…探していたシグナムを発見したがその惨状を見たフェイトは絶望した。

フェイト
「う、嘘…だよね…こんなの……」

シグナムは自身のバリアジャケットの色が分からないほど全身が血まみれで胸には愛刀のレヴァンテインが刺さり瓦礫に貼り付けにされた姿で見つかった。

そして、そんな彼女の傍らにはアスカよって引き千切られた自身の右腕が捨てられていた。

そんな痛々しい姿のシグナムを見たフェイトは動揺を隠せないでいた。

フェイト
「シグナム、しっかりしてッ！お願いだから…ッ！」

シグナム
「ぅ…テスタロッサか…」

何とフェイトの必死の呼び掛けに対しシグナムは反応しうっすらと目を開けて言葉を返したのだった。

シグナム
「す、済まない…私とあろう者がこの様だ…」

フェイト
「そんな事ないよ…シグナムは頑張った…だから、もう少し待ってね…今、六課に連れて行くから…」

シグナム
「た、頼む…ゴホッ！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

場所は変わり、アスカはと言うと撤退しながらもギンガに通信を入れ続けていた。

アスカ
「おいッ！姉ちゃんッ！応答しろッ！聞こえねぇのかッ！！？」

『……？…？…？…』

アスカ

「チッ、参ったな…ウンともスンとも言わねぇ…アイツ、姉貴のくせに妹に負けやがって…情けねぇ…」

ルシファー
『全くです…それにしても今回はこちら側の損害の方が大きいですね…』

アスカ
「ああ…ＭＳ部隊は全滅、機械の姉ちゃんも連れて帰れねぇし…」

ルシファー
『私も手傷を負ったので治療と調整をしないといけません…これでは博士に何と言われるか分かりませんよ…マスター。』

アスカ
「ったく、これも全部あのお嬢ちゃんたちのせいだ…胸クソが悪りぃぜ…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

フェイト
「なのは、ギンガの容態はどう…？」

なのは
「こっちは大丈夫みたい…スバルがうまく戦ってくれたからギンガ自身は無事よ…そっちこそシグナムさんはどうなの？」

フェイト
「こっちは今も危険な状態続いてるわ…出血も多すぎるし、なにせリンカーコアを抜かれていて、ヴィータ同様に復帰は絶望的みたい

…」

なのは
「そんな……フェイトちゃん、はやてちゃんにはこの事はもう伝えたの？」

フェイト
「ううん…まだ伝えてない…」

なのは
「どうしてッ！？早く伝えて上げないと…ッ！」

フェイト
「待ってなのは…今はダメ…はやては只でさえ魔導師狩りの事件にロストロギアと色々て抱え込み過ぎているんだよ？」

なのは
「確かにそうだけど…ここはきちんと話した方がいいよ…」

フェイト
「…やっぱりダメ…はやてにこれ以上、迷惑はかけたくない。」

なのは
「じゃあ、シグナムさんにもしもの事があったらどうする気なの？」

フェイト
「その時は私が命を賭けて責任を取るよ…」

なのは
「フェイトちゃん……」

フェイト
「だから、なのははスバルたちを見てて上げて。私はシグナムに付き添っているから…」

なのは
「分かった、フェイトちゃんも無理しちゃダメだよ?フェイトちゃんまで倒れたりしたらそれこそ…」

フェイト
「ありがとう…私は大丈夫だから、なのはこそ体、気をつけてね。」

なのは
「うん……」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

スカリエッティ
「…で、今回はこちらの方が損害が多いみたいだね。ＭＳ部隊に新型のエンプラスは全滅…それに私のタイプファーストもそのまま放棄…」

アスカ
「……」

スカリエッティ
「よく、ノコノコと帰って来れまして。」

アスカ
「チ、ごちゃごちゃとうるせぇな…確かに今回は俺の負けだが、そ

れに似合うだけの物は持って来ただろうが…ッ！」

スカリエッティ

「まぁ、確かに烈火の将を倒したのは認めよう…だけど、君は言い訳する前にまずは今日の失態を謝罪するべきじゃないかな？」

アスカ

「何だと？なぁ博士…俺の依頼主だからって少し言い過ぎじゃないか？」

スカリエッティ

「謝罪する気はないのか…強情だね…さすがは筋金入りのテロリストだ…」

アスカ

「じゃあ、どうする？博士の言い様はまるで俺を調教するみたいだな？」

スカリエッティ

「はぁ…仕方ないですね…（パチン）」

スカリエッティは落胆しながら自身の指を鳴らした瞬間、アスカは頭を抱え込み苦しみ出した。

アスカ

「ぐっ…ぐあぁぁあッ！あ、頭がッ！」

ルシファー

「マ、マスターッ！！？」

スカリエッティ
「どうです？かなり効くでしょう？」

アスカ
「は、博士…いったい俺の頭に何をしやがった…」

スカリエッティ
「この間、再生手術と戦闘機人への改造をした際に君の頭にちょっと細工をさせてもらいました…」

アスカ
「な、なぜだ…なぜそんな事をしたんだ…ッ！」

スカリエッティ
「君は確かに良くやっているが時々、私の傑作機であるウーノ達を小馬鹿にしたり調子に乗り過ぎたりと色々あるんでね、お仕置きと首輪をかねて仕込ませてもらったよ。」

アスカ
「あがぁぁ…は、早く…早く止めてくれ…ッ！」

スカリエッティ
「じゃあ、分かっていますよね…？」

アスカ
「あ、ああ…だから早く…ッ！」

スカリエッティ
「分かりました…では、止めましょう…」

スカリエッティが再び指を鳴らすとアスカを苦しめていた激しい頭痛がピタリと止まった。

アスカ
「ハァハァ…済まなかった、博士…こ、今回の事は謝るよ…」

スカリエッティ
「そうですよ…初めから素直に言ってくれれば良かったんですから…それに次のミッションプランです。目を通しておいて下さいね…アスカ君…」

アスカ
「ああ…了解した…」

スカリエッティ
「じゃあ、私は彼女…ルシファーの治療に調整と色々と忙しいのでこれで失礼させてもらうよ。さあ、行きますよ、ルシファー…」

ルシファー
「……はい、かしこまりました…ドクター。では、行って参ります…」

スカリエッティとルシファーの二人は部屋から出ていった。

そして、部屋に残ったアスカは苛立ちを隠せず辺りの物に怒りをぶつけていた。

アスカ
「…ったく、ムカつく事をやってくれたな…あの変態科学者さんは…いつか、ぶち殺してやる。」

次回に続く。

戦いの代償（後書き）

次回はちょい役でヴィヴィオが登場します。お楽しみ！

ご意見、ご感想をお待ちしております。

トランザム発動（前書き）

今回は少し長くなりましたがお楽しみください。

トランザム発動

キャロ
「なのはさんッ！こちらですッ！」

なのは
「どうしたのッ！！？その子はッ！！？」

エリオとキャロは駆けつけたなのはにことの顛末を話した。

今日は六課のフォワード陣は休暇をもらっていた。ちなみにスバルとティアナは姉のギンガに付き添いで今はこの場に居ない。

エリオ
「それでこの子はどうしましょう？」

なのは
「大丈夫、安心して二人とも…この子の保護とレリック確保の為の連絡はすでにしてあるから…って、エリオ、キャロ伏せてッ！」

なのはは咄嗟にプロテクションを張ったと同時に下水道の天井が融解し赤黒い極太のビームがなのは達を襲った。

なのは
「クゥゥゥ？ッ！」

キャロ
「きゃあぁぁぁぁッ！」

ビームはやがて収まりなのは達が上を見上げるとそこには漆黒のMS…アスカが居た。

アスカ
「なあ…どうして、白いお嬢ちゃんたちがこんな所にいるだぁ？」

なのは
「それは私たちの台詞ッ！どうしてあなたがッ！」

アスカ
「別にお嬢ちゃんたちには関係ねぇよッ！」

なのは
「エリオとキャロはその子を連れて早くここから逃げて…ッ！」

エリオ、キャロ
「「は、はいッ！」」

エリオは意識を失っている少女を抱えてキャロと共に逃げていった。

アスカ
「おうおう…健気だね～ガキは逃がして自分はここで死のうって言うのか？」

なのは
「別に私はここで死のうとは思ってないし誰も死なせない。」

アスカ
「ククク…じゃあ、やって見ろよッ！女ぁぁッ！」

アスカはビームソードを構えるとなのはに向けて突進した。

なのは
「プロテクションッ！」

なのはの盾とアスカのビームソードがぶつかり合い激しく火花を放つ。

アスカ
「ククク…良いね…その目…ゾクゾクするよ…」

なのは
「あなたって人は私達をどこまで馬鹿にすれば気が済むのッ！」

アスカ
「フン、勝手にほざいてろッ！それにな…今回は俺一人じゃないんだぜぇ？」

なのは
「えっ、何ですって？」

アスカ
「馬鹿が隙ありッ！ソイヤぁぁッ！」

アスカはなのはのプロテクションを切り裂きレイジングハートを切り払うと彼女に蹴りを入れた。

なのは
「かは…ッ！」

なのはは蹴られた勢いで下水道の壁に激しく叩き付けられた。

アスカ
「ハハハッ！逝っちまいなぁぁッ！ファングゥゥゥッ！」

アスカはなのはに止めを刺すべく１０機のファングを差し向ける。

なのは
「まだまだ？ッ！クロスファイア…シュートッ！」

なのはも得意の射撃魔法で迫り来るファングを次々と撃墜していった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一方、エリオとキャロは暗い下水道を出口に向けてひた走っていた。

エリオ
「キャロ！もう少しで地上に出るから頑張って！」

キャロ
「う、うんッ！だけど、私、あの人の事が怖い…」

エリオ
「大丈夫ッ！今はなのはさんが付いているし、キャロは僕が守るから…ッ！」

キャロ
「エリオくん…／／／／って危な？いッ！」

その時だった。キャロが叫ぶと同時に火炎弾が二人を襲う。

キャロ
「きゃあああぁあぁッ！」

エリオ
「うわあああぁあぁッ！」

猛烈な爆風に成す術もなく二人は煽られてしまった。

キャロ
「エリオくんッ！大丈夫ッ？」

エリオ
「こっちは大丈夫ッ！女の子も無事だよッ！」

爆風によって舞い上がった粉塵が晴れると目の前に三人の人影が見えた。

一人は桃色の長髪でエリオ達と歳もあまり変わらないような女の子だ。

そして、別に赤毛の小さな女の子に黒い人型の異形がいた。

エリオ
「あ、新手…ッ！キャロ…この子をお願い…」

キャロ
「うん…分かった…ッ！フリードもお願いねッ！」

フリード
「クキュ～ッ！」

二人は警戒し戦闘態勢に入る。

？？？？
「おいッ！その子をこちらに渡して貰おうかッ！」

赤毛の少女がエリオ達に叫ぶ。

キャロ
「嫌ですッ！この子は六課で保護します。」

？？？？
「どうするよ…ルールー？あんな事言ってるぜ？」

ルーテシア
「仕方ないね…アギト…失敗すると博士から何て言われるか分からないし、ここは力ずくで奪い取りましょう…」

アギト
「よっしゃッ！腕がなるぜッ！覚悟しろよッ！」

ルーテシア
「ガリューもお願い…」

ガリュー
「……コク…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

なのは
「ううぅ……」

なのはは下水道の壁に張り付けされていた。体にはファングが突き刺さり痛々しい姿だった。

アスカ
「どうだぁ？痛いかぁ？ククク…それにしても、お嬢ちゃんは良い体をしているよなぁ～」

アスカは妖艶な笑みを浮かべながらなのはの頬を撫でる。

なのは
「い、嫌…触らないで…」

アスカ
「まあ…そんなに嫌がるなよ…ああ…お嬢ちゃんの体を切り刻むのはちと勿体ないが……」

アスカはビームソードを構え切っ先を向ける。

アスカ
「じゃあなッ！白い悪魔のお嬢ちゃん」

なのは
（フェイトちゃん、はやてちゃん、みんな…ゴメンね…）

なのはは自分の死を覚悟し目を閉じるが彼女にアスカの残酷な刃で

切り裂かれることは無かった。

なのはが恐る恐る目を開けるとそこにはアスカの剣を受け止めるフェイトの姿があった。

なのは
「フェ、フェイトちゃん…ッ！！？」

フェイト
「なのは、しっかりして…ッ！」

アスカ
「ち、邪魔すんなよ…金髪のお嬢ちゃんがッ！」

フェイト
「なのはは私が守るッ！絶対にッ！」

フェイトは力ずくでアスカを押し戻して間合いを取った。

アスカ
「ち、やってくれるな…これならどうだッ！」

アスカは肩の連装砲をフェイトに向けて連射する。

フェイト
「そんな物は私には当たらないッ！てやあぁぁぁぁッ！」

フェイトは自慢のスピードでアスカの猛攻を掻い潜り攻撃を仕掛ける。

アスカ
「く、この俺が押されているだと…ッ！」

なのは
「（私も早くこれをどうにかしてフェイトちゃんの援護にいかないと…）クッ！フェイトちゃんッ！ディバイ?ン…バスターッ！」

なのはは刺さっているファングを抜き取るとレイジングハートを構え砲撃魔法を放った。轟音ともにピンク色の光がアスカを襲う。

アスカ
「チ、ルシファーッ！ＧＮフィールド展開ッ！」

ルシファー
『了解しました…ＧＮフィールドを展開します…』

アスカはＧＮフィールドでなのはの砲撃魔法を防ぎ切る。

アスカ
「ク、こんな場所じゃ本気が出せねぇか…」

アスカはＧＮツインライフルを肩の万能シールドと連結しランチャーモードで下水道の天井を撃ち抜き外へ出ていった。

フェイト
「あ、アイツ…逃がさない…ッ！」

なのは
「ちょっと待ってフェイトちゃん。犯人よりもエリオ達が心配だよッ！」

アスカを追跡しようとフェイトも続くがなのはが止める。

フェイト
「大丈夫…エリオ達の所にはティアナとスバル、それにリインが応援に行っているわ。」

なのは
「え、そうなの？」

フェイト
「それに、犯人は罠にかかった…」

なのは
「え、罠？それってどういう…」

フェイト
「はやて、犯人がそっちに行ったわ。お願いッ！」

はやて
『了解やッ！任せときぃ～ッ！』

なのは
「嘘、はやてちゃんまで居るのッ！！？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

はやて
「さあ、久しぶりの広域魔法や気ぃ引き締めるでッ！シャーリー標準補正、頼んだでッ！」

シャーリー
『はいッ！了解しましたッ！』

はやて
「遠き地にて闇に沈め……詠唱完了ッ！発動まで、あと5秒ッ！4、3、2……」

シャーリー
『効果範囲内には目標の犯人以外は誰もいません。オールグリーンッ！部隊長ッ！行けますッ！』

はやて
「おっしゃーッ！行くでぇぇッ！ディアボリックエミッション…ッ！」

はやてが魔法を発動すると黒い魔力球が周囲の廃屋を飲み込み巨大化しながらアスカに迫った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ルシファー
『マスター、大規模な魔力反応を捉えました。』

アスカ
「チ、もう見えてんよッ！とうとう六課のお嬢ちゃん達もなり振り構わなくなって来たってか…面白れぇぇッ！」

アスカはスラスター全開で急制動をかける。

アスカ
「グウゥゥゥ…ッ！」

アスカは急制動をかけた影響で自身の体に通常の何十倍のＧ（重力加速度）が掛かる。

アスカ
「ヒャハハハッ！シャラくせぇぇッ！こんな物…次はこっちの番だぜぇぇッ！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

はやて
「え、マジかッ！？避けられたッ！？何ちゅう機動性やッ！」

シャーリー
『八神部隊長、目標がこちらに向かって高速で接近中です！接敵まであと１１０秒ッ！』

はやて
「く、仕方ない…対空迎撃戦やッ！時間がない…標準補正と演算処理の補助を引き続き頼むでッ！」

シャーリー
『は、はいッ！』

はやて
「来よ、白銀の風…天より注ぐ矢羽ねとなれッ！フレス…ベルグ…ッ！」

再びはやてが遠距離広域魔法を発動する。白い極光が数発アスカに向けて発射された。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ルシファー
『マスター、来ました…第2波です。』
アスカ
「証拠にもなく…ルシファー避けられるよなッ？」
ルシファー
『もちろんです…こんなの朝飯前ですよ。』
アスカはまたもや彼女の攻撃を回避してみせた。
アスカ
「ククク…今度はこっちの番だ…ルシファー、あれいけるよな？」
ルシファー
『ええ、可能ですがまだ試験中なので稼働時間が約2分弱と限られます…よろしいですか？』
アスカ
「ああ…問題ない…始めろッ！」
ルシファー
『了解しました…では、トランザムシステム…起動します…』
システムの起動と同時にアスカの機体（アーマージャケット）が赤く発行し飛行速度が跳ね

上がるように加速した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

シャーリー
『部隊長ッ！目標が加速しましたッ！早い…さっきの速度の3倍ですッ！』

はやて
「もう、見えとる…このまま奴の迎撃を継続するでッ！フレスベルグッ！」

次々と発射されるはやての攻撃を驚異的な機動力で回避する。

はやて
「く、当たらへん…」

アスカ
「ヒャハハハ…このまま…お嬢ちゃんの体に風穴を開けてやんよぉぉッ！」

ルシファー
『機首のビームランスを展開します。』

アスカは機首の先端部に高出力のビームランスを展開しはやての体を目掛けて突貫する。

はやて
「や、殺られる…ッ！」

はやてに攻撃が当たる瞬間、アスカと彼女の間に砲撃魔法が入った。

アスカ
「な、何ぃ？？ッ！」

アスカはいきなりの砲撃に驚き緊急回避をするが肩の主翼付きの万能シールドを持って逝かれた。

アスカ
「い、今の攻撃は…アイツかぁぁッ！」

アスカは変型するとツインライフルを構え砲撃のあった方角に撃ち込む。

フェイト
「大丈夫、はやて…？」

はやて
「ええ、何とか…」

なのは
「これまでよッ！諦めなさいッ！」

ルシファー
『マスター、トランザムの終了時間です…』

ルシファーの言う通りにアスカの機体は元の黒い色に戻る。

ルシファー
『粒子再チャージの為に動力を切り替えます。』

はやて
「さあ、観念しぃッ！」

アスカ
「誰がするかよ…ルシファー撤退するぞッ！時間稼ぎにニードルマインを使えッ！」

ルシファー
『了解…対人兵器を使用します…』

フェイト
「な、何ですって…」

はやて
「対人兵器って…」

なのは
「二人とも私の後ろへ…早く…」

アスカの腰から球状の物が射出された。なのはは慌てプロテクションを張る。

次の瞬間、数m辺りまで打ち上げられたニードルマインは炸裂し、無数の針を雨のように降らせた。

なのは
「クゥゥ…ッ！」

アスカ

「今回はこれぐらいにしといてやるッ！だがな、次はこうはいかねぇぞッ！その時まで首を洗って待ってろよッ！」

アスカは捨て台詞を吐いて撤退していった。

はやて
「はぁ…また、逃げられてしもうたかぁ…」

フェイト
「仕方ないよ…でも、あんな物を使ってくるとは」

なのは
「それにエリオ達が…」

はやて
「そうやった。リイン、そっちは無事か？」

リイン
『……あ、はやてちゃん♪こっちは大丈夫ですよぅ♪女の子とレリックは無事に保護しましたぁ♪』

はやて
「そうか～ご苦労やったな～」

なのは
「みんなもご苦労様。」

フェイト
「さあ、みんな六課に戻りましょう。」

フォワード、リイン
『『了解ッ！（ですぅ）』』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

アスカ
「チ、今回も派手にやられたぜ…」

ルシファー
『ええ…久しぶりにトランザムを使って私も疲れました…』

アスカ
「それにしても…アイツらは例のガキは捕まえられたのか？」

ルシファー
『さあ…私はちょっと分かりません…』

アスカ
「そうか…まあ、どちらにせよこれだけ時間稼ぎはしてやったんだ…これで失敗しましたじゃお仕置き決定だな。」

ルシファー
『確かにそうでなければ割合が合いませんからね…』

次回に続く。

トランザム発動（後書き）

トランザムが初登場しました。次回はナンバーズとの絡みを書いていこうと思います。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

戦闘機人（ナンバーズ）（前書き）

今回はナンバーズとの絡みです。お楽しみ下さい。

アスカ
「ウェンディ、どこを見ているッ！そんな動きじゃすぐに殺られっちまうぞッ！」

ウェンディ
「く…いちいち、うるさいおっさんッス…」

アスカ
「ディエチ、貴様はそんなデカブツでどうやって戦うんだッ！懐に入られたら一瞬でお陀仏だぞッ！」

ディエチ
「…デカブツ……」

アスカ
「チンクは動きは良いがリーチ短いのが問題だな…ま、何とかなるか…」

チンク
「チ、人が気にしている事を…」

アスカ
「トーレ、お前はコイツ等の中じゃ一番筋が良いな…面白い…」

トーレ
「何だ？褒めてくれるのか？珍しいな…」

アスカは只今、戦闘機人達（ナンバーズ）の模擬戦の監督をしている。

こうなった理由を簡単に説明すると先日の作戦に失敗したからである。その責任とスカリエッティによって頭に埋め込まれた例のお仕置き装置で脅されアスカは嫌々ながらこの仕事を受けおっていた。

アスカ
「ノーヴェ、お前は動きが単調なんだよッ！そんなんで管理局のお嬢ちゃん達を倒せるとでも思っているのかぁ？この馬鹿がッ！」

ノーヴェ
「な、何だとッ！聞いとけばさっきから馬鹿だのアホだのいちゃもん着けやがってッ！」

アスカ
「何だ？この俺に文句があるのかぁ？」

ノーヴェ
「ああッ！大ありだッ！おっさんッ！」

アスカ
「はぁ…やれやれ…お前は目上の人に対する敬いとかは無いのか？」

ノーヴェ
「だ、誰がお前なんかにッ！」

チンク
「おい、ノーヴェ…その辺で止めたらどうだ？」

ウェンディ

「そうッス。また、ノーヴェの悪いクセが出てるッスよ。」

ノーヴェ
「う、うるさいッ！」

ウェンディとチンクは怒っているノーヴェを宥めるが一向に彼女は引き下がろうとしなかった。

ノーヴェ
「こうなったら、おっさんッ！私と戦えッ！」

とうとうノーヴェはアスカに模擬戦を申し込む。

アスカ
「何だ？お嬢ちゃん…それは俺に対してケンカを売っているのか？」

ノーヴェ
「当たり前だぁッ！」

アスカ
「良いだろ…相手してやんよ…お嬢ちゃんのそのでかい口を叩き直してやるぜ…覚悟しろよ…」

ノーヴェ
「面白いッ！やれるもんならやってみろッ！」

アスカ
「後悔するなよ…ルシファー、行くぞ…」

ルシファー

「了解しました、マスター…ユニゾン、イン…」

ルシファーはアスカと融合しＭＳの姿になる。その姿を見たナンバーズは一瞬、恐怖を覚える。

アスカ
「おい、チンク…勝負の合図を頼むぞ…」

チンク
「あ、ああ…分かった」

アスカはチンクに一枚のコインを投げ渡す。

ノーヴェ
「おいッ！おっさんッ！まだ、ルールを言ってねえぞッ！」

アスカ
「ルール？けっ…そんな物なんてねぇよ…今からやるのはお互いの命をかけた殺し合いだ…」

ノーヴェ
「な、何だとッ！！？」

アスカ
「さあ、チンク…さっさとやれ…」

チンク
「あ、ああ…じゃあ、いくぞ…」

ノーヴェは拳を構え戦闘態勢に入る。反対にアスカは構え取るで無

く只単に突っ立ているだけだった。

そして、チンクが指でコインを弾く。空中に舞い上がったコインはやがて重力に引かれ床に落ち乾いた金属音が室内に響いた。

ノーヴェ
「どりゃあああぁぁッ！」

ノーヴェはアスカを一撃で仕止めるべく猛スピードで突進する。

しかし、アスカはそれをスルリとかわすとノーヴェを羽交い締めにして一瞬で床に組み伏せた。

ノーヴェ
「うぐッ！は、離しやがれ…ッ！」

アスカ
「ククク…馬鹿か？お前は…」

ノーヴェ
「な、何だとッ！！？」

アスカ
「分からねぇのか？離せと言って素直に聞く敵がどこに居る…さあて、ここからは楽しいお仕置きの時間だ。」

アスカは肩のシールドから巨大な蟹挟み…ＧＮアトミックブレードを展開しノーヴェの首を挟み上げた。

ノーヴェ

「うがぁぁ……」

GN粒子で振動する刃が少しずつ彼女のか細い首に食い込んでいく。

その光景を目の当たりにした他のナンバーズは絶句してしまう。

アスカ

「へへへ…このまま首をチョン切ってやんよ…まあ、安心しな…お前が居なくてもこれからの作戦は完璧に遂行してやるから…」

ノーヴェ

「な、何…そんな好き勝手は……う、うぐぅぅ…」

アスカ

「誰が勝手に話して良いと言ったんだ?ええッ?」

ノーヴェ

「う、うわぁぁ…ッ!」

さらにノーヴェの首に鋭利な刃がギリギリと音を立てて食い込む。

彼女の傷口からは次第に出血が多くなっていた。

トーレ

「もう、その辺で勘弁してやってくれッ!」

チンク

「姉からも頼むッ!これ以上は見てられないッ!」

アスカ

「……なぁ、お嬢ちゃん…お痛をした時は何て言うか分かってい

るよな？」

ノーヴェ
「……なさい…」

アスカ
「ああッ？聞こえねぇなッ？」

ノーヴェ
「ご、ごめんなさいッ！もう、こんな事はしないから許して下さいッ！」

ノーヴェは自分のプライドを捨ててアスカに泣きながら命乞いをした。

アスカ
「良いだろ…今回は許してやる…良かったな…お嬢ちゃん…良い姉妹が居てくれて…」

ノーヴェ
「……ゴホッ！ゴホッ！……」

アスカから解放されたノーヴェは膝と手を着き俯きながら只、苦しそうに咳をするだけだった。

アスカ
「今日はこれでお仕舞いだ…あとはテメぇ等で好きにしな…」

そう一言いうとアスカは自分の部屋に戻っていった。この一件以来、ナンバーズ達はアスカに反抗する事は一切なかった。

次回に続く。

戦闘機人（ナンバーズ）（後書き）

いかがだったでしょうか？次回からこの物語も後半戦へ突入です。

この物語のラストは『なのはエンド』、『フェイトエンド』に別れます。

そこで読者の皆さんの投票によって決めさせて貰いたいと思います。

良ければご意見、ご感想を同記の上で投票に参加して頂いたら幸いです。

挑発、闇の胎動（前書き）

お待たせしました。今回はアスカが挑発の意味を込めて機動六課へやって来ます。

挑発、闇の胎動

アスカは現在、自分の車に乗ってミッドチルダのとある場所に向かっていた。

アスカ
「なあ…ルシファー、楽しみだなぁ？」

ルシファー
「そうですね。機動六課…彼女たちの顔がどうなるか…」

そうである。アスカ達が目指している場所は機動六課であった。アスカはスカリエッティと作戦を練りそれに準じ行動していた。

そして、二人は六課の隊舎に到着する。玄関では部隊長の八神はやてとリインが待っていた。

アスカ
「やあ、久しぶりですな…八神さん、それに…」

リイン
「リインですぅ♪」

アスカ
「ああ、そうでしたな…いやはや…申し訳ない…」

はやて
「では、みんなが待っているんで早速、案内しますわぁ。」

アスカ
「よろしく…」

アスカははやてに案内され彼女の部隊長室に向かった。途中に見知った顔の少女を見かける。

アスカ
（アイツはあの時のガキ…）

そう先日、下水道で拐い損ねた少女『ヴィヴィオ』であった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

はやて
「ここです。どうぞ…」

アスカ
「ああ…失礼するよ…」

アスカは部屋に入る。そこで待っていたのはなのはにフェイト、フォワード陣、そしてヴィータがいた。

なのは
「はじめまして、高町なのは一等空尉です。」

アスカ
「私はスメラギ・アスカです。それに貴女は管理局のエースなんでしょう？噂はかねがね聞いてますよ…」

なのは
「あ、いえ…そんな大したことないですよ…／／／／」

フェイト
「あ、私は……」

アスカ
「ああ、知ってますよ…フェイト・テスタロッサ・ハラオウン…時空管理局の執務官で機動六課、ライトニング分隊の隊長…」

フェイト
「え、ええ…まあ…／／／／」

アスカ
「そして、お前は『プロジェクトF．A．T．E』のお人形（クローン）なんでしょう？」

フェイト
「……ッ！？どうして、それを…ッ！」

アスカ
「調べたよ。確か…そこの赤毛のガキもアンタと同じなんだろう？」

アスカは只ならぬ悪意を込めてフォワードの一員であるエリオを睨む。

はやて
「アスカさん…アンタはいったい…」

アスカ

「ククク…お前たちは初対面だと思っているが実際にはもう出会っているんだぜ？」

なのは
「え、どういう事ッ？意味が分からないッ！」

アスカ
「やれやれ…お前たちは全くもって馬鹿だな…まだ分からないのか？」

フェイト
「まさか…アナタは…」

アスカ
「ようやく、お分かりか？そうだ…俺が魔導師狩りだよ…」

アスカは歪んだ笑みを見せながら自分の正体を明かした。

スバル
「お前えぇぇッ！」

スバルは姉を傷つけ、そして拐った犯人がアスカだと知り我を忘れ掴み掛かろうとした。

アスカ
「ああ…うるせぇお嬢ちゃんだなぁッ！」

一発の銃声が木霊したと同時にスバルは肩を撃たれ衝撃でその場に倒れてしまった。

スバル
「あぐ…ッ！」

ティアナ
「スバルぅぅッ！」

なのは
「スバルッ！大丈夫ッ？」

アスカ
「青髪の嬢ちゃん、そんなにカッカするなよ…もっとクールに行こうぜ？」

はやて
「け、拳銃ッ！！！？アスカさんッ！アンタはいったい何をやっとるんやぁッ！…あうッ！」

はやては立ち上がり激しい見幕で詰め寄るがスバル同様にアスカに銃で撃たれしまった。

フェイト
「はやて…ッ！」

リイン
「はやてちゃんッ！！？」

ヴィータ
「テメえぇぇッ！」

アスカ

「うるせぇなぁッ！今言ったろ？もっとクールに行こうぜってなぁッ？」

はやて
「ううう……」

なのは
「アナタの目的はいったいなんなのッ！」

なのははレイジングハートをアスカに向ける。

アスカ
「おお…怖いねぇ…」

しかし、アスカははぐらかすばかりで全く答えようとはしなかった。

なのは
「早く、答えなさいッ！」

アスカ
「分かったよ…今回は只の挨拶だよ…今度のパーティーへの招待も兼ねてな…ッ！」

はやて
「パ、パーティーやて？…ふざけるのも大概に…ッ！ゴホッ！ゴホッ！…」

ヴィータ
「はやて、しゃべるなッ！このままだと…」

リイン
「そ、そうですよ…」

はやて
「二人とも…うちは大丈夫やから…」

アスカ
「さてと…俺はこの辺で帰らせて貰おうか…」

フェイト
「何を馬鹿なことをッ！逃がすわけないじゃないッ！」

フェイトもなのは同様にバルディッシュをアスカに向ける。

アスカ
「ククク…ッ！」

フェイト
「何がおかしいのッ！」

その時だった。オレンジ色を基調とした極彩色の光が部隊長室の一部を抉り取った。

「「「きゃあぁぁぁあッ！」」」

なのは
「み、みんな…大丈夫？…スバル…は？」

ティアナ
「こっちはだ、大丈夫です…」

フェイト
「キャロとエリオは？」

エリオ
「僕たちも何とか…」

はやて
「こ、これは……」

アスカ
「ヒャハハハ！お嬢ちゃん達へ俺からのちょっとした贈り物（プレゼント）だ。気に入ってくれたかな？」

フェイト
「奴は…魔導師狩りはどこに居るのッ！」

彼女が周りを見るとすでにアスカはルシファーと融合してＭＳ形態になり破壊された場所から隊舎の外へ出ていた。

アスカ
「じゃあなッ！お嬢ちゃん達ッ！今度の殺し合い（パーティー）、楽しみにしてるぜッ！」

アスカは変形するとあっという間に空の彼方へ飛び去っていった。

次回に続く。

挑発、闇の胎動（後書き）

次回からアスカ＆ナンバーズｖｓ機動六課の総力戦になっていきます。お楽しみにッ！

ご意見、ご感想などお待ちしております。

強襲、機動六課…（前書き）

お待たせしました。どうぞお楽しみになってください。

強襲、機動六課…

アスカは只今、ナンバーズ８人と共にミッドチルダ中心街に向かっている。

また、彼らとは別にガジェットと量産型のＭＳの混成部隊が地上と空から進軍していた。

ナンバーズ８人中５人はアスカと同じロボットの姿になっていた。これもスカリエッティが以前にルシファーから吸い出したデータを元に長女のウーノ共に作った代物だった。

トーレ、ノーヴェに与えられたのは接近格闘戦に特化したＭＳ『ガラッゾ』。トーレは薄紫に黒い縁取りでノーヴェは薄紫に赤い縁取りをしていた。

ウェンディとディエチに与えられたのは砲狙撃戦に特化したＭＳ『ガデッサ』。ウェンディは白に薄紅色の縁取りでディエチは白に薄緑の縁取りをしていた。

チンクに与えられたのはファングを使用した中距離からの格闘戦を意識したＭＳ『ガデッス』。カラーリングは薄緑に水色の縁取りをしている。

そして、最後にこの襲撃チームの参謀役であるクアットロに与えられたのは１０ｍ近い大型のＭＡ『レグナント』。

以前に登場した『エンプラス』の戦闘データから作り出した発展機である。特殊機構としてクアットロと合体融合する事でＭＳ形態に

なることが可能である。

現在、彼女は妹のセイン共にレグナントの上に乗っていた。

クアットロ
「はぁ～い。皆さぁ～ん。もうすぐ、作戦領域に入りますよぉ～♪」

トーレ
「作戦はさっき言った通りだ…聞こえているか？アスカッ！」

アスカ
「ああッ！聞こえてんよッ！いちいち喚くな…どうせ俺の役目は例のアレの為の陽動…せいぜい目立つように大暴れしてやる…」

クアットロ
「分かっていればそれで良いんですぅ♪さあ、いよいよ作戦開始ですよ♪セインちゃんは手筈通りにお願いしまぁ～す♪」

セイン
「りょ～か～い♪」

セインはレグナントから飛び降りるとどこかへ消えていった。

トーレ
「ディエチ…機動六課の奴らに盛大なプレゼントをくれてやれ…」

ディエチ
「了解…ＧＮメガランチャー粒子充填率９７％…行ける…」

クアットロ

「発射ぁ～ッ♪」

次の瞬間、クアットロの合図ともに圧縮された膨大なＧＮ粒子がガデッサの砲塔から解放された。

解放されたＧＮ粒子はオレンジ色の光の奔流となって機動六課の隊舎へ向かっていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

時間は今から少しさかのぼりここは機動六課内の病室…そこからはミッドチルダの綺麗な海が一望できる。

スバル
「ギン姉、具合はどお？」

ギンガ
「私は、だいぶん楽になったわ…スバルや六課の人達のおかげよ…」

スバル
「ううん…ギン姉はここまで傷ついたのに私は何も出来なかった…」

ギンガ
「気にしないで良いのよ…スバル…」

ヴィータ
「そうだぜ…ギンガの言う通りお前は何も悪くない。むしろ、何も出来ないのはアタシの方だ…」

スバル

「ヴィータ副隊長…」

ヴィータ
「シグナムも早く目を覚ましてはやて安心させてやれ…アタシは悲しむはやてを見るのはもう、堪えられない…」

ヴィータがシグナムの頭を優しく撫でながらポツリと呟いたその時だった。轟音ともに六課全体が激しく揺れた。

同時にアラートが隊舎中にけたたましく鳴り響き、ティアナが血相を変えてスバルの所にやって来た。

ティアナ
「ス、スバル急いでッ！」

ヴィータ
「ティアナ、何があったんだッ？それに今の揺れは…」

ティアナ
「ヴィータ副隊長、ここに居らしたんですね…て、敵襲ですッ！例の魔導師狩りが六課に攻撃を…」

ヴィータ
「な、何だってッ！！？それで被害の規模はッ！」

ティアナ
「ヘリポートのヘリを1機…それにヘリの整備をしていたヴァイス曹長ら3名が攻撃に巻き込まれて意識不明です…ッ！」

ヴィータ

「そ、そんな……」

ティアナ
「直ちに六課の武装隊員は襲撃犯の迎撃と確保に出撃するとの事ですッ！」

ヴィータ
「分かったッ！シグナムとギンガはアタシに任せておけッ！アタシにはこれくらいの事しかできない…」

ティアナ
「了解しましたッ！では、お願いしますッ！スバル、行くわよッ！」

スバル
「う、うんッ！じゃあ、ギン姉…いってきます。」

ギンガ
「気をつけてね…私はこの有り様で協力できないけど…」

スバル
「ううん…気にしないで、ギン姉…」

ティアナ
「スバルッ！早くッ！」

スバル
「あ、うんッ！」

2人は病室から飛び出すとブリーフィングルームに急いだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ティアナ
「すみませんッ！遅れましたッ！」

はやて
「2人とも遅いでッ！何をしとったッ！」

スバル
「すみませんッ！」

はやて
「全員、集まったな…じゃあ、時間が無いから手短に状況説明をするでッ！」

フォワード
「「「はいッ！」」」

はやて
「現在、スメラギ・アスカを中心とする襲撃部隊がミッドチルダ中心街で派手に暴れとる…」

ディスプレイに映し出された光景にその場に居た全員が言葉を失った。

なのは
「ひ、酷い…」

フェイト
「こんな事って…」

はやて
「良いか？これ以上被害を拡げるわけにはいかん…そこでなのはちゃんとフェイトちゃんは本命の逮捕に尽力してくれッ！」

なのは、フェイト
「「了解ッ！」」

はやて
「フォワードは地上で他の武装隊員と共にガジェットの掃討を頼むでッ！」

フォワード
「「了解しましたッ！」」

はやて
「なお、今回は奴とは別に新型を6機ほど確認しているらしい…十分に気ぃ付けてやッ！」

「「「はいッ！」」」

はやて
「では総員、出撃やッ！」

なのはを初め、みんなはバリアジャケットに身を包むとそれぞれの現場に向かって急いだ。

次回に続く。

強襲、機動六課…（後書き）

次回は機動六課とアスカ＆ナンバーズの総力戦です。お楽しみにッ！

ご意見、ご感想をお待ちしております。

血に染まる大地（前書き）

大変お待たせしました。今回は時空管理局とアスカの一味との総力戦です。お楽しみにッ！

血に染まる大地

ミッドチルダ中心街…只今、時空管理局、地上本部の十数人の武装隊員がアスカの迎撃を試みていた。

武装隊員（男１）
「撃て、撃て、撃てぇッ！怯むなッ！コイツを落とせば、勲章ものだぞッ！」

武装隊員（男２）
「全くだ…お前も落ち着いていけよ？」

武装隊員（女）
「りょ、了解ッ！」

色とりどりの魔力弾が地上からアスカに向けて放たれる。

アスカ
「甘い、甘いぜぇぇッ！こんなスローな攻撃を俺に当てようって言うのか？」

アスカは驚異的な機動力で嵐のような弾幕を掻い潜り一人の女性隊員に狙いを定めると猛禽類の鉤爪に似たクローで掴みそのまま天高く連れ去って行く。

武装隊員（女）
「きゃあぁぁッ！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一方、なのはとフェイトは現場に向かって高速で飛行していた。

なのは
「フェイトちゃん、もうすぐ現場に着くよ。」

フェイト
「うん…今日こそシグナム達の仇を取る…」

ようやく、二人は遠目にアスカを確認できる位置までやって来た。

なのは
「ねぇ、フェイトちゃん?アイツ、また姿が変わっているよね?」

フェイト
「そうみたい…なんだか巨大な鳥のようだね…」

なのは
「あれ?フェイトちゃん…アイツの爪に掴まれているのって人じゃない?」

その時だった。アスカは掴んでいた女性隊員を空中に放り投げた。
女性隊員は重力に引かれ地面に向かって落下する。

アスカはそれを追って猛スピードで降下した。翼には赤黒いビームブレードが展開してある。

フェイト
「奴め…いったい何を…」

そして、アスカは女性隊員の体を胴体から真っ二つに切り裂いた。

なのは
「……ッ！！！！」

衝撃的な光景になのはは思わず目を反らした。

一方、アスカは残った地上の隊員を殺すべくＭＳに変形し一斉にファングを放った。

武装隊員（男１）
「うわあぁぁあああッ！」

武装隊員（男２）
「た、隊長ぉぉぉぉッ！」

首を跳ね、腕に足を切り落とし、次々とファングの餌食になっていく隊員たち…それはまさに非情の何事でもなかった。

フェイト
「ひ、酷い…こんな事って……」

なのは
「もう…これ以上、人を傷つける事は許さない…行くよ！フェイトちゃん！」

フェイト
「う、うんッ！」

二人は手に持っているデバイスを強く握りしめるとアスカに向かっ

ていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ルシファー

『マスター、新手です。この魔力量…ふ、例の彼女たちですよ…』

アスカ

「そうか…ようやく、お出ましかぁぁッ！」

アスカは素早くビームソードを抜くと金色の魔力刃を受け止めた。

フェイト

「スメラギ・アスカ！今日こそ貴方を逮捕しますッ！覚悟ッ！」

アスカ

「ふん、何を嘗めた事をッ！馬鹿にするなぁッ！」

二人はお互いに得物を弾くと間合いを取ったと同時にピンク色の魔力光がアスカを襲う。

アスカ

「おっと…危ねぇじゃねえか…白い悪魔のお嬢ちゃんよぉッ！」

アスカは砲撃のあった方へライフルの銃口を向けるとビームを数発放った。

なのは

「くッ！プロテクション…ッ！」

なのはは防御魔法と必要最低限の動きだけでアスカの攻撃を回避する。

なのは
「大丈夫？フェイトちゃん…？」

フェイト
「うん…私は何ともないから…」

なのは
「そう、良かった…それはそうと貴方はまた証拠にもなく人を傷付けて…何とも思わないの？」

アスカ
「別に何とも思わねぇよッ！それになぁ…そんな事をいちいち気にしていたら俺の商売騰がったりなんだよぉぉぉッ！」

アスカはビームソードでなのはに斬りかかった。

なのは
「貴方って人は…ッ！」

なのははレイジングハートでアスカの攻撃を受け止める。お互いの得物からは激しい火花が迸る。

フェイト
「ふざけるのも大概にしなさいッ！」

フェイトはアスカがなのはに掛かっている隙をついてバルディッシュで斬りかかった。

アスカ
「ふざけてなんかいなさッ！行けよ、ファングウゥゥッ！」

アスカはフェイトのバルディッシュをつま先のビームサーベルで受け止めると同時に二人に対してファングを放った。

なのは
「きゃあああぁぁッ！」

フェイト
「あぁぁぁ…ッ！」

アスカ
「これで、テメぇらもお陀仏…ッ！」

アスカは両手持ちのツインライフルを右肩のシールドに連結させると大出力のビームを放った。

フェイト
「く、こんな所でやられる訳にはいかないッ！はあぁぁ…ッ！」

なのは
「ディバイィィン…バスタァァ？ッ！」

アスカ
「そうだ…その粋だッ！さあ、戦えッ！俺を越えてみろぉぉぉッ！」

三人はそれぞれの色の軌跡を描き、死力を尽くしてぶつかり合う。

その時だった。なのはとフェイトの元に六課の隊舎で陣頭指揮を取っていたはやてから通信が入る。

はやて
『なのはちゃん、フェイトちゃん！大変やッ！』

なのは
「あ、はやてちゃん！どうしたの？」

アスカ
「馬鹿が何をよそ見していやがるッ！」

通信に気を取られ一瞬、動きを止めたなのはに向けてアスカは再び大出力のビームを撃った。

なのは
「し、しまった…ッ！」

フェイト
「な、なのは？ッ！」

フェイトは迫る赤黒いビームとなのはの間に割って入り防御魔法を張る。

フェイト
「ぐぅぅ…ッ！」

なのは
「フェイトちゃ？ん！」

フェイトはアスカのビームを何とか防いだ。

なのは
「フェイトちゃん、大丈夫？」

フェイト
「ハァハァ…う、うん…何とか…それよりもはやて…何かあったの？」

はやて
『あ、ああ…新型の相手をしているフォワードのみんながかなり苦戦してるようで援護に回ってほしんやけど…頼めるか？』

フェイト
「分かった…なのは、ここは私に任せて貴女はフォワードの援護に行って…」

なのは
「フェイトちゃん！いったい何を勝手な事を言っているの？そんなのダメだよッ！」

フェイト
「私の事は気にしないで…早くしないとフォワードが危ない…だから…ッ！」

なのは
「だけど…ッ！」

フェイト
「なのはッ！…お願い…私を信じて……ッ！」

なのは
「……分かった…でも、約束して必ず無事で帰って来るって……」

フェイト
「うん。約束する。」

フェイトはなのはを安心させるために優しく微笑んでみせた。

それを見たなのははこの場を彼女に任せてフォワードたちが戦っている場所に急いだ。

アスカ
「…何だぁ？白いお嬢ちゃんはどっかに行っちまうのかぁ？釣れねぇなぁ…」

フェイト
「ここからは私一人で十分…はやて、限定解除をお願い……」

はやて
『分かった…限定解除を容認ッ！フェイトちゃん、くれぐれも無理をせんようぅに気ぃ付けてな…』

フェイト
「うん…ありがとう…じゃあ、通信を切るね…」

アスカ
「おい…いい加減、話しは終わったか？早く再開しようぜ…楽しい殺し合いをなぁぁッ！行けよ、ファングウゥゥッ！」

アスカはフェイトに向けて5機のファングを差し向ける。

フェイト
「もう、これ以上、貴方の好き勝手にさせない…」

その時だった。アスカの目の前にいたフェイトが消え、同時に差し向けた全てのファングが爆発した。

アスカ
「な、何だとッ!!?」

ルシファー
『マスターッ!右です……ッ!』

アスカ
「ク、クソ…ッ!」

アスカは咄嗟に右肩のシールドで受け止めようとするがフェイトのスピードに着いていけずにシールドを切り裂かれてしまう。

アスカ
「チ、調子に乗るなよ…女ぁぁッ!」

アスカはビームライフルをフェイトに向けて撃とうとする。

しかし、次の瞬間にはアスカの背後に回り込み、強烈な蹴りを打ち込んだ。

アスカ
「うぐッ!は、速い…」

フェイト
「まだまだ、これからだよ…ッ！」

フェイトは正しく目にも止まらぬ速さでアスカに至る所からから次々と斬りかかる。

そして、アスカはフェイトに為されるがままに攻撃を受けいた。

アスカ
「ハァハァ……ん、何だ？体が動か…ん…ッ！」

アスカは知らないうちに両手、両足をフェイトのバインド魔法で縛らて身動きが取れないでいた。

フェイト
「これで止め…トライデント…スマッシャーッ！」

そして、金色に輝く三本の光の槍が轟音と共にアスカに猛烈な勢いで迫る。

アスカ
「こ、このままじゃ、やられる……わけが無いんだなこれがぁッ！トランザム…ッ！」

アスカの機体がいきなり深紅の粒子で包まれ圧倒的なパワーで掛けられていたバインドを引き千切るとフェイトの渾身の一撃を難なく回避した。

フェイト

「き、消え…いったいどこ……」

バルディッシュ
『マスターッ！後ろですッ！』

フェイト
「え……ッ！」

フェイトは咄嗟に後ろを振り向くが遅すぎた。

アスカはフェイトの首と肩を両手で押さえ込むように掴むとガンダムフェイスの一部が展開し彼の顔が露になる。

アスカ
「シャアァァァァッ！」

次の瞬間、アスカはフェイトの首筋に勢い良く食らいついた。

フェイト
「うぐッ！」

そして、猛獣のごとき勢いでフェイトの首筋の肉を食い千切った。

フェイト
「あぁぁッ！」

フェイトの首筋からおびただしい量の血液が次から次へと流れ出る。

アスカ
「クチャクチャ…ペッ…不味いな…やっぱり、お人形の血の味って

こんな物か…これじゃ、薬にも毒にもなんねぇぜ…」

アスカはフェイトの血の味を味わうと直ぐに吐き出した。

フェイト
「あ、貴方…いったい…何を…ゴホッ！」

フェイトは何とか出血を止めようと思い手で押さえるがなかなか止まらない。

フェイト
「ハァハァ…うッ！…」

アスカ
「おやおや？満身創痍ってところだな…お嬢ちゃん？だけどなぁ…これで終わりだと思ったら大間違いだ…やられた分は兆倍にして返す。覚悟しろ…」

アスカは自分の回りにファングを展開する。数は１０機…獲物であるフェイトに牙を向ける。

アスカ
「さぁ…行けよ、ファングウゥゥッ！」

フェイト
「く、来た…ッ！」

フェイトは襲いかかるファングを必死に回避しようとするが体が思うように着いて来ない。

アスカ
「先ずは、腕だッ！」

フェイト
「あぅ…ッ！」

アスカ
「次は、足ッ！」

フェイト
「うぐ…ッ！」

次々と白い牙がフェイトの体に突き刺さる。

そして、止めと言わんばかりに彼女の腹部に蹴りを入れた。

フェイト
「あぁ…ッ！」

フェイトは勢い良く地上に叩き付けられた。

アスカ
「おい…さっきまでの威勢はどうしたんだ？俺をやっつけるんじゃなかったのか？」

アスカは勝利を確信し、トランザムを強制的に解除するとフェイトの前にゆっくりと降りてきた。

フェイト
「うぅぅ……」

アスカ
「おやおや？もう、喋る気力も無いってか？さてと…遊びも飽きたし止めを刺してやろう…ククク…」

アスカは舌舐めずりをするとビームソードを腰から抜く。

アスカ
「じゃあなッ！お人形のお嬢ちゃんッ！逝っちまいなぁぁッ！」

アスカが高出力のソードをフェイトの首筋に振り落とそうとしたその時…

ルシファー
『マスター、こちらに高速で接近する魔力反応を確認しました。』

アスカ
「何……？」

アスカは魔力反応のあった方角を見る。そして、みるみるうちに彼の顔が青ざめる。

アスカ
「何で…お前が……」

ヴィータ
「先ずは、ブッ飛べぇぇぇッ！」

アスカ
「あが…ッ！」

アスカは急に現れたヴィータに反応できずにグラーフアイゼンの一撃をもろに受け数十ｍ吹き飛び近くのビルに勢い良く突っ込んだ。

ヴィータ

「ここからは、アタシが相手だッ！覚悟しろッ！」

次回に続く。

血に染まる大地（後書き）

いかがだったでしょうか？ご意見、ご感想などお待ちしております。

ぶつかり合うチカラ（前書き）

お待たせしました。どうぞお楽しみになって下さい！

ぶつかり合うチカラ

ここはミッドチルダの湾岸地区…機動六課の隊舎の目と鼻の先でフォワード達は戦闘機人（ナンバーズ）と交戦していた。

スバル
「はあぁぁッ！もう、これ以上お前たちの好きにはさせないッ！」

ノーヴェ
「ふん、そんな攻撃、アタシに当たるもんかッ！」

スバルのリボルバーナックルとノーヴェの駆るガラッゾの五指に展開したＧＮビームクローが激しくぶつかり合う。

ウェンディ
「ノーヴェ、援護するッスよ！ＧＮメガランチャー発射ぁッ！」

ぶつかり合う二人にむけてウェンディが大出力の砲撃を放った。

スバル
「ち……ッ！」

スバルはノーヴェと間合いを取ることでウェンディの攻撃を回避した。

ウェンディ
「く、ハズレたッス…」

ノーヴェ

「バカ野郎ッ！アタシまで巻き込むつもりかッ！」

ウェンディ
「テヘッ♪ドンマイッスよ、ノーヴェ♪」

ティアナ
「何をやっているの？スバルッ！前に出過ぎよッ！少し落ち着きなさいッ！」

スバル
「ご、ごめん…」

チンク
「ふん、貴様こそよそ見をしている場合か？行けッ！ファングッ！」

チンクは装備している7機のファングのうち3機をティアナに向けて発射する。

エリオ
「ティアナさんッ！危ないッ！一撃必中ッ！てりゃぁぁ…ッ！」

ティアナに襲いかかる3機のファングのうち2機を素早く撃墜する。

キャロ
「フリード！お願い！」

フリード
「クキュ～ッ！」

そして、キャロの使い竜である『フリードリヒ』は彼女の指示でブ

レス攻撃で残った1機を破壊した。

ティアナ
「エリオ、キャロ、ありがとう…」

キャロ
「い、いえ……」

チンク
「ほう…公務員ながら、なかなか良い動きだ…」

ティアナ
「当たり前よッ！これもエースオブエースによる地獄の訓練の賜物…」

スバル
「そうだよ…六課のフォワードは伊達じゃないッ！」

ノーヴェ
「面しれぇ…その余裕、このアタシが叩き潰してやるぜぇッ！」

ノーヴェは二人の言葉にかなり意気り立っている。

ウェンディ
「どうするんッスか？チンク姉…ああなったノーヴェはなかなか言うこと聞かないッスよ…？」

チンク
「……ハァ…仕方ない…ウェンディ、可能な限りノーヴェの援護をしてやってくれ…」

ウェンディ
「了解したッス！」

ノーヴェ
「さあ、少しでも長くアタシ達を楽しませてくれよぉッ！」

ティアナ
「来た…ッ！スバル、エリオ、キャロ…みんな、気を引き締めていくよッ！」

スバル
「うん…ッ！」

エリオ、キャロ
「「はいッ！」」

フリード
「クキュ～ッ！」

ティアナ
「クロスファイア…シュート！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

トーレ
「さすが、ドクターの恐れた要注意人物だ…なかなかやる…」

なのは
「当たり前よ…貴女たちに余計な時間を割いている隙は無いのッ！」

なのはは現在、別行動を取っていたトーレ、クアットロ、ディエチの三人と偶然出会い交戦していた。

トーレ
「ディエチ！そっちに行ったぞッ！」

ディエチ
「了解…目標を狙い撃つ…ＧＮメガランチャー、発射…ッ！」

次の瞬間、オレンジ色に輝く膨大な光の奔流がなのはに襲いかかる。

なのは
「くぅぅ…ッ！」

しかし、なのははエアブレーキを掛け同時に急旋回をする。

ディエチ
「チ、外した…」

クアットロ
「う～ん、惜しい♪もう少しで綺麗な風穴が拝めると思ったんだけどな♪」

トーレ
「何をしている、クアットロ！お前も戦えッ！」

クアットロ
「分かっていますよ。トーレ姉様♪さあ、レグナントちゃん行きますわよ♪」

そう言うと、今までレグナントの上に立って戦いを見物していたクアットロが吸い込まれるように機体の中に消えていった。

そして、彼女と融合したレグナントはＭＳ形態に変形した。

なのは
「な、何なの…お、大き過ぎるよ…」

なのははは変形したレグナントの禍々しい姿に思わず恐怖する。

クアットロ
「どう?驚いたかしら?うふふ♪今からたっぷりとなぶり殺してあ・げ・る♪」

レグナントと融合したクアットロはなのはに向けてＧＮキャノンを放つ。

なのは
「そんな物には、当たらないよ…ッ！」

なのははクアットロの攻撃を難なく回避する。

クアットロ
「うふ♪それはどうかしらね～?」

しかし、クアットロはそんな彼女を見ながら不敵に笑う。

次の瞬間、なのはが避けたはずのＧＮキャノンが直角に曲がり再び彼女に襲いかかる。

なのは
「え?ビームが曲がったッ!!?きゃあぁぁぁッ!」
なのははあわてて自分を包み込むように防御魔法を展開し、何とかこの窮地を乗りきった。
なのは
「何て威力なの…かすっただけでシールドを書き消してしまうなんて」
トーレ
「良いのか?お前の相手はソイツだけじゃないぞッ!はあぁぁぁッ!」
トーレは五指のGNビームクローを一つに纏め一本の剣のようにすると自慢のスピードで一気になのはとの間合いを詰める。
なのは
「く、早い…プロテクションッ!」
なのはは咄嗟にプロテクションを展開し防御に成功する。
トーレ
「うおおぉぉッ!」
なのはにプロテクションにトーレの刃が徐々に食い込んでいく。
なのは
「こ、このままじゃ…バースト…ッ!」

トーレ
「うわぁぁッ！」

なのはの合図でプロテクションが爆発する。

トーレは爆発に巻き込まれそのダメージから右手のビームクロー発信器が作動不能になってしまう。

トーレ
「く、ディエチ！援護しろッ！」

ディエチ
「了解…連射モードで対応する…ＧＮメガランチャー、発射…」

トーレの指示通りすかさずディエチがなのはに向けて攻撃する。

なのは
「そんな攻撃、私には当たらないッ！次はこっちの番…アクセルシューター」

レイジングハート
『アクセルシューター…』

なのは
「シュート…ッ！」

なのはの回りにピンク色の魔力弾が展開されトーレ達に向けて放たれた。

ディエチ
「しつこい…」

トーレ
「全くだ…良い誘導性を持っているな…」

トーレとディエチはＧＮバルカンや機動力を生かし向かってくる魔力弾を次々と避けていく。

クアットロ
「う?、ちょこまかと鬱陶しですわねぇッ!行きなさい、ファング♪」

そして、クアットロはＧＮフィールドや１０機のファングを利用してなのはの攻撃に対処していた。

なのは
「やっぱり、アイツの仲間ね一筋縄ではいかないか…」

クアットロ
「じゃあ、どうします?諦めて私たちに大人しくブチ殺されます?」

なのは
「そんなの願い下げだよ…私は絶対に諦めない!みんなと約束したんだ、無事に帰るって…ッ!」

トーレ
「面白いッ!ならば貴様のその願い、ズタズタに引き裂いてやるッ!掛かって来いッ!」

なのは
「私は負けないッ！絶対にッ！はあああぁぁあッ！」

こうして、なのはとトーレ達の戦いは激しさを増していくのだった。

次回に続く。

ぶつかり合うチカラ（後書き）

ご意見、ご感想、アドバイスなどお待ちしております。

散る命、残る命…（前書き）

お待たせしました。お楽しみ下さい！

散る命、残る命…

ヴィータ
「こりゃ、酷でぇ…フェイト！大丈夫かッ！」

フェイト
「え、ええ…何とか…ゴホッ！ゴホッ！…」

ヴィータ
「良かった……」

フェイト
「ど、どうしてヴィータがこんな所にいる…の？確かアナタはもう魔法は使えないはず…そ、それにそのバリアジャケット…」

そうである、フェイトが指摘した通りヴィータのバリアジャケットはいつもの赤基調の物から白基調のジャケットになっていた。

これには、きちんとした理由があり、それは一時間ほど前に遡る。

ここは、機動六課の部隊長室…なのはを始めとした主力が出撃して数分後、ヴィータがはやての元へやって来た。

ヴィータ
「もう、みんな出撃ったのか？」

はやて
「ああ、たった今な…で、何か用か？」

ヴィータ
「うん…実は、はやてに頼みがあるんだが…」

はやて
「……何や？」

ヴィータ
「アタシに、リインを貸してくれッ！」

はやて
「え？どう言うことや？言っている意味が全く分からん。」

リイン
「そうですよ。いったい何をするんですか？」

ヴィータ
「アタシも、奴を…魔導師狩りを倒しに行くッ！」

はやて
「いったい何をッ！！？ダメや！絶対に許可は出せへんッ！」

ヴィータ
「お願いだ、頼むッ！」

はやて
「絶対にダメやッ！」

はやてはヴィータの出撃要請を頑な拒否する。

ヴィータ

「どうしてなんだッ！」

はやて
「そもそも、ヴィータは魔法が使えへんやろッ！」

ヴィータ
「それなら、打開策があるッ！」

はやて
「どう言うことやッ？」

リイン
「あ、そう言うことですね。それなら理論上、可能ですね。」

はやて
「リイン、勿体ぶらんで教えてくれッ！」

リイン
「はい、じゃあ、説明しますぅ～良いですか？今、ヴィータちゃんはリンカーコアが無いため魔法が使用できません。」

はやて
「そんなことは百も承知や…」

ヴィータ
「そこでだ、アタシとリインがユニゾンしてリインがアタシのリンカーコアの代わりになるんだ。」

はやて
「フム…まあ、確かに理論上は可能やけど、それじゃあ、ヴィータ

に供給される魔力は限られるやろ…」

リイン
「そこで、はやてちゃんの登場ですよ♪」

はやて
「……え？」

ヴィータ
「はやての持っている魔力をアタシに貸してくれッ！そうすれば以前のように魔法（チカラ）が使える…だからッ！」

はやて
「……分かった…だけど約束してくれ…くれぐれも無理をせんでな…」

ヴィータ
「ああ、約束する…じゃあ、行って来るッ！」

そう言うと、ヴィータとリインは部隊長室を出て行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

フェイト
「そう、そんな事が…」

ヴィータ
「ああ、だからお前は下がっていろ…」

フェイト

「ううん…私は、大丈夫…痛ッ！」

フェイトは無理をして立つがダメージが予想を超えており、もうフラフラの状態だった。

ヴィータ
「バカ言ってるんじゃねぇッ！お前のどこが大丈夫なんだよッ！それにな今のお前がいると全力が出せねぇ…」

フェイト
「だ、だけど…ッ！」

ヴィータ
「今のアタシにははやてとリインがついている…だから、信じろ…」

フェイト
「…わ、分かった…でも、気をつけてね…アイツ、得体の知れない能力（チカラ）を持っているから…」

そう言うとフェイトはフラフラとその場から撤退していった。

ヴィータ
「さあ、始めようぜ…今度こそ、テメぇをブッ潰してやる…ッ！」

ヴィータはアスカの吹っ飛んだ方へグラーフアイゼンを向ける。

アスカ
「ったく…参ったぜ…誤算だった…」

ルシファー

『全くです…まさか、あの娘が出てくるなんて…』

瓦礫の中からアスカがゆっくりと出てヴィータの所へ歩き出した。

アスカ
「おい、どうしてくれんだよ…ツインライフルが使い物にならなくなっちまった…」

ルシファー
『それだけではありませんよ…GNビームソードなど全武装の約1／3が使用不能です…』

アスカ
「何だと？ハア、仕方ねぇか…なあ、ルシファー…まだ、いけるよな…？」

ルシファー
『もちろんです…問題はありません、マスター。』

アスカ
「そうか…そうでなくちゃ面白みが無いと来たもんだッ！そうだよな？ガキぃッ！」

アスカは指先にカラッゾと同型のビームクローを展開しヴィータに猛スピードで突進した。

ヴィータ
「行くぞッ！アイゼン…ッ！」

グラーフアイゼン

『了解ッ！』

ヴィータの気合いと共にグラーフアイゼンから薬莢が排出されると同時にアスカの攻撃を受け止める。

ヴィータ
「アタシの仲間には指一本触れさせねぇッ！」

アスカ
「はぁッ！面白れぇッ！なら、やってみろよぉッ！ガキィィッ！」

二人は離れてはぶつかり、離れてはぶつかりを何度も繰り返し、お互いの武器からは激しい火花を上げていた。

アスカ
「ああ、やっぱり戦争は良いよな…元気が溢れてくるッ！」

ヴィータ
「はぁ？お前は何が言いたいんだッ！」

アスカ
「死を意識するから『生』と言うものを実感できるッ！」

ヴィータ
「嘗めるなぁぁぁッ！アイゼンッ！ラケーテンフォルムッ！」

ヴィータのグラーフアイゼンの形が変わり薬莢型のカートリッジが排出され噴射口からは激しく炎を吹き出す。

ヴィータ

「ブチ抜けぇぇぇッ！」

アスカはヴィータの攻撃を紙一重でかわし、爪先にビームサーベルを素早く展開するとすれ違いざまに彼女の脇腹を切り裂いた。

ヴィータ
「うぐっ！」

ヴィータのバリアジャケットは破れ傷口からは鮮血が吹き出す。

リイン
「だ、大丈夫ですかッ！！？ヴィータちゃんッ！」

ヴィータ
「あ、ああ…何とかな…」

アスカ
「何だ…つまんねぇな…俺をブッ飛ばすだの意気まいていたのに全然なってねぇ…そんなんで本気で俺に勝とうとでも思っているのか？」

ヴィータ
「ギガ本気だよッ！」

ヴィータはグラーフアイゼンを強く握り締めると再びアスカに向かって行く。

アスカ
「何度、かかって来ようがテメぇじゃ、俺には敵わないんだよぉッ！」

アスカはヴィータの攻撃をGNビームクローを使い、軽々と往なすとカウンターの蹴りを入れる。

ヴィータ
「あが…ッ！」

蹴りを食らったヴィータは勢い良く地面に叩きつけられた。

ヴィータ
「…うぅ…お、おい…リイン、大丈夫か…？」

リイン
『……』

ヴィータ
「おいッ！リイン、しっかりしろッ！く、参ったな…万事休すか…」

アスカ
「さて、テメぇとの遊びも飽きたし、そろそろ止めを刺して新しい獲物でも見つけに行こうとするかな…」

アスカは五指に展開したビームクローを一つに纏め剣状にする。

アスカ
「ハハハッ！もう一度、殺してやんよッ！じゃあな、クソガギィッ！」

アスカがヴィータに襲い掛かろうとしたその時だった。いきなり、アスカの元へ一本の通信が入る。

アスカ
「ん？通信…？」

アスカは攻撃の手を止めてしぶしぶ通信に出る。相手は戦闘機人（ナンバーズ）の長女、ウーノからだ…

アスカ
「ったく何だよ…せっかく面白いところだったのに…つまんねぇ話しだったら承知しねぇぞ…」

ウーノ
『あ、アスカですか？帰投命令です。セインと別動隊のルーテシア達が目標を無事に確保しました。』

アスカ
「何？撤退だと？嫌だねそんなの…」

ウーノ
『どう言う意味ですか？貴方はドクターの命令を聞けないとでも…？』

アスカ
「ああ、聞けないねッ！今、俺の目の前には弱った獲物がいるんだ…俺はソイツに止めを刺すッ！」

ウーノ
『そのような、勝手な行動はドクターに報告させていただきますッ！そうしたら、貴方には例のお仕置きが待っていますよ？』

アスカ
「……ク、分ーったよ…お前の命令に従ってやんよ…」

ウーノ
『それで、良いんですよ、アスカ…なら、撤退ついでにノーヴェ達の所に援護に回って下さい…』

アスカ
「はぁ?何でだよッ!」

ウーノ
『あの娘たちったら、戦いに夢中になり過ぎて私の通信を無視しているんですよ…』

アスカ
(…ここでまた拒否ったら例のアレを目の前でチラつかせるつもりか…)

ウーノ
『どうかしました?』

アスカ
「いや、何でも無い…分かったよ…嬢ちゃん達の援護に回る。」

ウーノ
『では頼みましたよ、アスカ…』

アスカ
「ああ、了解した…」

そうして、ウーノとの通信は切れてしまった。

アスカ
「…と、言うことだッ！運が良かったなぁッ！ガキィッ！」

ヴィータ
「な、何だとッ！！？」

アスカ
「ちょっと急用ができたから、俺はお暇させていただくぜぇッ？」

ヴィータ
「ふ、ふざけるなぁッ！」

アスカ
「じゃあな、また今度、会ったときに殺してやっからそれまで首を洗って待ってなッ！」

アスカは捨て台詞を吐き、踵を返すと空の彼方に飛んでいく。

ヴィータ
「ま、待てぇぇぇッ！まだ勝負は終わってねぇぞぉぉッ！」

ヴィータは力の限り叫ぶがただ一帯に彼女の声が響くだけだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一方、スバル達の元には意外な援護が入っていた。

ギンガ

「はあぁぁッ！行っけぇぇッ！」

ノーヴェ
「何て馬鹿力だ…このままじゃ…ウェンディ…ッ！」

ウェンディ
「了解ッス！」

ティアナ
「そうはさせないわよッ！クロスミラージュ…シュートッ！」

ウェンディ
「ク、そんな豆鉄砲、いくら撃とうが私のガデッサには効かないッスよ！」

ティアナ
「フン、それはどうかしら？今よッ！スバルッ！」

スバル
「どりゃあぁぁッ！」

ウェンディはティアナに気を取られているうちに彼女の死角に回り込んだスバルが攻撃を叩き込んだ。

ウェンディ
「きゃあぁぁッ！」

スバルの繰り出した渾身の一撃を回避できずにモロに食らったウェンディは数ｍバウンドしながら吹き飛び地面に叩き付けられた。

チンク
「ウェンディィィッ！」

ウェンディ
「ううぅ……」

ウェンディはダメージが自身の許容範囲を超えており体が言うことを聞かず満足に動かせない状態だった。

ギンガ
「みんな、チャンスは今しかないわッ！一気に畳み掛けるわよッ！」

ティアナ、エリオ、キャロ「「「はいッ！」」」

スバル
「……うんッ！」

ノーヴェ
「チ…ッ！」

チンク
「しっかりしろ…ウェンディ…ッ！」

ウェンディ
「ごめんッス…チンク姉…迷惑をかけて…」

チンク
「気にするな…私たちは姉妹だろ…」

ノーヴェ

「なあ、チンク姉…どうするんだよ…」

チンク
「ふ…万事休すってところか…」

チンクたちが諦めたその時だった。その場に居た全員が背筋に激しい悪寒を感じた。

スバル
「な、何?この寒気…」

次の瞬間、指先に赤黒いビームソードを展開したアスカがスバルに迫る。

ギンガ
「スバル、危なぁぁぁいッ!」

ギンガは妹のスバルを庇うために彼女を力いっぱい突き飛ばす。

スバル
「きゃあッ!」

次の瞬間、ギンガの体にアスカの非情なるビームソードの刃が当たる。

ギンガ
「うわあぁあああぁ…ッ!」

スバル
「……え……?」

ティアナ
「う、嘘…でしょ…」

ギンガ
「スバル…みんな…逃げ……」

アスカはビームソードを全力で振り抜いた。勢いでギンガは胴体を真っ二つに両断され、その場に崩れるように倒れた。

キャロ
「……うぅ…ッ！」

エリオ
「キャロ、見ちゃダメ…ッ！」

ティアナ
「そ、そんな……」

スバル
「ギン姉ぇぇぇッ！」

スバルはギンガの名前を叫びながら慌てて近寄る。

アスカ
「ヒャハハハッ！命って言うのは実に呆気ないなぁッ！まるで虫けら同じだ…ほんの少し踏んだだけであっという間にご臨終だ…」

スバル
「……まれ…」

アスカ
「……あん？何だ？どうかしたのか？」

スバル
「黙れぇぇぇッ！」

スバルは怒りに任せ姉の命を奪ったアスカに掴み掛かろうとした。

アスカ
「うるせぇなぁッ！」

アスカは掴み掛かろうとスバルを避けると背後から地面に組み伏せる。

アスカ
「キャンキャン吠えんなよ…うっかりお嬢ちゃんを殺しちまうぞ…」

スバル
「うぅ…ギン姉…」

アスカ
「おい、テメぇらッ！撤退だ…目的は果たした…大人しく後ろに下がれッ！」

ノーヴェ
「あ、ああ…」

チンク
「わ、分かった…ウェンディ、行くぞ…姉の肩に腕を回せ…」

ウェンディ
「う、うん…」

チンクたちはアスカの命令に従い飛翔し、撤退して行った。

アスカ
「やっと行ったか…ったく手間の掛かる嬢ちゃん達だ…」

アスカは羽交い締めにしたスバルの拘束を解くと素早く空に舞い上がる。

アスカ
「じゃあな、俺は忙しいからこの辺で失礼させてもらうぜぇッ！」

ティアナ
「馬鹿なこと言わないでッ！アンタは絶対に許さないッ！」

アスカ
「じゃあ、どうする？俺を逮捕するかぁッ？」

ティアナ
「当たり前よッ！クロスファイア…シュートッ！」

ティアナは自分が制御できる限界の魔力弾をアスカに向けて放った。

アスカ
「馬鹿がッ！お嬢ちゃん少しは自分の命を大切にしろッ！行けよ、ファングゥゥゥッ！」

アスカはティアナの魔力弾を避けると3機のファングを差し向ける。

ティアナ
「は、速いッ！動きが追い付かないッ！」

ティアナは慌てて回避運動を取るが彼女に避けれるわけがなく、次々とファングが突き刺さった。

エリオ
「ティアナさ？んッ！」

スバル
「ティアッ！」

ティアナ
「ううぅ……」

アスカ
「ああ…つまんねぇなぁ…気合いの割には全然なってねぇ…全く持って興醒めだ…殺す価値もねぇ…」

そう言うとアスカは身を翻すと空の彼方に消えていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

なのはは何とかトーレ達を退けてフォワードの元へ急いでいると、反対の方角から赤い粒子を撒き散らしながら黒い人型のロボットが向かって来ていた。

アスカ

「よう、白いお嬢ちゃん…こんな所で何をしてんだ?大事なお仲間の援護に行ったんじゃなかったのか?」

なのは
「貴方こそ、どうしてフォワードのみんなが居た方角から…?フェイトちゃんはどうしたの?」

なのははレイジングハートをアスカに向ける。

アスカ
「フェイト?……ああ、あの金髪のお嬢ちゃんか…ソイツならもう少しで殺せたんだけどな…いきなり邪魔が入ってくれたおかげで結局、殺せず仕舞いだ…」

なのは
「そう…良かった…」

フェイトの無事を聞いてなのははホッとしたのか少し胸を撫で下ろす。

アスカ
「おっと、良いのか?胸を撫で下ろすにはちょっと早いと思うぜ?」

なのは
「どういう事?まさか、フォワードの身に…ッ!」

アスカ
「ククク…さあな、それは自分の目で確かめてみれば解るさ…」

なのは

「……くッ！…もし、フォワードのみんなに何かあった時は絶対に許さないからッ！…」

なのははレイジングハートをアスカに向けるのを止めると、全速力でフォワードの元へ向かった。

しかし、彼女はそこで絶望的な光景を見るとはまだ知る止しもなかった。

次回に続く。

散る命、残る命…（後書き）

今回、ギンガが帰らぬ人となってしまいました。

妹のスバルはこれからどうなってしまうのか…

ご意見、ご感想、またはアドバイスなどあれば投稿して下さい。

待ってます！

悲しみに暮れた街とアスカの計画…（前書き）

お待たせしました。今回から最終回に向けて物語の歯車が大きく動き出すと思います。お楽しみになって下さい。

悲しみに暮れた街とアスカの計画…

アスカとナンバーズによる機動六課と時空管理局へ対しての大規模襲撃から5日が経っていた。帰る場所を失った機動六課のメンバーは管理局が保有しているL級艦船『アースラ』に移住していた。

そして、今日は大規模襲撃の犠牲者の合同葬儀がミッドチルダ郊外の共同墓地で行われていた。

今回は襲撃の対応に出撃した局員や避難中に戦闘に巻き込まれた一般人など１５０人以上が犠牲になった。

また、参列者の中には八神はやてを始めとする六課の面々に陸士１０８部隊の隊長で犠牲者のギンガ・ナガシマの父親であるゲンヤの姿もあった。

ゲンヤ
「……未だに信じられんよ…まさか、こうも早く娘が逝っちまうなんて…」

はやての隣に居たゲンヤが唐突に呟いた。

はやて
「……ごめんなさい…私のせいで…」

はやては俯きながらゲンヤに謝った。

ゲンヤ
「どうして、お前が謝る…お前は精一杯やった。そんなに自分を責

めるんじゃない…それにな、俺が一番許せねぇのは奴だ…」

ゲンヤは手をグッと握り静かに怒っていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

また、はやてとゲンヤの少し後ろでは、なのはにフェイトそしてフォワード陣がいた。

スバル
「うぅ…どうして、ギン姉が死んじゃうの…こんなのあんまりだよ…」

ティアナ
「スバル…（私はスバルになんて声を掛ければ良いの…）」

なのは
「私のせいだ…私があの時…もう少し早くフォワードの援護に行けたなら、ギンガはこんな事にはならなかったのに…」

フェイト
「ううん…なのはは何も悪くはないよ…」

なのは
「うん、ありがとう…フェイトちゃん…だけど、次にアイツと戦うときは…」

フェイト
「うん、その時は私も全力で行く…もう、躊躇はしない…」

なのは
「今度こそ、散って逝ったみんなの仇をとってみせる…ッ！」
なのはとフェイトの二人はアスカに対して雪辱を返す事を誓うのだった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
場所は変わりここはスカリエッティの研究所。そこにアスカが寝泊まりしている部屋があった。
アスカ
「どうだ？ルシファー…例の計画はスカリエッティの野郎にバレた様子はないか？」
ルシファー
「はい、マスター。今のところ博士には感ずかれてはいません。それにこれをご覧下さい…」
ルシファーはモニターのコンソールを叩きながらアスカに答える。
そして、アスカは彼女の言われた通りに映し出されたモニターを見た。そこに映し出されたのはおびただしい量の培養ケース。その中にはアスカと瓜二つの姿をした人間が入っていた。
アスカ
「ようやく、ここまで来たか…で、数はどのくらい出来たんだ？」
ルシファー
「え～っと…今のところマスターのクローンは全部で2万体…そし

て彼らの専用のデバイス、『ＧＮＺ－００４ガガ』も全員分用意しています。」

アスカ
「そうか…ククク、計画を実行するのはもうすぐだな…ルシファー？」

ルシファー
「そうですね。でも、あの娘たちはどうするんですか？私たちの目的はあくまでもスカリエッティを殺すことですよね？」

アスカ
「確かにな…まあ、邪魔して来るのは凡そ察しがついている。」

ルシファー
「やっぱり、殺すのですか？」

アスカ
「当たり前だろ俺の邪魔をする奴は例え女、子どもだろうが容赦はしない…これは俺のポリシーだ……ん？まさかだと思うが、ルシファー…お前……」

ルシファー
「あ、いえ…別にマスターの考えていらっしゃる事は思ってはいませんよ。」

アスカ
「そうか…それなら、別に良いんだ。あ、でも…もし、アイツ等が命乞いをしたら見逃してやらんでもない…」

ルシファー
「本当ですか…」

アスカ
「ああ、俺はお前に嘘をついた事があるか？」

ルシファー
「い、いえ…すみません、マスター…」

アスカ
「フン…気にするな…さあ、今日も遅いしさっさと寝るぞ…」

ルシファー
「はい、マスター。お休みなさい…」

アスカ
「ああ…」

次回に続く。

悲しみに暮れた街とアスカの計画…（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

アスカ、反逆の時（前書き）

お待たせしました。どうぞお楽しみになって下さい。

アスカ、反逆の時

ここはスカリエッティがアジトにしている巨大戦艦『聖王のゆりかご』の一室…そこではこの間、誘拐して来た少女ヴィヴィオに対してレリックを彼女の体と融合させる人体実験が行われようとしていた。

実験を行うのはスカリエッティ。彼の助手として立ち会うのがウーノ、クアットロ、ディエチ、そしてアスカとルシファーだ。

ヴィヴィオ
「いやだ！こわいよぉ！たすけて、ママぁッ！」

恐怖から泣き叫ぶヴィヴィオ。それをアスカは黙って見ていた。

ディエチ
「本当にその娘は大丈夫なんでしょうか？」

クアットロ
「心配すること無くってよ♪それにどんなに泣いても無駄ですよぉ～♪あなたの大好きなママは助けには来ないからぁ～♪」

ヴィヴィオ
「うわぁあぁぁんッ！たすけて、たすけてよぉぉッ！」

スカリエッティ
「さあ、始めようか…ウーノ、例の物を…」

ウーノ

「はい、ドクター。」

彼女はレリックの入った箱をスカリエッティに差し出す。中には赤い拳大の宝石が輝いていた。

ルシファー
「きれいですね…マスター。」

アスカ
「ほう…それがレリックなのか？」

スカリエッティ
「そうですよ。フフフ…よく見ていて下さい。聖王の復活です…そして、『聖王のゆりかご』を起動しこの世界を手に入れる。」

そう言うとスカリエッティはまだ幼いヴィヴィオの胸押し当てた。

ヴィヴィオ
「いやあぁぁあぁぁッ！」

その時、ヴィヴィオの叫びと共に彼女の体が激しく光輝いた。

スカリエッティ
「素晴らしい…この輝きはまさに聖王…これぞ私の望んだ最高傑作だッ！」

スカリエッティは光輝くヴィヴィオを見ながらかなり興奮していた。

しかし、その興奮はすぐに冷めてしまう。一発の銃声が部屋に鳴り響いたのだった。

クアットロ
「何事ですのッ!?」

銃声が鳴ると同時にウーノが崩れるように地面に倒れる。彼女の額には銃弾によって風穴が開いていた。

ディエチ
「ウーノ姉様ぁッ!」

クアットロ
「アスカさんッ!貴方、いったい何を考えているのッ!」

スカリエッティ
「全くです…私の大事な傑作機(むすめ)を…これは唯では済みませよ。」

アスカ
「ククク…じゃあ、どうするよ?例のヤツ、使ってみるか?」

アスカは悪意に満ちた笑みを浮かべながらスカリエッティ達を見る。

アスカ
「さあ、早くやってみせてくれ…変態ドクターさんよぉッ!」

スカリエッティ
「フン、調子付くのもいい加減にしたまえ…」

スカリエッティは指を鳴らす。だが、アスカには何の変化もない。

スカリエッティ

「なぜだッ！？どうして発動しないッ！故障？…いや、私に限ってそれはあり得ない。まさか……」

アスカ
「そうだ…その、まさかだよ…博士…」

ルシファー
「この間、マスターのメディカルチェックをしていた時に偶然にもその例の装置を発見したんでマスターの脳から除去させて頂きました。」

それを聞いたスカリエッティはみるみる顔色が青ざめ悪くなっていく。

スカリエッティ
「私は君の恩人じゃないのかね？」

アスカ
「まあな、最初はそう思っていたんだがな…この訳の分かんねぇ物を頭ん中に埋め込まれたと分かった時に決めたんだよぉッ！」

そう言うとアスカはルシファーと素早くユニゾンしＭＳ形態になる。

そして、肩のシールドから巨大な蟹鋏『ＧＮアトミックブレード』を展開するとスカリエッティの首を掴み上げた。

スカリエッティ
「うぐッ！」

クアットロ、ディエチ

「「ドクタ？？ッ！」」

アスカ
「キャンキャン吠えんなッ！うるせぇお嬢ちゃん達だなぁッ！…」

スカリエッティ
「…っぐ、君の目的は…いったい、何を企んでいる…ッ！」

アスカ
「別に…俺もこの聖王のゆりかごが欲しいだけだ…これを使って戦争を楽しむんだよ…」

スカリエッティ
「む、無駄だよ…君にこの聖王のゆりかごは使いこなせない…そもそも、この戦艦は彼女の物です…」

アスカ
「ククク…アハハハッ！」

スカリエッティ
「な、何が可笑しいんです？…」

アスカ
「ふん、やっぱり知らないのか…だったら教えてやるよ…俺はな進化した存在『革新者（イノベイター）』になった…」

スカリエッティ
「イ、イノベイター？」

アスカ

「ああ、強靭な肉体に究極の空間認識能力、そして極めつけはこれだ…」

アスカは意識をヴィヴィオに集中した瞬間、気を失っていた彼女は目をカッと見開き自身を拘束していたバインドを引き千切る。

クアットロ
「う、嘘でしょ…」

スカリエッティ
「ど、どういう事だ?…り、理解が出来ない…」

ヴィヴィオ（アスカ）
「やっぱり、いくら聖王のクローンでもこの程度か…どうだぁ?驚いただろう?」

ヴィヴィオの瞳はイノベイターの覚醒時と同じで『にび色』に輝いていた。

ヴィヴィオ（アスカ）
「俺は初めてこのガキと会った時に感じたんだコイツも俺と同じイノベイターだとな…」

ディエチ
「と、言う事は…」

アスカ
「お前の考えている通りだ…」

スカリエッティ

「クアットロ、ディエチ…みんなを連れて逃げなさい…ッ！」

ディエチ
「ドクターッ！いったい逃げろって言ってもどこへ行けば良いんですかッ！」

クアットロ
「そうですよ…それに私はドクターの事が心配ですッ！」

スカリエッティ
「私の事は気にしないでいいです…さあ、早く…ッ！」

ディエチ
「了解しました…行きましょうッ！クア姉ッ！」

クアットロ
「ドクタ？？ッ！」

二人はスカリエッティに促され実験室から走り去って行った。

アスカ
「さて、楽しい狩りの余興に博士…テメぇを一思いに殺してやんよおぉッ！」

アスカはもう一方の『ＧＮアトミックブレード』でスカリエッティの胴を掴み頭上に掲げる。そして…

スカリエッティ
「う、うがあぁぁぁぁぁッ！……」

アスカ
「これで終わりだな、博士ぇッ！ヒャハハハッ！今までありがとうッ！逝っちまいなぁぁッ！」

スカリエッティ
「ぎゃあぁぁあぁぁッ！…」

次の瞬間、スカリエッティの体はブチブチと音を立てて千切れ大量の血が噴水のように吹き出した。

ヴィヴィオ
「いやあぁぁあぁぁッ！」

たまたま、その光景を目撃してしまったヴィヴィオは激しいショックを受け絶叫すると再び気を失ってしまうのだった。

次回に続く。

アスカ、反逆の時（後書き）

次回はアスカｖｓナンバーズです。どうぞ、お楽しみに！

ご意見、ご感想をお待ちしております。

ナンバーズの運命（前書き）

お待たせしました。どうぞお楽しみになって下さい。

ナンバーズの運命

ここは聖王のゆりかご内にある訓練場…そこではノーヴェを始め、ウェンディ、セイン、オットー、ディードが模擬戦をやっていた。

セイン
「準備ＯＫ♪さあ、マックスレベルで撃っておいで～♪」

オットー
「はい…唸れ、光渦の嵐…ＩＳ、レイストーム…」

オットーが魔方陣を展開するとセインに向かって光の槍が伸びる。

ノーヴェ
「次でラストだ！」

ウェンディ
「全力で来るッスよ～」

ディード
「はい…ノーヴェ姉様、ウェンディ姉様…ＩＳ、ツインブレイズ…ッ！」

ノーヴェ
「よ～し、どっからでも掛かって来いッ！」

三人はお互いに激しくぶつかり合った。

そして、模擬戦をやっている彼女たちから少し離れた場所では、ト

ーレとチンクが談笑していた。

トーレ
「私たちもやっと１２人全員が揃ったわけだな。」

チンク
「予定は順調…素晴らしいことだ…」

トーレ
「そうだな…まあ、Ｎｏ．２（ドゥーエ）の合流はいくらか遅れるらしいがな…」

二人が話しをしているとそこへセッテが遅れてやって来た。

セッテ
「トーレ、チンク、失礼いたします。」

トーレ
「ん？セッテか…どうした？」

セッテ
「空戦ジムのスペースを使用したく許可を頂きたく参りました。」

トーレ
「別に構わないぞ。空いているなら好きに使え。」

セッテ
「ありがとうございます」

チンク

「それから、セッテは動作と言葉使いにはもう少し気を遣ったらどうだ？あまりにも機械的すぎるぞ…」

セッテ
「はい…すみませんでした、チンク…」

三人が他愛のない話しをしていると血相を変えたクアットロとディエチが訓練場に飛び込んで来た。

ディエチ
「あ、チンク姉様にトーレ姉様…た、大変ですッ！」

トーレ
「どうしたんだッ！？そんなに血相を変えて…」

クアットロ
「アイツが…アイツが…」

クアットロとディエチのただらない雰囲気を感じ取ったのかノーヴェたちも模擬戦を切り上げてのトーレたちの元へやって来た。

ノーヴェ
「ったく…どうした？」

ウェンディ
「そうッスよ～騒がしくて模擬戦に集中できないッス～」

クアットロ
「うるさいッ！今はそれどころじゃないのッ！」

ウェンディ
「何ッスか?その言い方はッ!」

チンク
「まあまあ、二人とも少しは落ち着け…これじゃ聞ける話しも聞けないぞ?」

チンクは興奮する二人を宥める。

クアットロ
「ごめんなさい…だけど、アイツがドクターをッ!」

トーレ
「アイツって誰だ?ドクターの身に何かあったのか?」

ディエチ
「スメラギ・アスカです…彼がドクターを人質にそれでこの聖王のゆりかごを奪いました…」

トーレ
「何の冗談を言っている…ッ!」

アスカ
『冗談じゃないさ…ほれ、見てみろ』

二人の話しにトーレたちが驚いているとアスカからモニター通信が入る。

そして、彼の言う通りそこに映し出されたのは洗脳されたヴィヴィオと見るも無惨な姿にされたスカリエッティだった。

クアットロ
「ドクターッ！いやあぁぁあぁぁッ！」

クアットロはショックで激しく取り乱す。

チンク
「ドクター…そんな…」

トーレ
「アスカ…貴様ッ！これはどう言うことだぁッ！」

アスカ
『どう言うも何も俺はこの聖王のガキ共々この戦艦を頂きたく…』

トーレ
「ふざけるなぁぁッ！そこで待っていろ…ッ！今から貴様を殺しに行く…」

アスカ
『いや、無駄だ…戦力が違う…』

チンク
「それは、どう言うことだ…？」

ノーヴェ
「そうだッ！こっちには姉妹全員がいるんだッ！」

ウェンディ
「おとなしく観念しろッス！」

アスカ
『ククク…アハハハッ！』

クアットロ
「な、なにが可笑しいのッ！」

アスカ
『つくづく、お前たちの馬鹿さ加減には笑わせられる…』

トーレ
「何だと…ッ！！？」

アスカ
『ふん、これを見てもそんな戯れ言が言えるかな？』

アスカの指示でモニターが変わるとそこに映ったのはＭＳ『ガガ』や『ＧＮ－Ｘ』などのモビルスーツの大軍がこの聖王のゆりかごに合流しようとする光景だった。

トーレ
「な、何なんだ…これは……」

ノーヴェ
「冗談じゃないぜ…」

クアットロ
「いくら私たちでもこの数じゃ勝てっこない…」

ウェンディ

「どうするんッスか?チンク姉…ッ!」

アスカ
『さあ、どうする?これでも俺と殺り合うか?』

トーレ
「く……ッ!みんな、逃げるぞッ!」

チンク
「ああ、それが良い…行くぞッ!」

ナンバーズたちは急いで外へ出て行った。

アスカ
『さあ、この楽しい鬼ごっこ為にも頑張って逃げてくれよお嬢ちゃん達…』

次回に続く。

ナンバーズの運命（後書き）

いかがだったでしょうか？ご意見、ご感想を待っています。

発進準備（前書き）

お待たせしました。お楽しみになって下さい。

発進準備

アスカとの通信を終えたナンバーズたちは『聖王のゆりかご』から脱出し南の方角へ飛行していた。

『トーレ、クアットロ、チンク、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ』の六人はこの間、スカリエッティから受領したバリアジャケットを纏っている。

また『セイン、セッテ、オットー、ディード』の四人は専用のジャケットを持っていないので飛行型のガジェットの上に乗って移動していた。

トーレ
「…くっ、どうしてこんな事に…」

クアットロ
「あのテロリストめ…よくもドクターを…殺してやるわ…絶対に…ッ！」

チンク
「そんな事言ってもなってしまったものはしょうがない…少しは落ち着け…」

クアットロ
「何を言っているのッ？こんな時に落ち着けだなんてッ！それにしょうがないですってッ？貴女、おかしいんじゃない？」

チンク

「何だと?今のは聞き捨てならないな…」

クアットロ
「ふん、殺る気?良いわよ?」

二人は足を止めお互いに向き合い戦闘態勢に入る。

トーレ
「二人ともッ!こんな時に何をやっているッ!」

クアットロ
「だって…トーレ姉様…」

トーレ
「ダメだ…反論は聞かん…それにチンクもチンクだぞいつもお前らしくない…」

チンク
「……すまない…つい、カッとして…」

セイン
「ねえ、それにしても私たちはこれからどうしたら良いの?」

ノーヴェ
「そうだな…帰る家も失った…」

ウェンディ
「アイツに捕まったらアタシら殺されるッスよ…」

ディエチ

「こんな所で路頭に迷うのはゴメンだな…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

場所は変わり聖王のゆりかご内にある玉座の間…そこには捕らわれのヴィヴィオと自由になったアスカが居た。

アスカ
「さてと…丁度いい頃合いだ。」

ルシファー
「はい、マスター…」

アスカ
「狩りの時間だ…じゃあ、ヴィヴィオ、この艦の留守を頼んだぜ？」

ヴィヴィオ
「うん……」

アスカ
「行くぜぇ？ルシファーッ！」

ルシファー
「了解しました…」

アスカは意気揚々と玉座の間から出ていき艦内にある発進用カタパルトの場所へ移動した。

そして、ルシファーとユニゾンしたアスカはＭＡ形態になるとカタパルトランチャーに自身を繋げる。

アスカ
「3分で出撃する。準備を始めろ…ッ！」

ルシファー
『はい、マスター。』

アスカ
「レーダー、通信…」

ルシファー
『チェック……』

アスカ
「IFF、火器管制…」

ルシファー
『チェック……』

アスカ
「右インテーク、左インテーク…」

ルシファー
『チェック……』

アスカ
「全兵装オールグリーン…ッ！」

ルシファー
『GNドライヴ、核反応プラズマジェットエンジン起動…お互いに

出力安定…いつでも行けます…』

アスカ
「了解した…」

艦内放送
『カタパルト圧力上昇、８８、９０、９１……進路クリア、オールグリーン…発進どうぞ……』

アスカ
「スメラギ・アスカ…ルシファー出るッ！」

次の瞬間、アスカの機体が高速で蒼天の空へ打ち出される。

アスカ
「久しぶりの戦闘だ…気合いを入れて行けよッ！」

ルシファー
『もちろんです…』

アスカは深紅の粒子を撒き散らしながらナンバーズの元へ向かったのだった。

次回に続く。

発進準備（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

大切なもの（前書き）

今回も少し短いです。お楽しみください。

大切なもの

ここは、管理局所属の時空航行艦『アースラ』。そこの甲板では機動六課のフォワードのスバル・ナガシマが一人黄昏ていた。

スバル
「…ハァ…ねえ、ギン姉…これから私はどうすればいいのかな…」

あの一件以来、スバルは心に大きな傷を負ってしまいい、訓練や任務なども身が入らずみんなの足を引っ張っていた。

そんなスバルの元へなのはとフォワードのティアナ、エリオ、キャロの四人がやって来た。

なのは
「スバル？ちょっと良いかな？」

スバル
「あ、なのはさん…それにみんな…どうしたんですか？今日の任務の事をみんなして責めに来たんですか？」

ふて腐れたような態度を取るスバルに怒りを露にしたティアナが掴み掛かろうとする。

ティアナ
「スバルッ！アンタって奴は…ッ！」

キャロ
「ダメですッ！ティアさんッ！…」

エリオ
「そうですよ…落ち着いて下さいッ！」

エリオとキャロの二人があわててティアナとスバルの間に入り止めようとするが彼女はそれを振り切りスバルの胸ぐらを掴み自分の方へ引き寄せる。

なのは
「ティア、やめてッ！」

ティアナ
「良いんです…なのはさん…今のスバルにはこの位しないと…ッ！」

そう言うとティアナはグッとスバルを睨み付けるが、スバルは力のない目で彼女を見ながら静かに自身の心の内を語り出した。

スバル
「もう、私には無理だよ…ティア…ギン姉が死んじゃって心にポッカリと穴が開いたみたいで何もする気が起きないし、忘れようとしてもあの時の事がどうして頭から離れないの…それに…もう、死にたいよ…」

スバルがそんな事を言ったその時だった。激昂したティアナが感情に任せとスバルの頬を殴り飛ばす。

スバル
「あぅッ！…」

ティアナ

「甘ったれんじゃないわよッ！ギンガさんが亡くなって悲しいのがアンタだけだと思ったら大間違いよッ！」

エリオ、キャロ
「「ティアさんッ！」」

エリオとキャロは衝撃的な光景に動揺を隠せない。一方、なのはとティアナの行動を静かに見守っている。

スバル
「じゃあ、どうすれば良いのッ？私はアイツが憎くてしょうがないの…殺してしまいたい程に…ッ！」

ティアナ
「何をバカな事を言っているのッ！！？ダメよッ！憎しみに囚われたりしちゃ…」

なのは
「そうね…ティアの言う通りだよ…私はそんなスバルを見たくない…」

スバル
「私は弱いッ！何一つ守れないで、何が夢は特別救助隊よ…こんなのおかしいよね…」

ティアナ
「アンタはまだそんな事を言うのッ！」

エリオ
「もう、止めてくださいッ！」

キャロ
「うぅ…みんな、どうしちゃったの…怖いよ…」

とうとう、キャロは我慢できずに泣き出してしまった。

ティアナ
「スバル…今のアンタは後悔と自責の闇に飲み込まれいる…」

スバル
「……。」

ティアナ
「今は辛いと思うけど、それらを押し殺すのよッ！」

スバル
「何を言っているのッ？そんなの無理だよッ！無理に決まってる…」

なのは
「違うわ。スバル…ティアはね『失った物ばかり数えるな』って言いたいんだと思う…」

ティアナ
「そうよッ！無くしてしまったものはもう戻っては来ないけど、アンタにはまだ残ってるものがあるでしょう…ッ！」

スバル
「……ッ！！？」

スバルは彼女の言葉に何かようやく気づいたようだった。

一方、ティアナも自分の思いの丈を打ち明けたのか押し倒していたスバルを解放する。

そして、解放されたスバルは静かに考え始めると自然に彼女の瞳か大粒の涙がこぼれ出した。

ティアナ
「もう、気づいた？」

スバル
「うん…私には…私には大切な仲間がいるよッ！！！」

ティアナ
「スバル…良かった…」

スバル
「ティアにエリオにキャロ…なのはさんにフェイトさん、八神部隊長…私にはたくさんの仲間がいる…ッ！！！」

それを聞いたみんなが笑顔になった。

スバル
「ありがとう、ティア…それにみんな…おかげで私、まだ頑張れるッ！」

ようやく立ち直ってくれたスバルにみんなが喜んでいたその時だった。艦内にけたたましくアラートが鳴り響いた。

次回に続く。

大切なもの（後書き）

今回はスバルが立ち直る話でした。ご意見、ご感想をお待ちしております。

激突、空中回廊（前書き）

お待たせしました。どうぞ、お楽しみになってください。

激突、空中回廊

ここは次元航行艦『アースラ』。突如として鳴り響いたアラートに機動六課の面々はブリーフィングルームに集まっていた。

はやて
「緊急事態や…管理局のレーダーがコチラに向かって来る多数の反応を捉えた…」

なのは
「はやてちゃんッ！それってまさかッ！？…」

はやて
「ああ…魔力反応に混じって例の特殊な粒子も観測されとる。おそらく、この間の大規模襲撃犯の一味やろな…」

フェイト
「また、証拠にもなくミッドチルダを混乱に陥れる気かしら？」

はやて
「だけど、今回は何だか様子がおかしいんや…」

ヴィータ
「ん？はやて…それはどういう意味なんだ？」

はやて
「それは、これを見てみれば分かるで…」

はやては例のレーダー映像をモニターに表示する。

ティアナ
「あれ？この反応って…」

はやて
「そうや…ティアナの言うとおり多数の反応がたった一つの反応に追われる様に移動しとるんや…」

スバル
「と、言うことは…」

なのは
「ええ…今回の任務は、追われているメンバーを保護して…」

フェイト
「さらに、追いかけているのはあの魔導師狩り…」

スバル
「そして、奴を逮捕するんですね…」

はやて
「そうや…だから、なのはちゃんにフェイトちゃんは空からスバルとティアナは地上から現場に向かってなッ！…」

なのは、フェイト
「「うん、分かった！」」

スバル、ティアナ
「「了解しました！」」

はやて
「リイン、エリオ、キャロの三人は後方で保護した一味の手当てなどしてくれな…」

エリオ、キャロ
「「は、はいッ！」」

リイン
「了解したですぅ～♪」

はやて
「あと、ヴァイス曹長…病み上がりできついと思うけどリイン達の為にヘリを飛ばしてもらえるか？…」

ヴァイス
「お任せあれッ！…」

はやて
「じゃあ、総員出動やッ！今回こそ奴を魔導師狩りを逮捕するでッ！」

六課メンバー
「「「「了解ッ！」」」」

はやての出動命令に気合いを入れたメンバーはブリーフィングルームを飛び出しそれぞれの持ち場に向かって行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして、ミッドチルダから北の方角に約２５ｋｍの上空では『聖王

のゆりかご』から脱出したナンバーズ達が追いついたアスカの猛攻を受けていた。

アスカ
「ヒャハハハ！…そらそら、どうしたぁッ！そんなんじゃ命がいくらあっても足りないぜぇッ？」

トーレ
「クッ！…この数相手に良くここまで戦えるな…ノーヴェ、回り込めッ！」

ノーヴェ
「了解だッ！ウェンディ、援護してくれッ！」

ウェンディ
「分かったッス！ＧＮメガランチャー発射ぁッ！」

ウェンディは『ガデッサ』の主砲でアスカの攻撃に向かうトーレとノーヴェの援護をする。

アスカ
「馬鹿が！そんな物、俺に当たる訳ねぇだろッ！」

アスカはウェンディの放った特大のビームを身体を捻る様に回避する。

ウェンディ
「な、避けたッス！…」

そして、素早くビームソードを左右の腰から抜くと襲いかかるトー

レとノーヴェの駆る『ガラッゾ』の五指に光るビームクローを容易に受け止める。

ノーヴェ
「な、何ッ！！？こんな事って！…」

トーレ
「コイツの反応速度は化け物かッ！！？…」

アスカ
「ククク…お前たちのような虫ケラが束になって掛かって来ようがイノベイターの俺には敵わない…」

アスカは肩に装備している連装砲『ＧＮクロスキャノン』をトーレとノーヴェに向けて放つ。

ノーヴェ
「う、うわぁッ！！？」

トーレ
「クッ！…やるな…」

二人は突然の砲撃を体勢を崩しながらも紙一重で避けた。

クアットロ
「大丈夫ですかッ！？トーレ姉様ッ？…」

トーレ
「ああ、何とか無事だ…ノーヴェはどうなんだ？」

ノーヴェ
「アタシは大丈夫だけど、このままじゃ…」

トーレ
「ああ、ジリ貧だな…」

クアットロ
「トーレ姉様、任せて下さい。大丈夫ですわ…私たちも援護に回ります。さあ、皆さん行きますよ…」

ディエチ
「了解……」

ウェンディ
「任せろッス！」

チンク
「ああ、こちらも了解した…セインたちは先に行け…その姿でアイツと戦うのは危ない…」

セイン
「だけど、チンク姉…」

チンク
「大丈夫だ…姉たちを信じろ…」

セイン
「……うん、分かった…行くよ、みんなッ！…」

セッテ

「了解……」

オットー
「どうかご無事で…」

ディード
「皆さんのご武運を祈っています…」

そう言うとセインを始めとした専用のＭＳを持っていないナンバーズ達は残ってアスカと戦う姉妹らを心配しながらも戦闘空域から離れて行った。

アスカ
「おいおい…この俺から逃げられると思っているのか？行くぞ、ルシファー。」

ルシファー
『了解しました…閃光弾とニードルマインを射出します。』

チンク
「みんな危険だッ！…」

チンクが叫んだ次の瞬間、アスカの腰の部分から閃光弾と対人兵器であるニードルマインが同時に発射された。

そして、眩い光と共にＧＮ粒子の力で加速された無数の特殊鉄鋼弾が雨のようにナンバーズに降り注ぐ。

ウェンディ
「ぐうッ！……」

ノーヴェ
「め、目がッ！…」

クアットロ
「きゃあああぁぁぁッ！」

特殊鉄鋼弾の雨が彼女たちのＭＳの装甲に直撃する度に金属特有の甲高い音が鳴り響く。

ナンバーズ達は何とかアスカのニードルマインによる攻撃を耐え凌いだ。

ノーヴェ
「あ、あれ？アイツはどこに行ったんだ？…」

ウェンディ
「本当ッス！…」

そして、攻撃に気を取られているうちにアスカの姿を見失った彼女たちはあわてて辺りを見渡す。

トーレ
「い、いないッ！！？」

クアットロ
「本当ですわね…いったいどこへ？…」

ノーヴェ
「数で勝っているアタシ達に敵わないと思ってやっぱり逃げ出した

んじゃねぇの？」

チンク
「はぁ、ノーヴェ…それは無いと思うぞ…」

ノーヴェ
「じゃあ、どこに行ったんだよッ！」

ノーヴェは苛立ちを隠せない。

ディエチ
「まあまあ、ノーヴェ、少しは落ち着いて…」

ノーヴェ
「こんな時に落ち着いていられるかってッ！…いつぞやの模擬戦の落とし前を今日こそ着けてやるッ！」

ノーヴェが闘志を剥き出しているとウェンディがポツリと呟いた。

ウェンディ
「まさかとは思うけど、アイツ…セインたちの所に行ったんじゃないッスか？」

トーレ
「しまった…ウェンディの言う通り、奴の狙いはセイン達か…」

ノーヴェ
「野郎ッ！…嘗めた真似をッ！……」

ノーヴェは自身の駆るガラッゾをセイン達が居る方角へ全速力で向

けた。

クアットロ
「ノーヴェ、待ちなさいッ！」

トーレ
「みんな、急げッ！…ノーヴェ一人じゃどうにもならんッ！」

チンク
「当たり前だ…大事な妹をみすみす見捨てる事はしないッ！…」

そう言うとチンク達はノーヴェを追いかける為に機体を同じ方角へ向けた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一方、先に空域を離脱していたセイン達は残って戦っている姉妹を心配していた。

セイン
「みんな、大丈夫かな…」

オットー
「分かりません…数では私たちの方が上ですが…」

ディード
「そうですね…なんたって相手はあの魔導師狩り…」

セイン
「これまでにたくさんの人を殺して、さらにエース揃いの機動六課

を壊滅寸前まで追い込んだ奴だし…心配だな…」

そんな話しをしていると今まで静かにしていたセッテが何かを感じ取った。

セッテ
「来る…ッ！」

セイン
「えっ？……」

その時だった。赤黒い一筋のビームが彼女たちの間を割るように走る。

セイン
「きゃあぁぁぁあッ！」

オットー
「くッ！…魔導師狩りめ…姉様たちをどうした！…ＩＳ、レイストームッ！」

オットーは猛スピードで迫るアスカに向けて魔力光を放った。

アスカ
「ふん、まずは大して何も出来ないお嬢ちゃん達から血祭りに上げてやろうと思ってな…」

アスカは自身に伸びる無数の光の槍を容易に回避しながらセイン達に迫る。

セッテ
「ＩＳ、スローターアームズッ！…」

未だなお接近するアスカの前にセッテが割り込み自慢の大型ブーメランを投げつける。

アスカ
「しゃらくせぇッ！そんな物で俺は倒せねぇッ！」

アスカは素早く変型するとつま先からビームサーベルを展開し迫る２つのブーメランブレードを宙返りする様に蹴り上げながら弾くと一気にセッテに肉薄する。

アスカ
「じゃあなッ！お嬢ちゃん…逝っちまいなぁッ！」

セッテ
「過信するのはまだ早いわ、アスカ…」

アスカ
「何ッ！？…」

アスカがゆっくりと後ろを見るとそこにはさっき弾き飛ばしたブーメランブレードが大きく甲を描くようにアスカ自身に戻って来る。

アスカ
「し、しまった…ッ！」

セッテ
「ドクターを殺した罪、その命を持って償え…」

セッテは後ろからアスカの体を羽交い締めにする。

アスカ
「く、くそぉぉッ！」

セッテが勝利が確信したその時だった。

アスカ
「なんてな…トランザムッ！…」

ルシファー
『了解しました。トランザムを起動します。』

アスカは不気味に微笑んだと同時に彼の体が赤く輝き出した。

セッテ
「…ん？どうしたんだ？いきなり体がッ！…」

セイン
「ま、まさかッ！！？その光は…ッ！」

アスカ
「残念だったな…お嬢ちゃん…死ぬのはお前の方だッ！」

セッテ
「えっ？…」

アスカはセッテの鳩尾（みぞおち）に素早く肘打ちを打ち込んだ。

セッテ
「うぐッ！…」

そして、彼女がバランスを崩した瞬間に拘束を解きその場を離れた
次の瞬間、戻って来たブーメランブレードの一つがセッテの体に深
々と食い込んだのだ。

セッテ
「うがあぁぁあッ！…」

オットー
「セッテ！……」

ディード
「あぁぁ……」

セイン
「そ、そんなッ！…」

唖然とする三人。

セッテ
「せ、セイン…た、助け…て…」

セッテは他の姉妹たちに救いの手を伸ばすがアスカはそんな彼女に
無慈悲なまでに追い討ちを仕掛ける。必死に手を伸ばす彼女の頭上
に逆立ちするように移動し、アスカの両手の指先が高速で射出され
セッテの体ごと彼女の乗るガジェット2型に突き刺さる。

端から見るとセッテはまるで操り人形ようになっていた。

アスカの両手とガジェット2型の間にはEカーボン製のワイヤーで繋がっており、その間には瀕死の傷を負ったセッテが閉じ込められていた。

アスカ
「死ね…虫けらッ！…」

アスカはセッテに向かってそう言うと素早く二回ほど腕を交差させて指先を元の場所に戻した次の瞬間、彼女の体からは格子状に鮮血が流れ出し頭の方からボトボトと音を立てて崩れバラバラになってしまった。

セイン
「いやあぁぁぁぁッ！」

セインは目の前で起きた衝撃的な光景に激しく取り乱し発狂する。

そして、オットーとディードは見るに見かねて思わず目を反らした。

アスカ
「さあ…次の生け贄は誰だ？お前か？それとも、そこのお嬢ちゃん達か？」

アスカはナンバーズ達にビームソードを向けたその時オレンジ色を基調とした極彩色のビームが彼を襲うのだった。

次回に続く。

激突、空中回廊（後書き）

今回は、この物語からセッテも退場していただきました。

次回からなのは達、機動六課のメンバーもこの戦いに参戦させていきます。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

命の華（前書き）

お待たせしました。どうぞお楽しみになってください。

アスカ
「チッ…もう、追い付きやがったか…ルシファー、お嬢ちゃん達に先制攻撃を仕掛けるぞッ！…」

ルシファー
『了解しました。ＧＮブラスターを使用します…』

アスカは『ＧＮツインライフル』を連結し、さらに背中のウイングバインダーと繋げ引き金を引いた瞬間、今まで彼女たちが見た事もない巨大な赤黒い光が大空を走った。

セイン
「何よ…あの光…」

ディード
「何て禍々しいの…」

オットー
「姉様たちが…」

セイン達は大空を走る邪悪で禍々しい光を唖然と見ているだけだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一方、アスカを追いかけていたトーレ達は前方から迫る禍々しい光にあわてていた。

トーレ
「何なんだ…あれはッ！！？…」

チンク
「みんな、避けろぉぉッ！」

ナンバーズ達が急いで回避行動を取るがその中で一つだけ極光の奔流に飲まれる機影があった。

ナンバーズ達の中で一番大きな機体『レグナント』を受け取ったクアットロだった。

クアットロ
「わ、私は…まだ…ドクターの仇を取ってないのに…な、何も…こんな所で……」

クアットロは大出力のＧＮフィールドで何とか持ちこたえていたがそれも数秒の間であった。

アスカの放った『ＧＮブラスター』は擬似太陽炉と核エンジンから搾り取った莫大なエネルギーを持っている為、クアットロのＧＮフィールドを意図も簡単に突破し彼女を光の彼方に連れ去って行った。

トーレ
「クアットロぉぉッ！」

ノーヴェ
「く、くそッ！…あの野郎…ブッ殺してやるッ！」

ウェンディ
「援護するッスよ、ノーヴェ…」

ノーヴェ
「ああッ！…ディエチも頼んだぞ…」

ディエチ
「大丈夫、もう準備は出来てる…ＧＮ粒子臨海…いつでも行ける…」

ノーヴェ
「クア姉は何かと気に入らねぇ事もあったけど…それでも大切な姉貴だ…その仇を今こそ討つ！…うおおぉぉッ！…」

ノーヴェはクアットロの仇を取るために出力全開でアスカの元に向かった。

チンク
「ま、待てッ！…無茶はするなッ！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして、場所は変わりここは機動六課所有の輸送ヘリの中…

なのは達は移動中のヘリの中から空を走る禍々しい光に恐怖しながら見ていた。

なのは
「何なの…あれは…」

フェイト

「分からない…だけど、あれはこの世の物ではないわ…」

キャロ
「エリオくん、恐いよ…」

エリオ
「大丈夫だよ、キャロ…僕たちがついているから…」

スバル
「そうだよ。エリオの言う通り…だから安心してね…」

キャロ
「はい、ありがとうございます…」

ティアナ
「それに…なのは隊長…あの光の先に奴が…魔導師狩りが居るんですね？
…」

なのは
「うん…みんな、気を引き締めて行くよッ！」

フェイト
「うんッ！……」

ティアナ、スバル
「「了解ッ！…」」

そう言うと四人はヘリの後部ハッチから勢い良く飛び出した。

なのは
「レイジングハート…」

フェイト
「バルディッシュ…」

ティアナ
「クロスミラージュ…」

スバル
「マッハキャリバー…」

なのは、フェイト、ティアナ、スバル
「「「「セ?ット…ア?ップッ!…」」」」

そして、四人は各々のデバイスを使い戦闘用のバリアジャケットを纏う。

スバル
「ウイング…ロードッ!」

スバルはウイングロードを展開しティアナと二人で地上に向かった。

なのは
「行くよッ!フェイトちゃんッ!…」

フェイト
「うんッ!…今日こそ奴を倒すッ!もう、迷わないッ!…」

二人はそれぞれの軌跡を描きながら現場に急いだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして、場所は戻りアスカは怒りに燃えるノーヴェ達と交戦していた。

アスカ
「おい…もうちょい、真面目にしねぇか…これじゃあ、張り合いがない…」

アスカはノーヴェのビームソードを受け止めながら余裕の表情を浮かべる。

ノーヴェ
「な、何だとッ！！？…」

アスカ
「はあ…何度も言わせるんじゃねぇ…お前たちと戦っても何も楽しくねぇんだよッ！」

ノーヴェ
「くぅッ！…」

アスカは一気にノーヴェとの間合いを取り、彼女にビームライフルを向ける。

ウェンディ
「そうはさせないッス！」

ウェンディはGNメガランチャーでアスカに向け牽制する。

アスカ
「チッ！…弱ぇくせに手を出すんじゃねぇッ！テメェも死んだ方がマシな口かぁッ！」

アスカはウェンディの攻撃を避けながら3機のファングを彼女に放つ。

ウェンディ
「こ、これはッ！！？チンク姉と同じ武器…きゃあぁぁあッ！…」

ファングの鋭い攻撃を避けれず、ウェンディはガデッサの主砲であるＧＮメガランチャーに破壊されてしまう。

ディエチ
「下がって、ウェンディ！」

ディエチは被弾したウェンディを援護するためにＧＮメガランチャーを構える。

アスカ
「邪魔すんじゃねぇよッ！この虫ケラがぁッ！」

アスカはディエチに向けてさらに3機のファングを差し向ける。

チンク
「もう、これ以上、妹たちは傷つけさせはしないッ！行けッ！…ファング！」

チンクはアスカに全てのファングを放つ。彼女のファングにオレン

ジの鋭利な刃が光る。

アスカ
「遅せぇッ！、遅せぇッ！もっと、真面目に殺れよぉッ！そして、俺を楽しませてくれよぉぉッ！」

アスカは自身に襲い掛かる7機のファングをビームライフルを使い次々と撃墜していく。

チンク
「はあぁぁぁぁッ！…」

破壊されたファングの中から実体剣『ＧＮヒートサーベル』を構えながらアスカに斬りかかる。

アスカはチンクの渾身の一撃をＧＮアトミックブレードで挟み軽々とへし折る。

アスカ
「これで終わりだ…眼帯のお嬢ちゃんッ！」

チンク
（私もここまでか…）

アスカが生きる事に半ば諦めたチンクの胸にＧＮビームソードを突き立てようとしたその時だった。

トーレ
「うおぉぉッ！…チンクッ！」

トーレがＧＮバルカンを連射しながら二人の間に入り、絶体絶命のチンクを助け出した。

トーレ
「チンク、大丈夫かッ！！？」

チンク
「あ、ああ…済まない…助かった…」

トーレ
「良いんだ…別に気にするな…」

ノーヴェ
「本当に大丈夫なのか？チンク姉…」

チンク
「私は問題ない…心配かけたな…」

ウェンディ
「良かったッス…」

アスカ
「馬鹿がッ！何も良かねぇよ…まだ、お嬢ちゃん達の命は俺の手の中にあるんだぜ？」

トーレ
「くッ！、数と戦力的にはこちらが上回っているはずなんだが…」

ディエチ

「万事休す…」

アスカ
「覚悟は出来たか？出来たならさっさと死ね…」

アスカはナンバーズ達にビームライフルの銃口を向けたその時だった。お互いの勢力の間をピンク色の魔力光が駆け抜けた。

アスカ
「今の光りは…ククク…あれだけ痛め付けてやったのにまた証拠にも無く…」

ルシファー
『全くですよ…何と馬鹿な連中なんでしょう…呆れて声もでませんよ…』

アスカは攻撃のあった方角を見た。

なのは
「機動六課ですッ！スメラギ・アスカ、直ちに戦闘行為を止めて大人しく投降しなさいッ！」

フェイト
「今日こそ、貴様を逮捕してみせるッ！…」

そこに居たのはお互いのデバイスを構えながら猛スピードでアスカに突っ込んで来るなのはとフェイトの姿だった。

次回に続く。

命の華（後書き）

今回はクアットロに退場して頂きました。て、言うかほとんど出オチに近かった感じがしました。

ご意見、ご感想、アドバイス等があればお願いします。

散り行く命の灯火（前書き）

お待たせしました。お楽しみ頂けたら幸いです。

散り行く命の灯火

なのは
「機動六課ですッ！スメラギ・アスカを始めとする全員に通告しますッ！直ちに戦闘行為を止めて大人しく投降しなさいッ！」

フェイト
「スメラギ・アスカ…今日こそ貴様を逮捕するッ！覚悟しろッ！…」

フェイトはアスカにバルディッシュを向ける。

アスカ
「おお…怖いね～せっかくの可愛いらしいお顔が台無しだ…」

フェイト
「ふざけるなぁぁッ！」

アスカはフェイトを舐め回すように見ながら挑発した瞬間に激昂した彼女が猛スピードで突っ込んで来た。

アスカ
「さあ、少しは楽しませてくれよ？俺はさっきから人を殺したくて、殺したくて堪らないんだ…」

アスカは彼女の攻撃をビームソードで受け止めながらフェイトの顔を悪意の籠った目で睨み付ける。

なのは
「あなた達はこの地点（ポイント）に向かって…私たちのヘリが待機しているか

ら…」

トーレ
「私たちをどうするつもりだ?…」

なのは
「あなた達を保護します。ここは私たちが押さえるから…」

セイン
「ねぇ、どうするの?チンク姉…」

チンク
「今はこの言葉を信じてヘリが待機している地点に行くしかないだろ…」

トーレ
「私も同感だ…この人数で勝てなかったんだ…」

チンク
「それにコイツ等の方がいくらか奴との戦闘経験は豊富だしな…」

ウェンディ
「じゃあ…話しは決まったッスね…」

ノーヴェ
「早くここから離れようぜ…」

ナンバーズがなのはの言葉に促され場所を変えようと動き始めたその時だった。

アスカ
「おい、誰が勝手に逃げて良いと言ったぁッ？」

アスカは戦闘空域から離脱しようとするナンバーズ達に向けて全てのファングを放った。

なのは
「数が多いッ！…」

フェイト
「バルディッシュッ！…」

なのははプロテクションを張り、フェイトはアスカから一気に離れると自慢のスピードでナンバーズ達に迫るファングを次々と破壊する。

アスカ
「ち、ファング程度じゃこんな物か…」

アスカは残ったファングを元の収納用のコンテナに仕舞う。

なのは
「早く行って…もう、あなた達を庇いきれないッ！」

トーレ
「あ、ああ…済まない…みんな行くぞッ！…」

ディエチ
「うん…分かった…」

ナンバーズ達は戦闘空域から離脱するとヘリの待機している地点に向かって行くのだった。

アスカ
「馬鹿がッ！誰が逃がすかよぉッ！」

ルシファー
『圧縮粒子全面に解放します…』

アスカ
「トランザムッ！…」

アスカの叫びと共に機体が朱色に輝き出す。彼の機体は疑似太陽炉の弱点である稼働時間の問題を核エンジンとのハイブリッドにする事で克服している。

したがって、アスカの機体は限りなくオリジナルの太陽炉に近い性能を持っていた。

アスカは赤い粒子を残し、その場から消えるように離脱したナンバーズ達を追いかける。

フェイト
「例のアレか…なのはッ！…」

なのは
「うんッ！エクシードモード…モード、リリースッ！…」

レイジングハート
『了解しました。モード、リリース…』

なのはの姿がガラリと変わった。

フェイト
「バルディッシュ…私たちも行くよ…真・ソニックフォーム…」

バルディッシュ
『了解…ソニックフォーム…』

フェイトもいつもの姿から露出度の高い姿に変わり、さらにバルディッシュも二刀の剣になる。

そして、二人はそれぞれの光の軌跡を描きながらアスカを追撃した。
途中、なのはは地上で待機しているスバルとティアナに通信を送る。

なのは
「スバル、ティア…聞こえる？」

スバル
『はい、聞こえます。』

なのは
「スメラギ・アスカが予定通りの行動を取ったから例の作戦を実行するよ。」

スバル、ティアナ
『『了解しました。』』

なのは
「ところでティア？」

ティアナ
『はい、何でしょう…』

なのは
「ティアのクロスミラージュ…新機能の具合はどうかな？」

ティアナ
『大丈夫、見事に使いこなして見せます。』

なのは
「分かった…スバルの援護の方はよろしくね…」

ティアナ
『了解しました。』

なのは
「じゃあ、また後でね…」

そう言うとなのはは通信を切った。

フェイト
「なのは…通信は終わった？…」

なのは
「うん…ねぇ、フェイトちゃん…あんまり無理ちゃダメだよ？そのソニックフォームって、スピードが爆発的に上がる代わりにかなり装甲が薄くなっているんでしょ？」

フェイト

「うん…」

なのは
「もしも、アイツの攻撃が当たったりしたら…」

フェイト
「私は大丈夫だから…それよりもなのはの切り札…ブラスターシステムって奴も自分の命とデバイスの寿命を削って力を得る諸刃の剣なんでしょう？」

なのは
「そうだよ…」

フェイト
「なのはの事だから使うなとは言わないけど……」

なのは
「大丈夫…あくまでもこれは最後の手段だし、今日はフェイトちゃんにスバル、ティアナも居る…それよりも急ごう、フェイトちゃん！」

フェイト
「そうだね…これ以上、魔導師狩りの好きにはさせない…ッ！」

なのはとフェイトの二人はそう心に誓うとアスカの元へ急いだのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一方、アスカは離脱したナンバーズに追いつき攻撃を加えていた。

アスカ
「ヒャハハハッ！…まるでカモ撃ちだなぁッ！」

トーレ
「急げッ！援護は私がやるッ！」

ノーヴェ
「だけどッ！……」

トーレ
「良いから早く行けぇぇッ！」

トーレが妹たちを逃がすために気をアスカから反らしたのが間違いだった。

その一瞬を狙ってアスカは一気にトーレとの間合いを詰める。

トーレ
「な、何ッ！！？……」

彼女が気づいた時にはもう遅くトーレのすぐ目の前にはアスカの顔があった。

アスカ
「じゃあな、お嬢ちゃん…これで終わりだ…あの世にいる博士たちによろしくな…」

アスカはそっとトーレの耳元で死神が囁くように別れの言葉をかける。

ウェンディ
「トーレ姉ッ！」

そして、ウェンディが彼女の名前を叫んだ次の瞬間、アスカの手刀がトーレの顔面に突き刺さった。

彼女の頭部からは鮮血が吹き出し、機体は攻撃で受けた衝撃からあちらこちらで青白いスパークを起こしている。

トーレ
「……。」

頭部を手刀で貫かれ絶命したトーレはただ、腕を力無くぶら下げている。

チンク
「そ、そんな……」

チンクは衝撃的な光景に言葉を失う。

ウェンディ
「うわあぁぁぁッ！…」

セイン
「嫌だッ！死にたくないッ！誰か助けてぇぇッ！」

ウェンディとセインの二人はパニックに陥り、オットーとディードはお互いに肩を寄せ合い震えていた。

アスカ
「さあ、次の生け贄は誰だ?…」

アスカは腕に刺さっているトーレの亡骸をまるでゴミを棄てるように投げ捨てる。重力に引かれ地上に落下するトーレの亡骸は途中でオレンジの粒子を撒き散らしながら爆発し、木っ端微塵になった。

ノーヴェ
「お前ぇぇッ!…」

ノーヴェは怒りに身を任せ両手には最大出力でビームソードを展開しながらアスカに突っ込む。

アスカ
「へぇ…次の生け贄はお前か…面しれぇ~…」

アスカは腰からビームソードを抜き構える。

ディエチ
「止めて、ノーヴェ!」

ディエチがノーヴェを止めようと彼女とアスカの間を割るようにGNメガランチャーを放つ。

ノーヴェ
「ディエチ、邪魔をするなぁぁぁッ!」

ノーヴェはディエチに大声で吼え、そしてノーヴェとアスカはお互いに刃を交えた。

アスカ
「やれやれ…怒りで我を失っているのか…」

ルシファー
『ノーヴェお嬢さま…あなたに一つ教えて差し上げますわ…』

ノーヴェ
「何ッ？……」

ルシファー
『戦いはですね…怒りや憎しみに捕らわれた時点で負け確定ですよ…』

ノーヴェ
「ふざけるなぁぁッ！」

アスカ
「そうだぜ？すなわち、俺に負けるという事は死ぬことなんだぜ…」

次の瞬間、ノーヴェの腹部にアスカのビームソードが突き刺さる。

ノーヴェ
「カハッ！…く、クソ…」

アスカ
「馬鹿な野郎だ…止めだ…死ね…」

ルシファー
『さあ、行きなさい、ファング…』

ルシファーの指示で数機のファングがノーヴェの背中に白い牙を突

き立てた。

瀕死の重傷を負い気を失ったノーヴェはトーレと同じく地上に落下する。

ウェンディ
「ノーヴェ…ッ！」

ウェンディは落下するノーヴェをあわてて助ける。

ウェンディ
「ねぇ…ノーヴェ、しっかりするッス！死んじゃ嫌ッスよ！」

ウェンディは必死にノーヴェに声をかけるが彼女は反応しない。

アスカ
「ああ…つまらねぇ、つまらねぇなぁッ！…誰か俺を満たしてくれ奴は居ねぇのかぁぁッ！」

アスカが獣のように叫んだその時だった。金色の閃光が彼の機体の一部を切り裂いた。

アスカ
「チッ…俺の機体に傷をつけやがって…どう落とし前をつける気だぁ？…金髪のお嬢ちゃん？…」

アスカが金色の光が走った方向を見るとそこには、二刀のバルディッシュを構えるフェイトの姿があった。

次回に続く。

散り行く命の灯火（後書き）

ご意見、ご感想、アドバイスなどあればお待ちしております。

傷つく仲間たち（前書き）

お待たせしました。また、今回で物語の一区切りが着くかと思います。ではお楽しみになって下さい。

傷つく仲間たち

フェイト
「ひ、非道い…」

なのは
「こんな事って…」

ウェンディの抱えている傷ついたノーヴェの姿を見てフェイトとなのはは自身の目を疑った。

フェイト
「貴様はこんなにも非道い事をして何とも思わないのかぁッ！」

憤りを隠せないフェイトはバルディッシュでアスカに斬りかかる。

アスカ
「けぇ、前にも言っただろうがッ！別に何とも思ってねぇよッ！むしろ今はなぁ人を殺したくて、殺したくて堪んねぇだよぉッ！」

アスカはフェイトの攻撃をビームソードを交差させながら受け止める。

フェイト
「歪んでいる…貴様は心の底から歪んでいるッ！」

アスカ
「じゃあ、どうするよ?俺を止めれるのかぁッ！」

アスカはフェイトを一気に押し戻すと両肩のシールドに搭載されている連装砲『GNクロスキャノン』を彼女に連続して放つ。

フェイト
「なのはッ！…」

なのは
「うん、エクセリオ？ン…バスタァァ？ッ！」

フェイトがアスカの攻撃を回避しながら距離を取るのに合わせ、なのはが特大の砲撃を発射する。

しかし、なのはの攻撃を全てのスラスターを使用し、下降する事でアスカは回避に成功する。

アスカ
「チッ、嘗めたマネをしやがって…」

アスカが体勢を立て直すために一瞬だけ隙を見せたその時だった。

なのは
「フェイトちゃん、今よッ！…」

なのはは反撃のタイミングを見極めフェイトに素早く指示を出した。

フェイト
「バルディッシュ！…」

バルディッシュ
『了解しました…』

フェイトのかけ声に愛機のバルディッシュが反応した瞬間、アスカの目の前から彼女の姿が消える。

そして、フェイトは縦横無尽に二刀の剣になったバルディッシュでアスカの体を斬りつけた。

アスカ
「は、早い…グッ！…ルシファーッ！トランザムはまだかぁッ！」

フェイトの圧倒的なスピードの前に彼女の姿を捕らえる事が出来ずにアスカは焦る。

ルシファー
『トランザム再起動まであと、１１０秒です…』

アスカ
「早くしろッ！このままじゃ、あと１１０秒も堪えられねぇぞッ！」

アスカは『ＧＮクロスキャノン』と『ＧＮツインライフル』でフェイトを墜とそうとするが今の彼女には掠りもしない。

なのは
「（魔導師狩りがフェイトちゃんの陽動に乗った…反撃のチャンスは今しかないッ！…）あなた達も早く行って！…ヘリまでもう少しだから…」

なのはは地上で待機しているスバルとティアナの二人に指示を出し、そしてナンバーズ達に早くヘリに行くように促すと同時に桜色に光る複数の弾殻（バレットシェル）を自身の周りに展開する。

チンク
「済まない…私を始め妹一同、心から感謝する。」
そう言うとナンバーズ達はなのは達の元から去って行った。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
一方、地上で待機しているスバルとティアナはなのはからの作戦開始の合図を受け取っていた。
ティアナ
「来たッ！…スバル、作戦開始よッ！」
スバル
「うんッ！…じゃあ、ティア、援護ヨロシクね！」
ティアナ
「ええ…任せてッ！…」
スバル
「行くよッ！マッハキャリバーッ！…ウイング…ロード！」
マッハキャリバー
『了解、相棒…ウイングロード展開をします…』
スバルはウイングロードを展開すると猛スピードでアスカの元へ向かった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

なのは
「アクセルシューター」

レイジングハート
『了解、アクセルシューター』

なのは
「シュートッ！…」

そして、なのははアスカに向けて桜色に輝く複数の魔力弾を放つ。

アスカ
「チッ、今日は形振り構わずってところか…ムカつく野郎たちだぁッ！…」

アスカは自身に迫るなのはの誘導型の魔力弾をビームライフルを使い、次々と迎撃して行く。

なのは
「スバル、奴がそっちに行ったよッ！」

スバル
「了解しましたッ！…」

ルシファー
『マスター、新たな魔力反応を感知しました…え？下からッ！！？…』

アスカ

「な、何だとッ！！？…」

アスカはルシファーに言われて下を見るとそこには『リボルバーナックル』を高速回転させながら猛スピードで迫るスバルの姿があった。

スバル
「どりゃあぁぁぁぁッ！」

次の瞬間、スバル渾身の一撃が正確にアスカの顎を捕らえる。

アスカ
「あがッ！……」

アスカは予想以上の衝撃に一瞬、意識を持って逝かされそうになった。

アスカ
「あ、ああ…今のはかなり効いたぜ…青髪のお嬢ちゃんよぉ…」

アスカは頭を激しく横に振りながら何とか自身の意識を保つ。

アスカ
「まさか、伏兵が居たとはな…今回も空の飛べるお嬢ちゃん達だけだと思っていたんだが、いや…とんだ誤算だったぜ…」

スバル
「あなたを大規模争乱と大量殺人などの容疑で逮捕します。」

フェイト

「諦めて大人しく投降しろ…それが身のためだ…」

なのは

「もう、逃げ場ないわ…下からはティアナがあなたを狙ってるから…」

アスカ

「フフフ…フハハハッ！…」

いきなり、アスカは大声で笑い出した。

フェイト

「何が可笑しいッ！」

アスカ

「笑いたくもなるだろう…俺を逮捕するぅ？諦めろだぁッ？今までその台詞を何回俺に言ったぁッ！同じ事を言っては逮捕に失敗して仲間を傷つけて失う…」

なのは、フェイト、スバル「「「……。」」」

なのは達は心に今まで封じ込めて来た辛い出来事をアスカの言葉によって深く抉り出され反論できない。

アスカ

「それにな、俺好みの面しれぇ玩具（オモチャ）も手に入った…」

そう言うと彼女達にモニターを見せる。そこに映されのは『聖王のゆりかご』内にある玉座に座るヴィヴィオの姿がだった。

なのは
「あ、ああ…ヴィヴィオ……」

信じられない映像を目の当たりにしたなのはの思考が止まる。その一瞬をアスカは狙っていたのだ。

アスカ
「隙ありぃぃッ！」

アスカは爪先に赤く煌めくビームサーベルを展開し、なのはに肉薄する。

フェイト
「なのはッ！…」

スバル
「なのはさぁぁんッ！」

スバルはなのはに迫るアスカの攻撃から庇うために咄嗟に間に入る。

そして、次の瞬間アスカが爪先に展開したビームサーベルがスバルの体を斜めに切り裂く。傷口から噴水のように噴き出す。

スバル
「カハッ！…」

アスカ
「やっぱり、死んだ姉貴と一緒で硬てぇなぁ…」

アスカは悪魔のように微笑む。

なのは
「そ、そんな…いやぁぁぁッ！」
さらに、なのはは傷つき力無く落下するスバルを見て激しく取り乱す。
フェイト
「スバル…大丈夫？しっかりしてッ！…」
フェイトは必死に声をかけるが反応がない。また、地上でその様子を見ていたティアナはクロスミラージュを新機能の狙撃モードで起動しアスカを狙う。
ティアナ
「アイツめ…よくも、スバルをッ！…」
ティアナ専用の狙撃モニターのターゲットシーカーはアスカを捕らえようと追っている。
そして、アスカとシーカーが重なりモニターが赤くなった瞬間、ティアナはクロスミラージュの引き金を引いた。オレンジの魔力弾がアスカに向かって飛ぶ。
しかし、アスカは後ろに目でも在るかのようにティアナの魔力弾を易々と回避する。
ティアナ
「う、嘘ッ！！？…避けられたッ！！？…」

アスカ
「甘めぇんだよ…テメェみたいなガキに殺られるかよッ！」

アスカは振り向き様に『ＧＮツインライフル』を連射する。

なのは
「止めてぇぇぇッ！」

なのはの必死の訴えも根っからの戦争屋であるアスカには届く訳もなくティアナは無慈悲な赤黒い粒子ビームに晒される。

なのは
「いやあぁぁぁッ！…」

アスカ
「ハハハ…いい気味だぜ…お前が無能だから、こうやって部下や仲間が傷ついていく…」

なのは
「許さない…お前は絶対に許さないッ！ブラスター１リミット、ブレイクッ！…」

なのははレイジングハートをアスカに向けて魔力をチャージする。

フェイト
「ダメッ！なのは…奴に乗せられているッ！」

フェイトは必死に叫びなのはを止めようとするが怒りで自分を見失っているため彼女の声が届かない。

アスカ
「さあ、お嬢ちゃんその憎しみを込めて俺を撃てぇぇッ！」

なのは
「全力全開ッ！スターライト…ブレイカーッ！」

なのはは自身の持つ最大出力の砲撃魔法をアスカに向けて放つ。

アスカ
「ヒャハハハッ！…この一撃がお嬢ちゃんを滅ぼす狼煙となるのだぁッ！」

ルシファー
『ＧＮフェザーファングを反射（リフレクト）モードで起動します。』

アスカの機体の背中にある翼から大型のファングが射出され、彼の目の前で円を形造りその中心にＧＮ粒子が薄い膜状に張る。

アスカ
「狙いは、金髪と青髪のお嬢ちゃん…」

ルシファー
『了解しました…』

アスカの前で展開したＧＮフェザーファングの盾の角度がフェイトに向けて調整された瞬間、なのはの放った砲撃魔法がアスカを襲った。

なのは
「やった……」

なのはは一瞬、そう思ったがアスカは彼女の考えのさらに上をいっていた。

桜色の極光はアスカの目の前の盾で軌道を変えられフェイトに向かって飛んで行く。

なのは
「フェイトちゃ?んッ！」

なのはは絶叫するが全ては無駄だった…フェイトも迫り来る圧倒的なプレッシャーに回避行動が遅れる。

フェイト
「プロテクション！…」

回避するのを諦めたフェイトは防御魔法で耐え凌ごうとするが彼女は負傷したスバルと光の中に消えていった。

次回に続く。

傷つく仲間たち（後書き）

今回はアスカさん…完全になのは達をフルボッコでしたね。

ここまで痛め付けてしまうと次回からどう彼女らを立ち直らしていけば良いか正直、作者は困っています。良ければ読者の皆さんからのアドバイスをお待ちしております。

引き続き、ご意見、ご感想などもどしどし受け着けています。

堕ちた翼（前書き）

お待たせしました。どうぞお楽しみになって下さいッ！

堕ちた翼

なのははアスカの挑発に乗せられ放ったスターライトブレイカーを彼に返されフェイトとスバルを巻き込んでしまい茫然自失となり戦意を失っていた。

アスカ
「ヒャハハハッ！…こりゃあ傑作だなぁ…怒りで自分を見失い、挙げ句の果てに仲間を攻撃に巻き込むッ！まさに、お笑い草だ…」

なのは
「違うッ！そ、それはあなたがッ！……」

アスカ
「俺がどうした？どちらにしろ魔法を撃ったのはお前だろ？少しは現実を受け入れろ…」

そう言うとアスカはフェイト達が落ちた場所を見るとなのはも釣られて目線を下に向ける。

なのはは震えが止まらない。それもその筈だった。フェイトはスターライトブレイカーを相殺しきれずに全身の至るところに傷があり、スバルはさらにアスカの攻撃も重なり危険な状態だった。

そして、ティアナはビームを受けて左腕に重度の火傷と爆発した際に発生した余波に煽られ地面に数回叩き着けられて足など数ヵ所を骨折と重傷を負い気を失っていた。

アスカ

「さあ、お前もそろそろ潮時だろう…仲間と共にあの世に行け…」

アスカはビームソードを腰からゆっくり抜くとなのはに近づく。

レイジングハート
『マスター、しっかりして下さいッ！…敵が…魔導師狩りが接近していますッ！…』

なのは
「……。」

なのはは依然として精神的ショックから戦闘不能に陥っている。

レイジングハート
『マスター、危険ですッ！…防御体勢をッ！…』

レイジングハートは必死になのはに呼び掛ける。

アスカ
「何を言っても無駄だ…お嬢ちゃんの心と翼は完全に折れた…もう、死んで楽になっちまえ…」

アスカは舌舐めずりしながらビームソードを振り上げた。

レイジングハート
『マスターッ！』

そして、アスカの無慈悲なまでに赤黒く輝く刃はなのはに落とされた。

アスカ
「な、何ッ！！？…」

アスカは驚愕する。なぜならビームソードをなのはが受け止めていたからだ。

なのは
「ありがとう…レイジングハート…あなたのおかげで自分を取り戻すことが出来た。」

アスカ
「チッ、そのままだったらもっと楽に死ねたのに…残念だったなぁッ！」

アスカは左手に持っていたビームソードを素早くライフルに持ち変えると至近距離からなのはに連射する。

レイジングハート
『プロテクション…』

レイジングハートは自身の判断で防御魔法を張る。

なのは
「ありがとう、レイジングハート…」

レイジングハート
『気にしないで下さい…マスターを守るのは私の役目ですから…』

アスカ
「へぇ～お嬢ちゃんのデバイスって便利だな…自動で防御してくれ

るんだな…まあ、そんなの俺には関係ねぇけどなぁッ！」

アスカは再び爪先にビームサーベルを展開するとレイジングハートの張った防御魔法ごとなのはの体を右斜め下から切り裂いた。

なのは
「あぐッ！……」

ビームサーベルで斬られたなのはの傷口からは鮮血が勢い良く噴き出す。

アスカ
「良い様だなぁッ！そらぁッ！もう、いっちょぉぉッ！…」

アスカは回転した際の勢いを殺さずに右手に持ったビームソードでさらになのはを切りつける。

なのは
「こ、こんな所で…殺られる訳にはッ！…」

なのははアスカの連撃を体をおもいっきり反らして回避を試みる。

なのは
「うッ！…しまったッ！…マズイッ！……」

しかし、斬られた彼女の体からは鮮血が流れ出し、悲鳴を上げる。

アスカ
「貰ったぁぁぁッ！」

アスカの赤黒く輝く鋭い刃がなのはの体を交差するように切り裂いた。

そして、アスカのビームソードの切っ先がなのはの左目を通過する。

なのは
「あぁぁぁぁッ！……」

攻撃を受けたなのはは反射的に左手で傷ついた目を押さえる。

アスカ
「ハハハッ！痛てぇだろぉッ！超高温のビームで眼球の水分を沸騰させられるのはッ！…」

アスカはそんな彼女を見ながら腹を抱えて笑う。

なのは
「目がぁッ！…目が痛いよぉぉッ！」

一方、攻撃を受けたなのはは左目を押さえながら余りの激痛に絶叫していた。

なのは
「痛いよぉぉ…痛いよぉぉ…フェイトちゃん…はやてちゃん…誰でも良いから助けてよぉぉ……」

なのはは既に痛みから意識が朦朧としている。

アスカ
「ククク…そんなに楽になりたいか？…任せておけ…お嬢ちゃんが

苦しまないで良いように一瞬で片を付けてやるからよ…」

ルシファー
『そうですね…マスターからのせめてもの情けです…彼女には綺麗に散ってもらいましょう…』

アスカはボロボロになったなのはの腹部にスラスターで加速させた蹴りを叩き込む。

なのは
「……うげぇッ！……」

なのはは蹴られた衝撃で地上に落下する。

アスカ
「これで、エースオブエースも地に堕ちたな…」

ルシファー
『さあ、行きなさい、私の可愛いファング達…彼女の翼を完全にもぎ取ってやるのよ…』

アスカは腰のコンテナからファングを展開すると落下するなのはに向けて射出した。

アスカ
「強者には施しを…」

ルシファー
『弱者には死の制裁を…』

アスカ、ルシファー
「「そして、死者には手向けの花束をッ！…」」

アスカ
「GNステルスフィールド展開…」

ルシファー
『了解しました…死に逝く彼女らには美し過ぎる花ですね…』

アスカの背中の翼と両肩、両腰から膨大な赤い粒子を撒き散らすのだった。

次回に続く。

堕ちた翼（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらよろしくお願いします。

崩壊する正義（前書き）

お待たせしました。どうぞお楽しみになって下さいッ！

崩壊する正義

ここは、六課所有のヘリの中。何とかたどり着いたナンバーズ達は待機していたエリオにキャロからケガの治療をしてもらい、そしてリインからは軽い事情聴取を受けていた。

リイン
「…そうだったんですかぁ～。」

エリオ
「それにしてもフェイトさん達、遅いですね…」

リイン
「そうですねぇ～余りにも時間が掛かり過ぎていますねぇ～。」

キャロ
「まさか、フェイトさん達の身に何かあったんじゃ……」

キャロは心からフェイト達を心配している。

エリオ
「フェイトさん達ならきっと大丈夫だよ…」

リイン
「そうですよぉ～こっちにはなのはちゃん達もいますしねぇ～」

エリオとリインは心配するキャロを勇気づけるが、それに水を指すかようにナンバーズ達が各々に口を開いた。

ノーヴェ
「それはどうかと思うぜ…」

リイン
「それはどう意味ですか?まるで、なのはちゃん達が魔導師狩りに負けるような言いぐさですねぇ…」

ノーヴェ
「考えてみろ…相手は生粋のテロリストだぞ?…」

ウェンディ
「アイツと同レベルのアーマージャケットを使ってさらに私たち姉妹が束になって掛かって敵わなかったんッスよ?」

セイン
「そうだよ…セッテは私の目の前で生きたまんまバラバラにされて…」

チンク
「クアットロは奴のビームで焼き払われ…」

ディエチ
「トーレは手刀で顔面を潰されて死んだ…」

オットー
「あれは地獄です…」

ディード
「未だに震えが止まらない…」

チンク
「私たちもかなりの悪事を働いて来たが奴と比べるとまるで子供の遊びだ…」

それを聞いたキャロはさらに体を震わせる。

キャロ
「エリオくん…やっぱりフェイトさん達が心配…」

エリオ
「うん…リイン曹長、お願いがありますッ！…」

リイン
「ダメです…」

エリオ
「なぜですかッ！！？まだ何も……ッ！」

リイン
「あなた達の考えていることなら分かりますぅ…」

エリオ
「だけどッ！……」

リイン
「ダメだったら、ダメですぅッ！…」

エリオとリインがお互いに言い争いをしていると今まで震えていたキャロが静かに立ち上がりハッチまで歩き出す。

リイン
「何をやっているんですかッ？キャロちゃんッ！」

キャロ
「ごめんなさいッ！やっぱり、こんな所でジッと待っては居られませんッ！ライトニング分隊、キャロ・ル・リシエ…ッ！」

エリオ
「同じくライトニング分隊、エリオ・モンディアルはこれから自分勝手な行動を取りますッ！」

そう言うと二人はロックしてあるハッチを自力で解除すると召喚竜のフリードリヒと共に機外に飛び出して行く。

キャロ
「ケリュケイオン…ッ！」

エリオ
「ストラーダ…ッ！」

エリオ、キャロ
「「セ？ット…ア？ップ…ッ！」」

二人はバリアジャケットを纏い、巨大化したフリードリヒに股がると現場へと向かった。

リイン
『何をしているんですかッ！命令違反は重罪なんですよッ！…』

なおもリインは通信を介し二人をヘリに呼び戻そうと必死に説得す

る。

エリオ
「分かっていますッ！罰なら後からきちんと受けますッ！だから…
…ごめんなさいッ！…」

しかし、二人は聞く耳を立てずに通信を一方的に切るとヘリからど
んどん遠ざかって行く。

リイン
「コラァ？ッ！戻って来なさぁぃッ！…」

言うことを聞かない二人に対し、リインが一人で怒っているとヘリ
のパイロットであるヴァイス曹長から通信が入る。

ヴァイス
『どうしたんッスか？おチビ共が外を飛んでいるけど…出撃許可で
も出したんですかい？』

リイン
「そんな物は出していませんッ！…あの子たちが勝手に…ッ！」

ヴァイス
『何ぃッ！！？それはマズいじゃないッスか！追いかけましょうッ
！』

リイン
「はい、お願いしますッ！…」

リイン達もヴァイス曹長の操縦するヘリでエリオとキャロの二人を

追いかけた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

アスカ
「最高の眺めだな…まさに美しいの一言だ…」

アスカは上空から瀕死の重症を負い気を失っているなのは達を眺めていた。

なのは達は自分が纏っているバリアジャケットの色が分からないほどに血で汚れていた。

ルシファー
『マスター、こちらに接近する反応があります…』

アスカ
「ふん、下で寝んねしているお嬢ちゃん達の仲間か…」

アスカが後ろを向くとオレンジ色に燃える火炎弾が彼を襲う。

アスカ
「危ねぇじゃねぇか…危うく丸焦げになるところだった…」

アスカはそんな事を言うが内心はかなりの余裕があった。

エリオ
「はあぁぁあぁッ！…」

そして、火炎弾に続いてエリオがストラーダをアスカに向けて突進

する。

アスカ
「おっと…意外と早いじゃねぇか…」

アスカは冷静に身を翻しエリオの突進をかわす。

エリオ
「まだまだぁぁぁッ！」

エリオはアスカを薙ぎ払おうと再び接近した。

アスカ
「う～ん、筋は良いんだが攻撃がこう単調じゃ、面白みにかけるんだよな…」

アスカは右側から来るストラーダの薙ぎ払いを片手で受け止める。

エリオ
「な、何ッ！！？…」

キャロ
「エリオくんッ！…シューティング・レイッ！」

キャロも後方から数少ない攻撃魔法でアスカを牽制する。

アスカ
「お前もまた、死んだ方がマシな口か…せっかくの若い命、こんな所でむざむざ散らす事もないだろうに……」

アスカは自身に迫るピンク色に輝く多数の魔力弾を回避するついでにエリオの利き腕を在られの無い方向にへし折った。

エリオ
「うわあぁぁぁッ！…う、腕がぁぁぁッ！……」

キャロ
「そ、そんな……」

衝撃的な光景にショックを受けたキャロの顔がみるみる間に青ざめる。

アスカ
「あ～あ…痛そうだな～。ククク…大して強くも無いのに無理して戦場に出て来っからそうなんだ…」

エリオ
「ううぅ……」

やがて、エリオは地面に落下し折られた腕を押さえながら踞り唸っていた。

アスカ
「さて、あと一人…」

アスカはそう言うと動揺を隠せないキャロの目の前まで一気に距離を詰める。

アスカ
「さあ、どうする？あとはお嬢ちゃんだけだぜ？」

キャロ
「あ…ああ……」

キャロは恐怖からガクガク震えている。

アスカ
「可愛そうに…子犬みたいに震えちゃって…」

アスカは悪意に満ちた笑みを浮かべながらキャロの頬を優しく撫でる。

キャロ
「ヒッ！…」

キャロの背中に禍々しい悪寒が一気に走る。

フリード
「クアァァァッ！」

その時だった。彼女の召喚竜である『フリードリヒ』が後ろからアスカを攻撃を仕掛けようと大きな口を開ける。

アスカ
「はあ…やれやれ、躾の悪いトカゲだなッ！…」

アスカは後ろから噛みつこうとするフリードを避けるとそのままの勢いでフリードの頭部に踵落としを見舞う。

フリード

「クアアァァッ！…」

キャロ
「きゃあああぁぁぁぁッ！」

キャロはフリード共々、地上に落下し地面に激しく叩き付けられた。

アスカ
「ふぅ…どいつもこいつもつまらない奴らだったな…」

ルシファー
『そうですね…』

アスカ
「帰るぞ、ルシファー…」

ルシファー
『あれ？彼女たちに止めは差さないんですか？…』

アスカ
「別に良いだろ？コイツらは俺の玩具だ…玩具は大切にしないとな…」

ルシファー
『わぉ…マスターったら、えげつないですね…』

アスカ
「うるせぇ……」

そう言うとアスカは飛行形態になりアジトに戻って行った。

次回に続く。

崩壊する正義（後書き）

はい、と言うわけで今回は機動六課のフォワード陣が全滅してしまいました。

さあ、彼女たちはここからどう立ち直っていくのか？

そして、アスカの野望を阻止し捕らわれのヴィヴィオを助ける事が出来るのかッ？

次回をお楽しみにッ！

ご意見、ご感想などあればお待ちしております。

翼、再び…（前書き）

お待たせしました。お楽しみになって下さい。

翼、再び…

なのは達が瀕死の重症を負ってから既に1週間が経つが、この間、何を考えているのかアスカによる襲撃は無く、ミッドチルダには平和な時間が過ぎていた。

今日は昨日、命令無視という罪を犯したエリオとキャロの処罰が決定する日でそのために二人は部隊長のはやてに呼び出されアースラ内にある会議室に居た。

はやて
「今日、二人をこの場に呼び出した理由は分かっておるな?」

エリオ、キャロ
「「はい…」」

エリオ
「この前の命令無視の件ですよね?…」

はやて
「そうや…今日はその処分を二人に言い渡すで…ちなみに分かっているかとは思うが二人のやった事はリインを始めとする大事な証人たちの命を危険にさらすかもしれへんかった…」

エリオ
「だけど、部隊長ッ!…」

はやて
「男の言い訳は見苦しいでエリオくん…」

エリオ
「……すみません…」

はやて
「では、二人に処分を言い渡します…二人は命令無視という罪を犯し、さらに仲間の命を危険にさらしたという事で時空管理局法に乗っ取り二人を懲役１０年の刑処します…」

キャロ
「え……」

エリオ
「そ、そんな……」

はやての口から出た衝撃的な言葉にエリオとキャロの思考は完全に停止する。

はやて
「だけどなぁ、この処分には続きがあってな…二人が無茶をやったおかげで瀕死なのはちゃん達は一命をとりとめ、エリオくんとキャロちゃんは重傷を負った…」

エリオ、キャロ
「「……。」」

はやて
「そう言った事を鑑みて二人を宿舎での三日間の拘留までに減罰します…」

エリオとキャロに少しだが生気が戻り、表情が明るくなる。

はやて
「但し、その間は部屋から一歩も出てもアカンし、スバル達との面会も全てＮＧや…」

エリオ
「はい…その事は十分に分かっています…」

キャロ
「八神部隊長、色々とご迷惑をお掛けして申し訳ございませんでした…」

はやて
「キャロ、その言葉ならリインや二人を庇ってくれたヴィータ副隊長に言ってくれな…」

キャロ
「はい、分かりました…」

はやて
「すみません、二人を頼みます…」

はやては通信で外にいる警備員を呼ぶと、二人の制服姿の警備員が部隊長室の中に入って来る。

警備員
「さあ、行きましょう…」

エリオ、キャロ

「「はい…。」」

二人は警備員に連れられて部隊長室を出て行った。

そして、エリオ達と入れ代わりでリインとフェイトが部屋の中に入って来る。

はやて
「ああ、二人共お疲れさんやったな…そっちはどうやった？」

フェイト
「例の彼女たちと話しをしてスメラギ・アスカの事が少し見えて来たよ。」

はやて
「そうかぁ…」

リイン
「はい、魔導師狩りのバックにいたのは多次元犯罪者のジェイル・スカリエッティですぅ～」

フェイト
「彼女たちの産みの親であり、プロジェクトFの根幹である人造魔導師製造の方法を確立した人物…」

はやて
「だけど、奴はクライアントであるドクタースカリエッティを殺してしまった…」

フェイト

「うん…その事は奴を逮捕して聴かなきゃいけない…まだ、奴の企みは分かっていないから…」

はやて
「そやな～まあ、悩んでいても先には進めへん…ッ！」

リイン
「そうですねぇ～」

はやて
「ところで、フェイトちゃん…これからリインと一緒になのはちゃん達の所にお見舞いに行くけど付き合わへん？…」

フェイト
「うん…別にこの後の用事とか無いから付き合うよ…」

はやて
「よっしゃッ♪そうと決まれば早よ行くでぇッ！」

はやてはフェイトの手を掴むとそのまま部屋から出て行く。

フェイト
「わッ！！？…は、はやて…ちょっと待って…ッ！」

はやて
「ほな、リイン？後のことは頼んだで？」

リイン
「はい、任せて下さい♪はやてちゃん達も気をつけて行って来て下さいねぇ～♪」

はやてとフェイトはリインに見送られてなのはが入院している聖王病院へと向かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして、ここはなのは達が入院している病院。

なのは
「う…こ、ここは……」

？？？？
「お、目が覚めたようだな、高町なのは…」

なのは
「あ…シ、シグナムさん？いつ頃、お目覚めになったんですか？…」

なのはがゆっくりと隣を見るとそこには彼女と同じくベッドで横になるシグナムの姿があった。

シグナム
「私もつい先日だ…眠っている間はずっと昔の夢を見てたよ…」

なのは
「そう…何ですか…。」

シグナム
「まあ…そんな事より、今まですまなかった…」

なのは

「え？…どうして、シグナムさんが謝るんですか？」

シグナム
「私があの時、奴を倒せていれば…六課はこんな事には……」

なのは
「ううん…シグナムさんは何も悪くないですよ…」

シグナム
「ん？どうした？いつもと違って元気が無いな…」

なのはを心配してシグナムが声をかけると彼女の表情が少し暗くなる。

なのは
「そりゃあ、無くなりますよ…この間の魔導師狩りとの戦いで私は奴の口車に乗せられてスターライトブレイカーを撃ってそれを返されて……」

そこまで言うとなのは言葉が止まった。

シグナム
「皆まで言うな…お前の顔の傷を見れば、どんなに辛い思いをして来たか分かる…」

なのは
「私…私の心が弱かったせいでフェイトちゃんを攻撃に巻き込んで…それに判断ミスからスバル達にケガさせて、挙げ句の果てにエリオとキャロまで……」

なのはは今まで溜まっていた感情が爆発し、泣き出してしまう。

シグナム
「お、おいッ！！？…泣くんじゃない…私は不器用だからこんな時の対象の仕方が分からないんだ…／／／／」

顔を赤くして慌てるシグナムを見てなのはの表情が明るくなった。

なのは
「グスッ…ごめんなさい、シグナムさん…何だか慌てるあなたを見ていると元気が出て来ました。」

シグナム
「か、からかうな…／／／／」

なのは
「フフフ……」

二人が穏やかに談笑しているとフェイトとはやてが部屋に入って来た。

はやて
「なのはちゃん、目が覚めてたのか？」

なのは
「うん…ついさっき…」

はやて
「そっか…シグナムも具合は良さそうやな。」

シグナム
「はい…これも主はやてのおかげです…」

はやて
「ううん、そんな事はあらへん……」

フェイト
「ところでなのははどうなの？体調は…？」

なのは
「体はまだ痛むけど順調に回復中だよ…」

フェイト
「だけど、なのは…その左目の傷は…」

なのは
「うん…お医者さんが言うにはもう完治は不可能だって…」

フェイト
「そ、そんな…」

フェイトの表情が一気に絶望の色に染まる。それもそのはずだった。今は包帯を巻かれているがなのはの左目の辺りはアスカの攻撃を受け跡が一生残るほどの傷があったのだ。

なのは
「大丈夫だよ、フェイトちゃん…」

なのはは痛む体を起こしてフェイトを優しく抱き寄せた。

フェイト
「な、なのは…は、恥ずかしいよ…みんなが見てる／／／／…」
フェイトは恥ずかしさから顔を真っ赤にして俯く。
なのは
「フフフ…フェイトちゃん、可愛い…♪」
はやて
「本当や～子供みたいやな～♪」
顔をほっこりさせて和むはやて。
フェイト
「もぉー、二人ともいい加減にしなさーいッ！」
こうして、三人の揺ったりした優しい時間は過ぎて行くのだった。
次回へ続く。

翼、再び…（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしています。

決戦に向けて（前書き）

お待たせしました。今回はインターバルみたいな物です。

決戦に向けて

ここはミッドチルダの中心街。今回アスカはここである取引を行うことになっている。

アスカ
「チッ、遅せぇな…」

ルシファー
「全くですね…予定の時間から、かれこれ15分以上は過ぎていますし…」

二人は取引相手がなかなか来ないのに苛立っているとアスカ達の目の前に黒いスーツ姿にサングラスを掛けた女が現れた。

女
「お待たせしました…あなたが巷を騒がせている、魔導師狩りですね…」

アスカ
「そうだが、その名前で呼ぶのは止してくれ…」

女
「あら?そう?格好いいじゃない…♪」

アスカ
「それに貴様が例の武器商人だな?…」

女

「ええ、そうよ…」

アスカ
「今まで何をしていた?…２０分の遅刻だぞ…」

女
「ごめんなさいね。ちょっと道が混んじゃって…」

アスカ
「言い訳はいい…早いとこ取引を始めようじゃないか…」

女
「そうね…だけど、こんな人の多い場所で本当に大丈夫なの?…」

アスカ
「別に問題はないだろ…それで例の物はどこにあるんだ?…」

女
「それならここに…ご確認を……」

女は持っていたシルバーのスーツケースをアスカの前に差し出す。

アスカ
「ほう…これが『ジュエルシード』ってヤツか…」

アスカがケースを開けるとそこにはガラスの小瓶の様な物に密閉された水色に輝く宝石が入っていた。

ルシファー
「綺麗ですね…それにしても、本当にこんな小さい物が世界を壊す

程の力を持っているのですか？…」

女
「もちろんですわ…それで、こちらの頼んだ物は揃っていますの？」

アスカ
「ああ…まずは前金で５０００万だ…」

アスカも同じく武器商人の女に持っていたスーツケースを渡す。

女
「ええ、確かに…」

アスカ
「後は直接アンタの口座に振り込む…」

女
「分かった…じゃあ、これで取引は成立ね…」

そう言うと武器商人の女は席を立ち、その場から消えるように立ち去った。

アスカ
「じゃ、俺たちも欲しい物は手に入ったし帰るか、ルシファー。」

ルシファー
「はい、そうですね…」

二人もアジトに戻ろうとしたその時だった。近くの銀行から数発の銃声が聞こえる。

ルシファー
「ん？マスター、今のは銃声ッ！！？…」

アスカ
「みたいだな…大方、どっかの小物がバカやってるんだろよ？試しにちょっと見に行って来っかな？…ルシファー、このケースを持って先に車まで戻って待っていろ…」

アスカはルシファーにスーツケースを渡すと銀行の方へ歩き出した。

ルシファー
「あ、マスターッ！危険ですから…ッ！」

アスカ
「大丈夫だ…心配しなさんな…」

アスカはルシファーと別れて銀行の前まで来た。銀行は防犯シャッターが閉まっており中の様子が分からない。

そして、そこには黒山の人だかりが出来ていた。どうやら、強盗を逮捕するための管理局員は、まだ到着してはいないようだ。

アスカ
「チッ、中の様子が分かんねぇんじゃ、わざわざここまで来た意味がねぇなぁ…」

アスカがつまらなそうな顔をしているとルシファーが念話を使い彼に話しかけて来た。

ルシファー
『マスター、そっちの様子はどうですか？』

アスカ
『どうもこうもシャッターが閉まっててよぉ…中の様子がさっぱり分かねぇ…』

ルシファー
『中の様子が分からないのでは仕方ないですね…早く帰りましょう…ヴィヴィオにルーテシア達が待っていますから…』

ルシファーが車まで戻るようにアスカに促す。

アスカ
『……嫌だね…』

いきなり、アスカはルシファーの指示を断った。彼の言葉に彼女は驚く。

ルシファー
『な、何を言っているんですかッ！！？…私たちに時間が無いんですよッ？』

アスカ
『まあ…確かにな…』

ルシファー
『だったら、分かっていますよね？…私たちは帰ってからジュエルシードの兵器転用実験とか色々とやることがあるんですよ？…』

アスカ
『んな事は百も承知だッ！…』

ルシファー
『だったら、なぜ？…』

アスカ
『ったく…ごちゃごちゃと、うるせぇなぁ…とにかくもう少ししたら戻って来っから、大人しく車で待ってろッ！…いいな？』

そう言うとアスカは一方的に念話を止めてしまう。

ルシファー
『あ、マスターッ！！？勝手な行動は慎んで』「って切られたッ！！？…もうッ？マスターったらどれだけ私がマスターの事を心配しているか知って欲しいわ…ッ？」

ルシファーは子供みたいに駄々をこね自分勝手に動くアスカに対して少し腹を立てていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

アスカ
「ルシファーの奴にはちょっと悪い事をしたか？…まあ、お詫びに何か買って行くか…」

アスカはそんな事を考えながら自身の前に居る野次馬たちをを退ける。

野次馬１

「う、うわッ！！？…いきなり何すんだッ！」

野次馬２
「あなた、危ないですよッ！…管理局員が来るまで待っていた方が…」

アスカ
「うるせぇ…銀行強盗なんぞこの俺がブチ殺して来てやんよ…」

アスカは自身の身を心配する野次馬たちを静かに睨み付けた。

そして、睨まれた野次馬たちは一瞬、息を飲む。アスカの視線はそれだけで人を殺せそうな勢いだ。

アスカ
「さて、今回は正義の味方でも気取ってみっかな…」

アスカは悪意のこもった笑みを浮かべると銀行内のスキャンを始める。彼は以前、なのはとの戦闘で瀕死の重傷を負い、その際にスカリエッティーから治療がてら戦闘機人への改造手術を受けていた。

その為、アスカの体のあちこちに内蔵式の兵器など仕込まれている。

アスカ
「……強盗は全部で三人…子供が人質に捕られているな…」

野次馬３
「子供が人質にッ！！？…やっぱり下手に動かねぇ方が…」

アスカ

「大丈夫だ…テメぇは早く管理局の奴らを呼んでおきな…」

そう言うとアスカは右手の甲に内蔵してある小型の3連式のマシンガンを展開し、銀行の防犯シャッターに向けて構える。

野次馬2
「な、何だッ!!?」

野次馬1
「いったい、旦那の体はどうなっているんだッ!!?」

驚愕する野次馬たち。そして次の瞬間、防犯シャッターに向けてマシンガンの銃口が一斉に火を噴いた。

もの凄い勢いでアスカの手の甲から薬莢が排出されていき、彼の射撃は30秒ほど続いた。

アスカ
「制圧射撃、終了ッと…さて…強盗ども邪魔するぜぇッ?…」

そう言うと、アスカは右腕の超小型ロケット弾を止めと言わんばかりにブッ放した。

そして、着弾したロケット弾は特大の爆音と共にシャッターの一部を吹き飛ばし、人が一人通れるほどの穴を開ける。

アスカ
「ご開帳ぉ〜〜♪」

アスカは半ばふざけながら銀行の中へ入った。

三人の強盗の内、二人はアスカの制圧射撃で全身を蜂の巣にされ絶命し、残り一人も負傷してその場に倒れている。

アスカ
「おい、大丈夫か?坊主…早くママの所に行ってやんな…」

子供
「ママぁぁ〜ッ!」

人質にされていた子供は母親と思われる女性の所に走って行った。

アスカ
「よぉしッ!テメぇら、ケガはねぇかッ?」

アスカの凶行に怯える人質たち。

アスカ
「ほら、さっさと外に出ろッ!」

アスカに促され人質たちは彼の開けた穴から順番に外に出て行った。

アスカ
「さてと…具合はどうだ?どこか痛むか?」

アスカは負傷し倒れている強盗の傷口を踵でおもいっきり踏みつける。

強盗
「うぐぅあぁぁぁッ!…」

苦痛に歪む強盗の顔を見ながら笑っている。

アスカ
「なぁ…どうして、こんなちんけな銀行を襲ったりしたんだぁ？」

強盗
「うぅ、うるさい…ッ！お前には関係ないだろ…」

アスカ
「確かにな…だけどよぉ、悪党ならもう少しド派手な事をしなきゃいかんだろ？…」

強盗
「な、何が言いたい…」

アスカ
「お前みたいな小物がいると俺は困るんだよ…」

強盗
「ど、どういう事だ…うぅッ！…」

アスカ
「さあな…お前には関係のない事だ…死ね…」

次の瞬間、アスカは何の躊躇いも無く強盗の頭を撃ち抜いた。

強盗
「あうッ！……」

そして、生き残った強盗もアスカの手によってとうとう殺害されてしまう。

アスカ
「ふぅ…害虫駆除完了ッと…ルシファーも待っているし早く戻るか…」

アスカは一仕事をし自分の車に戻ろうとしたその時だった。

？？？？
「時空管理局ですッ！あなたを強盗の容疑で逮捕しますッ！大人しく投降しなさいッ！…」

アスカの後方から管理局員の声が聞こえてきた。

アスカ
「ん？聞いた事のある声だな…」

アスカは両手を頭の後ろで組みゆっくりと振り向いて管理局員の顔を見る。

そこに居たのはクロスミラージュを構えたティアナの姿があった。

アスカ
「フン…どこかで聞いた事のある声だと思ったが、やっぱり六課の嬢ちゃんだったか…」

ティアナ
「あ、アンタは…ッ！！？どうしてこんな所にッ！…」

アスカ
「どうしてって…お前たちが来るのが遅いから、俺が代わりに解決してやったんだよ…感謝しな…」

ティアナ
「感謝しろですって？ふざけないでッ！」

アスカ
「ふざけてなんかいないさ…じゃあ、俺は帰らせてもらうぜ。車でルシファーも待たせているしな…」

アスカはルシファーの元へ戻ろうと組んでいた腕を解いた。

ティアナ
「動かないでッ！」

ティアナは威嚇のためにアスカの足元に向けてクロスミラージュの引き金を引く。

アスカ
「おっと、危ねぇじゃないか…何しをやがる…」

アスカは後ろへ素早く下がりティアナの魔力弾を回避した。一方、ティアナは外で情報収集をしているフェイトへ通信を入れ、助けを乞う。

ティアナ
「フェイト隊長、応答してください。問題が起きました…」

フェイト

『どうしたの？ティアナ…問題って…』

ティアナ
「店内に魔導師狩りが…スメラギ・アスカが居ますッ！…」

フェイト
『何ですって！！？…分かった、すぐそっちに行くから！…』

ティアナ
「了解しました…出来るだけ早くお願いします…」

ティアナはフェイトとの通信を切る。

アスカ
「話しは終わったか…」

次の瞬間、アスカはティアナとの間合いを一気に詰めると彼女の構えていたクロスミラージュを掴むと下に向けて引き金を引く。

ティアナ
「あうッ！…」

クロスミラージュから放たれたオレンジ色の魔力弾がティアナの足の甲に当たり、一瞬だが彼女が怯んだ隙にアスカは彼女の腹部に肘打ちを入れ倒す。

ティアナを倒したアスカは急いで銀行の外に出た彼はバルディッシュ構えたフェイトと鉢合わせをした。

フェイト

「貴様ッ！ティアナはどうしたぁぁッ！」

フェイトは激しい剣幕でバルディッシュを横に薙いだ。

アスカ
「チッ！…お嬢ちゃんなら中でお寝んねしてるよッ！…」

アスカはフェイトの攻撃をおもいっきり背を反らして回避する。

フェイト
「な、何ッ！！？…」

ルシファー
「あ、マスターッ！こんな所で何をやっているんですかッ？」

その時だった。アスカの事を心配したルシファーが自分で車を運転して彼の前に現れた。

アスカ
「おぅ、ルシファー、ナイスタイミングじゃないか…」

アスカは上体を起こすと急いでルシファーの運転する車に乗り込む。

フェイト
「逃がさない…ッ！」

フェイトは踵を返しアスカの元へ向かう。

ルシファー
「マスター、頭を退けて下さい…」

ルシファーの指示に従いアスカは頭を退けた次の瞬間、彼女は手に持った拳銃をフェイトに向けて数発放った。

フェイト
「あぐッ！……」

ルシファーの放った弾丸の一発がフェイトの右肩に当たり、撃たれた衝撃でフェイトはその場に倒れてしまう。

捜査員
「大丈夫ですかッ!?フェイト執務官ッ！」

銃声を聞き付けた他の捜査員が駆け寄る。その隙にアスカは車に乗り込んだ。

アスカ
「いい気味だな、お嬢ちゃん…」

フェイト
「ま、待ちなさい…ッ！」

アスカ
「じゃあな、お嬢ちゃん…今回は貸し一つだぞ…」

フェイト
「な、何を勝手な事を…うッ！……」

アスカ
「ま、無理はするな…おい、早く出せ…」

ルシファー
「……了解しました…」

アスカ達はその場から立ち去って行った。

その後、他の空戦魔導師や捜査員がアスカ達の追跡を試みたがルシファーの卓越したハンドル捌きに翻弄され今回も逮捕出来ず仕舞いだった。

次回に続く。

決戦に向けて（後書き）

ご意見、ご感想を待っています。

聖王のゆりかご（前書き）

お待たせしました。お楽しみ下さい。

聖王のゆりかご

ここは『聖王のゆりかご』内にある一角…そこには死んだ『ジェイル・スカリエッティ』が長年の研究を成果である人造魔導師や戦闘機人を入れた培養器が大量に置かれておりその内の一つに入っている女性を静かに見つめる少女がいた。

アスカ
「ん？あそこに居るのは…ルーテシアか？…」

ルシファー
「みたい…ですね……」

アスカとルシファーは培養器を見つめるルーテシアに近寄る。

ルーテシア
「あ…アスカ…どうしたの？こんな所で…」

アスカ
「いや、別に…それにしても、その女性（ヒト）はお前の母親だったな？…」

ルーテシア
「うん……」

アスカ
「綺麗なお女性（ヒト）だ…」

ルシファー
「ええ…まったくです…」

アスカ
「それでどうだ？…この間、お前に渡したレグナント2号機の調子は…？」

ルーテシア
「大丈夫…別に問題はないよ…」

アスカ
「そうか…」

ルーテシア
「うん…アギトのフォローもあるし…」

アスカ
「じゃあ、やれるな…行動開始は明日だ…」

ルーテシア
「分かった…」

そう言うとルーテシアは静かにアスカの元を去って行った。

ルシファー
「本当に大丈夫でしょうか、彼女は…？」

アスカ
「ま、今はルーテシアを信じようじゃないか…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

場所は変わりここは時空航行艦『アースラ』内部にある簡易模擬戦場。

そこでは只今、シグナムとヴィータの両名が時空管理局地上本部から渡された『擬似リンカーコア』のテストを行っていた。

この『擬似リンカーコア』は以前になのは達が命懸けで保護したナンバーズ達が使用していた専用機の『擬似太陽炉』を兵器開発メーカーの研究者が解析、製作した物を秘密裏に地上本部のレジアス中将が接収し、実験的に機動六課に回していたのだ。

シャマル
『二人ともコアの調子はどう?』

シグナム
「出力安定…私のレヴァンテインとも完璧に同調している…」

ヴィータ
「そうだな…アタシのアイゼンとの相性もバッチリだ…」

シャマル
『そう、良かった…じゃあ、テストはここでお仕舞いにしましょう。』

シグナム
「ああ、了解した…それにしても地上本部はこんな代物を良くこの短期間で作り上げたもんだ…」

ヴィータ
「そうだな…奴らにしては仕事が早い…」

二人がバリアジャケットを解除しながらそんな話しをしていると部隊長のはやてが二人の前に現れた。

はやて
「二人とも、実はなその話しにはどうも裏があるみたいなんや…」

シグナム
「主はやて、それはどういう意味ですか?」

ヴィータ
「そうだぜ…このコアは地上本部の奴らが作った物じゃないのか?」

はやて
「ああ…私が仕入れた話しによると実はこのコアを本当に開発したのは兵器開発メーカー『カレドヴルフ』みたいや…」

シグナム
「でもどうして…地上本部はこんな回りくどいやり方をしたんだ…」

シャマル
「おそらく、私的にはこの話しの裏には地上本部のレジアス中将が一枚咬んでいると思います。」

はやて
「確かに私もそう思ったで…」

ヴィータ
「まあ、あのオッサンなら考えられるな…」

はやて
「だから私は正直その意味の分からないコアを二人に使ってもらうのは嫌なんや…」

シグナム
「主はやて、大丈夫です…その事については前に言った通り私たちの気持ちは変わっておりません…」

ヴィータ
「そうだぜ、はやて。これでおもいっきりアイツをぶっ飛すことができる！」

シグナム
「ああッ！…これまでの借りを次こそ返してみせる…ッ！」

はやて
「すまんなぁ…二人とも満足にリハビリもさせんとこんな無茶な事ばかりさせて…私は主、失格やな…」

シグナム
「そんな事は決してありませんッ！」

ヴィータ
「はやてはいつでもどんな時でもアタシらを守って来たじゃないかッ！…」

シャマル
「そうですよ…今、ここには居ませんがザフィーラもきっと同じ気持ちです…ッ！」

シグナム達はいつもより弱気な姿を見せるはやてを励ます。

はやて
「堪忍や…ありがとう…みんな…」

シグナム
「良いんですよ…気にしないで下さい…」

その時だった。はやての元にブリッジから緊急通信が入った。

シャーリ
『大変ですッ！八神部隊長、至急ブリッジにお戻り下さいッ！…』

はやて
「何があった！」

シャーリ
『魔導師狩りが動き出しましたッ！』

通信画面に映し出された物に驚愕し、目を疑う。

はやて
「何やねん…あれは…」

シグナム
「あれはまさか…」

ヴィータ
「聖王のゆりかご…」

はやて
「あれがナンバーズ達が言っていた次元世界最強の艦（フネ）…ッ！」

シャマル
「だけど、あの艦の上部にある塔は以前は無かったはず…」

リイン
『おそらくあれは最近、建設された物ですぅ。』

はやて
「と言うことはあの塔は魔導師狩りか保護したナンバーズ達を造り出したジェイル・スカリエッティが取り付けた物か…」

ヴィータ
「でも、あれはいったい何に使う物なんだ？…」

はやて
「とにかく、今は急いでブリッジに戻るでッ！」

シグナム
「了解しました…ッ！」

四人はブリッジに急いだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ブリッジに戻った四人はさらに自分たちの目を疑う。通信画面に映っていたのはなんとアスカの姿だった。

アスカ

『俺は魔導師狩り事スメラギ・アスカ…我々はイノベイターでありこの世界を破壊し再生する者…』

はやて
「こ、これはどういう事やッ！」

シャーリー
「この通信は全チャンネルで流されています。」

アスカ
『俺たちは今から下等な人間どもを粛正し新たな世界秩序を作り出す…さあ、見るがいいッ！…俺から貴様たちへ贈り物だ…』

その時だった。聖王のゆりかごの上部に設置された塔から眩いばかりの光が迸り、極太の光の筋が天高く空を貫く。

「「きゃあぁぁッ！」」

はやて
「な、なんやぁぁッ！この光はぁぁッ！」

空を貫いた光の輝きは1～2分ほど続いた。

はやて
「今の光はい、いったい…」

シャーリー
「大変ですッ！第8臨海空港が消滅しましたッ！」

はやて

「なんやてッ！シャーリー、生存者は…ッ！」

シャーリー
「ちょっと待って下さいッ！そんな…せ、生存者は０…絶望的です…」

はやて
「なんて言う事や…」

はやてを始めとする機動六課のメンバーは信じられない光景に絶望する。

アスカ
『気に入ってくれたかね、ミッドチルダの人間諸君？…どこに逃げても無駄だ…この俺からは誰も逃げられない…ハハハハッ！…』

アスカの通信は彼の高笑いと共に途切れてしまった。

はやて
「くそったれが…アイツは獣（ケダモノ）と一緒やッ！…」

なのは
「本当にアイツは命を何だといるの…ッ！」

フェイト
「許せない…ッ！」

はやて達はアスカの凶行に怒りを憶える。

はやて

「機動六課、全員に継ぐでッ！私たちはこれから魔導師狩りを全力で逮捕するッ！アースラを聖王のゆりかごへ…ッ！」

ルキノ
『了解しましたッ！』

はやて
「隊長陣とフォワードメンバーはブリーフィングをするでッ！会議室に集合ッ！…」

隊長陣、フォワード
「「了解しましたッ！」」

はやて
「他の隊員は現状を維持…追って魔導師狩りの動向と今後の管理局からの通信などを頼んだでッ！」

「「は、はいッ！…」」

はやて
「以上ッ！解散ッ！」

はやての指示で六課のメンバー達は自身の場所に向かった。

次回に続く。

聖王のゆりかご（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

巨人の刃（前書き）

お待たせしました。今回からクライマックスに突入ですッ！

巨人の刃

ここはクロノ提督の座乗する次元航行艦『クラウディア』。

クラウディアＣＩＣ
「艦長ッ！光学カメラが目標を捉えましたッ！」

クロノ
「了解した…これより我々は地上本部、航空魔導師らと共に敵艦への時間差による総攻撃を敢行するッ！総員に打電ッ！我に……」

クラウディアＣＩＣ
「待って下さいッ！…」

クロノ
「いったい、どうしたッ？…」

クラウディアＣＩＣ
「敵艦の砲塔が起動しておりますッ！この角度は……第２グループの地上本部部隊ですッ！」

クロノ
「な、何だとッ！！？…至急、向こうの指揮官に退避勧告をッ！…」

クラウディアＣＩＣ
「駄目ですッ！間に合いませんッ！……」

次の瞬間、轟音と共に『聖王のゆりかご』の上部に設置された大型

の砲塔から青白い極大の閃光が発射された。

第２グループ部隊員１
「な、何だ？一瞬、空が光った……」

第２グループ部隊員２
「ま、まさか、あれ…は……」

そして、射線軸上に展開していた地上本部の航空部隊はゆりかごからの容赦のない攻撃に成す術もなく薙ぎ払われてしまった。

クラウディア隊員
「「お…おぉ……」」

次元航行艦クラウディアに乗艦していた搭乗員たちは空を割るように走る一筋の禍々しい光に目を奪われる。

クラウディアＣＩＣ
「艦長ッ！今の攻撃で第２グループの約８割が消滅しましたッ！」

クロノ
「何と言うことだ……」

クラウディアＣＩＣ
「艦長ッ！攻撃許可を…ッ！このままではッ！…」

クロノ
「浮き足だつなッ！あの質量兵器が連射できるとは限らない…」

その時だった。クラウディアの横を随伴していた別の艦が赤黒い粒

子ビームで貫かれ爆発、轟沈する。

クロノ
「何だッ！！？今のはッ！…どこからの攻撃だッ！」

クラウディアＣＩＣ
「前方、正面に魔導師狩りを確認ッ！」

クロノ
「くッ！…こんな時にッ！……」

ルシファー
『フフフ…私たちとあなた方とは射程が段違いなんですよ…』

アスカ
「さあ、始めようぜ…楽しい狩りをな…ルシファー、護衛のガジェットとＧＮ－Ｘたちを出せ…ッ！」

ルシファー
『了解しました…』

アスカの指示でゆりかごの射出口から次々とガジェット達が出て来た。

クラウディアＣＩＣ
「艦長ッ！早く攻撃命令をッ！…このままでは全滅ですッ！」

クロノ
「総員、攻撃開始ッ！第２グループの生き残りも我々の艦隊に合流し攻撃を開始せよッ！」

力と力とのぶつかり合いが始まった。時空管理局の隊員たちは死力を尽くして戦うがＧＮ－Ｘやアヘッドの厚い防衛線に阻まれて聖王のゆりかごに取りつく事ができない。

クロノ
「何としてでもあのゆりかごに取りつくのだッ！あれを二度と撃たせるなッ！」

外で必死に戦う魔導師たちを尻目に数機のＭＳが味方防衛線を突破し、その内の１機のアヘッドがクラウディアに接近、同艦の艦橋に向けてビームライフルを構える。

クラウディアＣＩＣ
「艦長ぉぉッ！」

艦内はパニックに陥る。

クロノ
「こ、ここまでなのか…ッ！」

クロノ・ハラオウンが半ば諦めたその時だった。金色に輝く魔力弾がアヘッドを貫き破壊した。

フェイト
『こちら、機動六課所属、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官です。この大量破壊兵器、破壊ミッションは私たちの部隊で受け持ちますッ！…クロノ提督は戦力立て直しの為に一度、後方に下がってください…』

クロノ
「あ、ああ…すまない…助かった…それと、これがあの兵器の詳細データだ…そちらに送る…」

フェイト
『うん、ありがとう、お兄ちゃん…』

クロノ
「フェイト執務官…今は任務中だぞ…何だ…その…お兄ちゃんは止めてくれないか？…」

フェイト
『あ、ごめんなさい…お兄ちゃん…』

クロノ
「はぁ…やれやれ…とにかく気を付けるんだぞ…敵の防衛線の中に魔導師狩りが混ざっている…」

フェイト
「うん、了解しました…ありがとう…」

フェイトはバルディッシュを構えると戦闘の真っ只中に向かって行った。

アスカ
「チ、まただ…ったく、俺の獲物を取らないでくれよ…」

アスカが悪態をついているとルシファーが前方にフェイトの反応を捉える。

ルシファー
『この反応は……マスター、彼女ですッ！…』

アスカ
「何？……」

フェイト
「見つけたぞッ！スメラギ・アスカ、覚悟ぉッ！」

フェイトはバルディッシュを構え、立ち塞がるＭＳ部隊を高速で斬り伏せながらアスカに迫る。

アスカ
「おお、久しぶりじゃないか、金髪のお嬢ちゃん…今日は一段と気合いが入って…」

アスカは悪意に満ちた口調でフェイトを挑発する。

フェイト
「貴様は人の命をいったい何だと思っているんだぁぁッ！」

フェイトの気迫は凄まじく鬼気迫るものがあり、一対の大剣になったバルディッシュでアスカに斬りかかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

場所は変わり、ここは次元航行艦アースラのブリーフィングルーム。
只今、陽動として先行しているフェイトを除いたフォワードメンバーが集まっていた。

はやて
「全員、集まっとるな…さっき、フェイト隊長から例の大量破壊兵器のデータが来たで…リイン頼む…」

リイン
「はいですぅ～。」

リインの操作で画像がアップされる。

なのは
「こ、これは……」

はやて
「コイツはな『魔力変換式超長距離戦略自由電子レーザー砲』…通称、『エクスキャリバー』と言われとる…」

シグナム
「エクスキャリバー…」

リイン
「この兵器は聖王のゆりかごの魔力炉から供給される膨大なエネルギーをここの『電磁波光共振部』と呼ばれる加速器でレーザーに変換して撃ち出す仕組みですよ～。」

ヴィータ
「でもよぉ、はやて…光っていうのは真っ直ぐ進むのが普通だろ？…」

スバル
「でも、あの空港を壊滅させた攻撃はどうやって…」

ティアナ
「そうですよ。距離もかなりあるし、理論上は無理じゃないですか？」

なのは
「それについては…リイン、続きをお願い…」

リイン
「はいです～。これを見てください。魔導師狩りはこの兵器の軌道上に反射鏡のような物を装備したガジェット2型を多数配置してるです～。」

なのは
「これの設置場所とレーザーの屈折点を調整すればミッドチルダの全域をカバーできる…」

シグナム
「まさに悪魔の兵器だな…で、どうやってコイツを破壊するんだ？」

ヴィータ
「死角が無いんじゃ…どうにもなんねぇぞ…」

はやて
「大丈夫…プランはある…いいか良く聞いてくれ…これはなのは隊長とティアナの精密な連携がプラン成功の鍵を握っている。」

ティアナ
「え……。」

はやて
「頼んだで……」

なのは
「了解しましたッ！」

ティアナ
「ちょ、ちょっと待って下さいッ！どういう事ですか、八神部隊長ッ！」

はやて
「ティアナには、エクスキャリバーの弱点である電磁波光共振部の精密狙撃をしてもらう…」

ティアナ
「む、無理ですッ！…私そんな大役できませんッ！…」

はやて
「時間も無い…他のメンバーは手筈通りに…」

「「「了解ッ！」」」

焦るティアナを無視してはやてはブリーフィングルームを出る瞬間になのはに目配せをして行った。

なのは
「ティア…ちょっと良いかな？…」

ティアナ
「は、はい…」

なのは
「これはティアにしか出来ないの…」

ティアナ
「無理ですッ！私にはスバルみたいな爆発的な突破力もエリオの魔力変換資質、キャロの希少能力（レアスキル）も無い…私のような凡人にはこんな大役は…」

その時だった。なのはがティアナの頬を張った。

ティアナ
「ぁああ……」

いきなりの出来事に驚きティアナの思考が一瞬、停止する。

なのは
「ごめん…だけど、甘ったれるのもいい加減にしなさいッ！ティアは凡人なんかじゃないッ！ティアにはティアだけの良いところがあるッ！貴女の事は必ず私が守る、だから安心して自分の任務に集中しなさい…」

なのはは必死にティアナを説得する。

ティアナ
「だ、だけどッ！…」

なのは
「良い？…ティアは一人じゃない…私が…ううん、みんなが着いてるから…」

なのはは優しくティアナを抱き寄せ耳元で優しく囁くように励ます。

なのは
「もう、大丈夫だよね？」

ティアナ
「はい…ありがとうございます。」

なのは
「それじゃあ、行きましょう…ッ！ミッドチルダに住む人々の命を……」

ティアナ
「そして、魔導師狩りに捕らわれたヴィヴィオを助けるために…ッ！」

二人は意を決するとブリーフィングルームを出て行くのだった。

次回に続く。

巨人の刃（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしています

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0558s/

魔法少女リリカルなのはStrikerS…蘇りし黒き堕天使

2011年11月22日02時54分発行